

日本への回帰

大学教官有志協議会 編
国民文化研究会

第13集

大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会
編

日本への回帰 (第十三集)

—第二十二回学生青年合宿教室(雲仙)の記録より—

石油ショック以来の、深刻な円高不況の中で、政策を持たなかった戦後日本のほとんど唯一の政策であった経済第一主義が、明白な破綻を示し始めたことは周知の通りである。最近の国内の政治の動きの中で顕著な傾向の一つは、いはゆる「革新」内部の深刻な対立抗争である。社会党内の協会、反協会両派の感情むき出しの派閥抗争は、きれいごとのタテマエ論のかけにかけられた、この党の古い体質をまざまざと見せつけた。「革新のカナメ」どころではない。彼らの教条主義が、十年一日のごとく唱へてゐる福祉の増大や分配の平等化の原則は、外ならぬ自民党政府によって、大半は達成されてしまった。大義名分を「敵」に先取りされてしまったこの党が、良識ある世の大人達から見捨てられるのは余りにも当然である。かつては「無謬の党」として、青年達の信仰の的であった共産党の凋落ぶりも目ざましい。最近の選挙における、うち続く大敗北をきっかけに表面化した宮本・袴田抗争は、権力闘争の中では永年の同志も一瞬にして反逆者として肅正される、この党の冷酷な家父長的性格を衆人の前に露呈した。彼らのタテマエと現実の落差の大きさは、今や揶揄の対象として、週刊誌のゴシップ欄をにぎはしてゐる。昨年七月、ジャーナリズムが、ほとんど既定の事実であるかのやうに報道した「与野党逆転」が、からうじて阻止されたのは、このやうな革命陣営の内部分裂といふ失点によるも

のであって、「哲学」を持たぬ保守が緊張感を失へば、均衡は一瞬にして崩れ去るであらう。

国外に目を転じて見ても、状勢は依然として険しい。ソビエトでは、昨年五月、ポドゴルヌイ最高幹部会議長が解任され、コスイギン首相をふくめた、いはゆるトロイカ方式が崩れ、ブレジネフ独裁体制が固まった。十一月七日の革命七十周年記念のパレードに見られる無気味な大型兵器の戦列は、この国が依然として、帝政ロシア以来の巨大な軍事国家であることを誇示してゐた。昨年冬から夏にかけての、力を背景にしたゴリ押し漁業交渉の経緯を見るにつけても、この隣人の怖るべきしたたかさは、日本人の肌身にしみた筈である。北方領土の問題にしても、非を非として主張し続ける、国民的意志の統一と持続こそ、すべての前提でなければなるまい。

中国では過去十年の文革路線が、「四人組批判」といふ形で修正されつつある。スターリンの死後の非スターリン化と全く同じ形で、非毛化が進んでゐる。実務家鄧小平の復活といひ、あからさまな近代化路線の宣言といひ、イデオロギー万能の毛沢東主義の空洞化であることは、誰の目にも明らかである。いはば文革路線に乗って権力を掌握して来た華国鋒体制が、ジャーナリズムが讚美するやうに安定したものであるとは思はれない。だが北京タブーは依然として強い。日中平和条約の問題点「覇権条項」に中国側が固執するのは、日本を対ソ攻守同盟の一員に引きこむためである。イデオロギーが国益に優先するとき、日本はかつての三国同盟の轍を踏むことにならう。

昨年九月末から十月中旬にかけて、日本と西独はほとんど時を同じうして赤軍派のハイジャックを経験した。人質を救出するために、巨額な身代金を送り、拘留中の殺人犯をふくむ兇悪犯を釈放して、犯人に全面服伏した日本政府と、モガジシオ空港奇襲の電撃作戦で犯人を射殺し、人質全員を救出した西独政府と、余りにも対照的な二つの解決法に世界は注目した。この事件は当然、面白半分の比較文化論的評論に絶好の論題を提供した。しかし、この問題の処理の仕方には、戦後の日本人の人間観や価値観が象徴的に表はれてゐた。少くとも為政者は「人命は地球よりも重い」といふやうな、文学青年的発想をきびしく拒否しなければならぬ。武装して国法に挑戦して来る集団に対しては、こちらもいのちを賭けるといふ決意がまず前提であらう。世界がシュミットの果断の方に、惜しみない拍手を送ったのは当然である。

原子炉搭載のソビエトの軍事衛星が、突如として地球に落下して来るといふ時代である。文部省は昨年七月二十三日、新学習指導要領を告示した。その末尾で祝日などの儀式の場合には「国旗を掲揚し、国歌を斉唱させることが望ましい」と明記した。遅ればせながらの一步前進と評価しよう。ただならぬ国の歩みの中で、われわれはもう一度初心を確認したいものである。終りに、木内、衛藤両先生は、その講義要旨の掲載を快よく許して下さった。厚く謝意を表したいと思ふ。

昭和五十三年二月

大学教官有志協議会
国民文化研究会

目 次

はしがき……………	1
一、学問と和歌	
問ひ直されてゐる学問—人間の再建のために—……………	5
至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり—吉田松陰の魂—	29
輪読導入講義「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」……………	51
和歌創作について……………九州大学大学院医学研究科	69
現代流行思想とその批判—「しきしまのみち」の使命—……………	91
信ずるといふこと……………高崎経済大学教授	121
学び方……………国民文化研究会理事長	129
二、講 義	
「新日本の誕生」とその動因……………世界経済調査会理事長	147
世界の中の日本人……………東京大学教授	187

福岡大学教授 山田輝彦……………5

新日本製鉄株式会社 今林賢郁……………29

福岡県立修猷館高校教諭 小柳陽太郎……………51

夜久正雄……………91

高木尚一……………121

小田村寅二郎……………129

木内信胤……………147

衛藤藩吉……………187

三、青年研究発表

教壇に立って松陰先生を思ふ……………

熊本県立松島商業高校教諭 中園俊郎…………… 213

ありのままのところで感じることに……………

福岡県大刀洗町立本郷小学校学園分校教諭 味酒景子…………… 223

今上陛下と歴代天皇方のお心……………

建設省・建築研究所研究員 大岡弘…………… 235

四、祖国と慰霊

慰霊と天皇陛下……………

福岡県立嘉穂高校教諭 小野吉宣…………… 247

世界各国の戦死者をまつる聖地 高千穂商科大学助教授

名越二荒之助…………… 257

亡き友を思ふ……………

佛宝辺商店社長 寶邊正久…………… 269

第二十二回「合宿教室」のあらまし……………

東京大学法学部四年 小柳志乃夫…………… 279

(附)合宿詠草……………

九州大学工学部三年 廣木寧…………… 319

あとがき…………… 332

△国民文化研究会図書目録▽



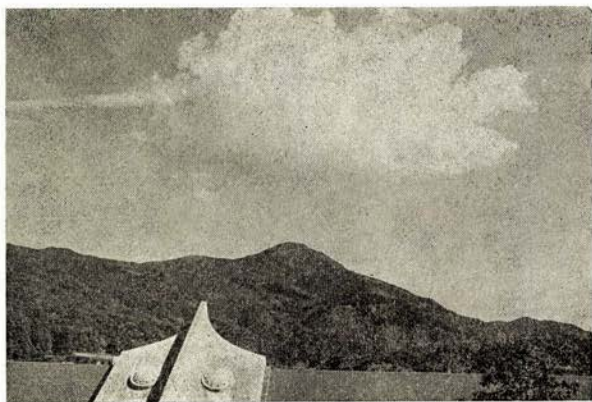
学問と和歌

問ひ直されてゐる学問

——人間の再建のために——

福岡教育大学教授

山田輝彦



合宿地よりの眺望

啓蒙主義としての戦後思想

生命体としての国家

科学と学問

啓蒙主義としての戦後思想

導入講義といふことで、大変大きな問題を提出しました。本来学問論といふことになれば、西洋ではマックス・ウェーバーとか、ウィルヘルム・ヴントとか、日本でいふなら福沢諭吉とか、小泉信三とかいふやうな大学者にして始めてなし得ることで、私どものやうな末輩の田舎教師の手に負へるものではありません。しかし、戦後三十年、いつも私の思想の中心にあつて、私に解決を迫つてゐた問題でもありません。かういふ題をつけた次第です。そこで、本論の学問論に入る前に、戦後思想の問題点のいくつかにふれて、最後に人間を対象にした学問の方法が、現在のままでいいのだらうかといふ一つの疑問を提示したいと思つてをります。

御承知のやうに、今年戦争が終つて、満三十二年目になります。戦争で亡くなった人の三十三回忌が全国の到るところで、しめやかに行はれてをります。三十三回忌といふのは、仏教の法要では最後の区切りです。三十年の歳月を通して、戦後といふ一つの状況を客観的に観察する地点に到達したと言へませう。人は多感な青春の時代にどういふ経験をしたか、その経験の尊さが生涯を支配すると思ふのです。私どもの年配の者にとって、それは戦争と敗北といふ

体験でした。自分の見てゐる前で、国家といふ機構が音を立てて崩壊してゆく。その状態をま
さ目で見る事ができた。さういふ悲劇的な運命のなかで生きのびた人、運命に殉じた人、巧
みな処世で新しい時代に便乗した人、自決した人、いろいろな人の姿を見てまゐりました。さ
ういふ私のかげがへのない体験で、戦後思想といふものを整理してみたいと思ふのです。戦争
は非常の事態ですから、国家が自己防衛のために強いナショナリズムの立場をとるのは当然で
す。戦後の三十年はその大きな反動期であつたと規定できると思ひます。

まづ戦後思想の特色は三つに集約できると思ひますが、その一つは、日本の近代思想史でい
ふ「自然主義」といふ考へ方です。文学史でいふと丁度明治四十年前後、たとへば田山花袋が
「蒲団」といふ自己暴露の小説を書きましたが、その作品に象徴されるやうな一つの考へ方で
す。それはひと口に言ふと人間動物観、あるひは人間生物観とでもいふべきもので、人間とい
ふものは要するに物欲、権力欲、性欲などに支配される動物に過ぎないといふ考へ方です。歴史
的に言へば、日露戦争ころまでの人の心を支配してゐた、きびしい儒教的倫理に対する反動で
す。今度の場合も戦争中の極端な禁欲主義に対する反動として、この自然主義的な思想が大き
な力をふるふことになります。週刊誌やテレビでおなじみの思考法、たとへば歴史上の偉人や
英雄を凡人の位置に引きずりおろして快哉を叫ぶ一種のサディズムとでもいひませうか。先ほ
ども申しましたやうに、かういふ考へ方は戦前からあつたものですが、いはば同じやうな状況



のなかで、もう少し増幅された形で復活して来たといへませうか。その原型が明治四十年代の自然主義の考へ方で、当時、長谷川天溪は「幻滅時代の芸術」の中で、人間は神の形に造られたとか、万物の霊長だとかいったのはすべて「妄想」であつたとしてこれをしりぞけました。「吾が身と猿とをエッキス光線に照合すれば、同型の骸骨現はれてうたた浅まし」といふのは有名な言葉ですが、つまり人間は禽獣とどこが違ふか、結局動物にすぎぬではないかといふ断定です。さういふ考へ方はまことに幼稚な、一面的な考へ方ですが、それが一つの支配的な思想として根強く定着してゐることは否定できません。われわれは、さういふ狭隘な人間観から脱却して、一日も早く人間固有の尊厳さを奪回しなければなりません。私が敢へて「人間の再建のために」といふ副題をつけた理由の一つはここにあるのです。

現代思想の第二のファクターは、自我といふものが、あらゆる価値の究極の基準であるといふ考へ方です。自我至上主義とでも申しますか、個人主義と言ってしまってもいいのです。この自我至上主義の原型は、自然主義とほとんど時を同じうして起った、武者小路実篤を中心とした白樺派の運動です。白樺派の運動は、人間を動物と見なした自然主義と丁度裏表になるやうな考へ方で、今度は逆に人間を神に押し上げてしまふわけです。しかも個の価値こそがすべての価値の根源であることに全く疑念を持たないのです。武者小路は明治四十年に書いた「人間の価値」の中で、「真の利己を謀れば、それが人類の爲になるやうに人間が作られてゐる処に、人間の価値があるのです」と言つてゐます。これは、エゴイズムは正しいものであるといふ思想です。先ほどの長谷川天溪の思想が、明治の儒教的倫理への反動であつたのと同じく、白樺もまた明治の道徳といふものに対する強い反動として起つて来るのです。武者小路にとつて、徹底的な自己主張は美德であり、各人がむき出しのエゴを主張することが人類全体のプラスになるといふ、予定調和的な思想です。武者小路は徹底した楽天主義者であり、当時の彼は颯爽とした新時代の思想家でした。現代人の思想の根底を支配してゐる、かういふ白樺的発想の枠を突破しなければ、本当の新しい意味の思想といふものは出て来ないやうな感じがいたします。武者小路はまた「自己の内にも神がある。その神を自我と名づける。この自我の爲に働くのが、自己の爲にも他人の爲にもなるのだ」とも言つてゐます。自然主義は人間を動物

視する考へ方であるなら、武者小路は自我が神であるといふのですから、自己神化の思想と言つてよい。どちらも人間といふものの実体を凝視しない極端な考へ方です。人間は一方では生物的な仕組みを背負ひながら、敢へて自分の生命を犠牲にする神に近い行為もするといふ二面を持った存在で、さういふ矛盾の中に人間の実体を見つめるといふのが、最も平衡のとれた人間観だと思ひますが、自然主義も白樺も人間の一面しか見てゐません。「僕は神と言ふべきかはりに、自然と云ふ言葉をつかふことが多い。僕の云ふ自然と云ふのは、勿論目に見える自然ではない。内から出る力を云ふ」とも武者小路は言ひます。内から出る力とは本能のことです。本能が自然であり、神であるといふのです。新しい時代の道徳は、自己、自我、内なる本能、欲望、さういふものを完全に發揮することだといふわけです。これはまさに戦後思想そのものではありませんか。

現代の流行思想の第三のファクターは進歩主義です。もっと一般化して歴史主義と言つてもいいし、あるひは具体的にマルクス主義と言ひ切つてもよい。人間は次第に進歩してゆき、その究極には搾取のない無階級社会があるといふ考へ方です。観念の中にのみある未来の無階級社会を基準にして、現在及び過去を裁く。逆に言へば、過去の歴史、現在の人間の努力は、将来の共産主義社会を実現するためのプロセスに過ぎないといふ考へ方です。いま申した人間生物観と自我万能の思想、それに唯物史観、かういふものによつて構成されてゐる人間観は、現

世において、物質的に恵まれた生活ができればよいといふ、極度に世俗化したものになりま
す。自分が神ですから、一切の価値は相対化されてしまふ。従つて、自分の生命を捧げるべき
献身の対象などといふものは、論じること自体がナンセンスになつてしまふ。私は表題に啓蒙
主義としての戦後思想と申しましたが、啓蒙とは勿論無知蒙昧な心を開くといふことです。つ
まり戦後思想の出発は、文明国であるアメリカ人が、未開野蛮な封建的軍事国家の住民である
日本人の蒙昧を啓くといふことから始まつた。現在では政治家も教育者も思想家も、すべて個
人の主体性といふことを申しますが、戦後思想の根底になつてゐる憲法や教育基本法が、軍事
占領といふ国家自体の主体性を奪はれた、完全に受動的な状況の中で作られたといふ事実につ
いて誰もふれようとしないのは不思議です。

凡そ啓蒙主義といふものは、感情よりも理性、個よりも普遍、経験よりも理論を重視しま
す。宗教や道徳が現代ほど人間の文化の中で不当な位置におとしめられてゐることはありませ
ん。宗教は蒙昧な時代の信心であり、道徳は支配階級に便利な統治のルールにすぎないのでせ
うか。人類が長い間、血のにじむやうな試行錯誤をくりかへしながら作り出して来たものを、
にべもなく古いといふ一語で片づけてしまふほど、現代人は自分を超えたものの前に謙虚であ
ることをなくしてしまつてゐるのです。今にして痛烈な反省がなければ、人間はやがて人間獣
に墮してしまふでせう。

生命体としての国家

生の目標が個人の現世の生活であり、せいぜい家族の幸福までといふことになり、さういふ思想の中から欠落して来るものがあります。それは国家といふ問題です。終戦直後に出された「アメリカ教育使節団報告書」の中では、国家は所詮個人の幸福を保障する手段にすぎないといふことが、繰り返し説かれてゐます。国家の權威を意識的に貶しめ、国家意識をできるだけ国民の中から排除することにあらゆる努力が傾けられました。その結果、国家といふ言葉を聞くたびに軍国主義、戦争といふやうに条件反射的に結びつけてしまふ、さういふ異常な拒否反応を育て上げてしまつたのです。

戦後思想の一番の脆弱点は、国といふものを思想の領域から意識して排除したところにあります。それともう一つ、現世の生命が至上のものといふ観念に立ちますから、死の問題を思想の領域から排除してしまひます。人間は死ぬべき存在であるといふ痛感がないところに、本当の思想が生れる筈はありません。死を避けて通れば、それは体系としてどんなに整つてゐても、世界の思想に比べて非常に軽薄なものになるでせう。この問題はさて置き、当面の問題に帰ります。

流行思想の国家についての考へ方には二つあると思ひます。一つは国家は国家権力であるといふ考へ方です。例へば大学の立看などには、警察官の学内捜査などの場合には必ず国家権力の介入といふ言葉が見えます。この言葉は何か一種特別のなまなましい語感をもつて使はれてゐるやうです。もう一つは、国家は個人の幸福のため、できるだけその面倒を見ればよいといふ考へ方で、これは福祉国家になるわけです。この二つの国家観が、現在の代表的な二つの国家観と言へさうです。

国家は国家権力であるといふ考へ方は、いふまでもなくマルクス主義から出て来たもので、そのことをはっきり書いてある原典は、エンゲルスの『家族私有財産及び国家の起源』（一八八四）です。彼は、国家は一定の発展段階における社会の生産物であると言つてゐます。社会が、社会自体の持つてゐる矛盾に耐へ切れなくなつて、二つのぬきがたい対立関係に分裂する。さういふ階級対立の中で、支配階級が被支配階級を抑圧する権力が国家であるといふのです。「この、社会から出て、而もその上に位し、それから益々遠ざかる権力が、国家である」と彼は言つてゐます。これは大變衝動的な論断ですが、果して国家は権力構造だけでせうか。現にマルクス主義者が権力を掌握した社会主義国家では、国家は決して国家権力と同義ではありません。革命の成就までは、国家は国家権力であり、打倒すべき悪である。やがては消滅すべきものであると繰り返しながら、ひとたび政権を握るとそれは途端に人民の忠誠の対象にな

るのです。一九四五年に制定されたソビエトの生徒守則の第一条には「教養ある文化的市民となり、祖国ソビエトにできるだけ多くの利益をもたらすやうに、倦まずたゆまず知識を習得すること」と書いてあります。祖国とは、個人が帰属すべき一つの有機的生命体である。ソビエトの義務教育の方針は実際にはっきりしてゐます。国家といふものは、個人が帰属してゆくべき生命であるといふことは、マルクス主義の国家であらうと、自由主義体制の国家であらうと變りはないと思ふのです。ところが「教育基本法」の前文には「われらは個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならぬ」とあります。ソビエトの生徒守則は実に簡明でよく分りますが、教育基本法の方はきれいな作文です。どのやうにも解釈される、実感のない概念用語の羅列からは、教育者の本当の活力は生れて来ないでせう。自分の国のために尽す後継者を養成することがそんなに悪いことなのでせうか。先般の日ソ漁業交渉の時、私はしみじみ感じました。一方は圧倒的な軍事大国、日本は「核」ぬきの「平和」国家。武器としての「核」を持った持たないの前に、精神の核がぬかれてゐるのではないか。一方は強烈な愛国教育で鍛へ上げられた青年を持ち、一方は、国家を防衛することは軍国主義であり、悪であるといふことを、教師が倦まずたゆまず説いてゐる。これでは全く勝負にはならないわけです。

祖国といふ言葉によって表はされる、生命体としての国家は、単なる知性によって認識され

るものではありません。だから、生命体としての国家といふものは、科学の対象にはなり得ません。科学の対象となるのは、制度、権力構造、法体系などでせう。生命体としての国家は、われわれが感ずることによってのみ知ることができます。この生命体を持続させて来た祖先の行動を学ぶことによって感ずるしかないわけです。私は以前の合宿教室における導入講義で、科学的な研究の対象となる国家を「外なる国家」とし、生命体としての国家を「内なる国家」と規定しました。明治の人々にとって、これは自明の事実でした。明治八年に書かれた福沢諭吉の『文明論之概略』の終りに近く、国の独立を論じてゐるところに、「国の独立如何に係る所の事に逢へば忽ち之に感動して、恰も蜂尾の刺蝚あたかに触るるが如く、心身共に穎敏えいびんならんことを欲するのみ」といふ言葉があります。国家の独立いかんといふ事態になった時には、丁度蜂のしっぽにふれたやうに敏感に反応する。さういふ風でなければ、激烈な国際競争の中で生き残ってゆけないといふ痛感の表現です。平等論者、封建倫理の批判者といはれる諭吉には、かういふ一面があったのです。また、明治の知識人に絶大な影響力を持ったといはれる内村鑑三は、昭和五年三月十八日に亡くなりましたが、その遺言は「人類の幸福、日本国の隆盛、宇宙の完成」の三つだったのです。宇宙や人類と同等の尊さで、「日本国」が感じられてゐたといふことでせう。詩人三井甲之の長詩「恩愛」の最終連には次のやうに歌はれてゐます。

友よ！

とよべば

友は来りぬ。

ああわれは

世のほこりをすて

祖国のいのちに

帰依したてまつり、

ふかきいきを

ひらけたる

自然に呼吸し、

親子はらから

郷土の

隣人

祖国の

同胞

ともに手をとる

没入せむ

祖国無窮のいのちのうちに。

祖国とは、われわれの個々のいのちを包摂して無窮に持続するいのちである。それは文化的な伝統でもあるわけです。国家の内容といふものは、個々の人間によって担はれてゐる共同体の文化であり、さういふものを言ひつき語りつたへてゆくといふことが、国のいのちを守るといふことです。従って、国を守るといふことは、実は己れの生命を守るといふことと同じことなのです。国が征服されて外国の属国になるといふことは、自分のいのちが絶たれるといふことと同じなのです。属国だって生きてゆけるじゃないかといふのは、生物として生きてゆけるといふに過ぎないのです。私は決して、教条的なイデオロギーとしての国家主義を論じてゐるわけではありません。イデオロギーとしての国家主義といふものは、日本の伝統的な考へ方とは当然相反するものです。日本人の国のイメージは、もっと柔らかな、もっと豊かな、包括的なものであったと思ひます。さういふ意味で、国のいのちと自分のいのちは、別物ではないといふことを、単に理論としてではなく、自分の実感として体得していただきたいものです。

私は最近今西錦司さんの『生物の世界』を読んで大きな刺戟を受けました。今西さんは有名

な「棲分けの理論」によつて、ダーウィンの弱肉強食的な進化論とは違った進化の学説を立てた独創的な学者ですが、生命現象を論じた一番のポイントの所で、次のやうに書いてをられます。

△個々の細胞だつてももちろん生きてゐるものに相違ないが、一つの生命が生きてゐるといふときには、それはつまりこの有機的統合体の有機的統合作用をさすのであり、生物が死ぬといふことはすなわち、この有機的統合作用の破綻を意味するものと考へればよいと思ふ。だから生物の現わすこの有機的統合作用の持続がすなわち生命の持続なのである。▽

私はこれを読んだ時、国家といふものを考へる時の大きなヒントを与へられたやうに思ひました。細胞は国家を構成する個人である。有機的統合体とは国家である。しかも、統合体が存在するためには、統合作用が必要である。その統合作用を果してゐるものは何かといふ問題です。私ははつきり申しますが、有機的統合体としての日本の、有機的統合作用を果す中核は天皇であると思ひます。それ以外に何かあるでせうか。いのちとしての日本の国家は昭和二十年八月十五日で中断されたのでせうか。私は中断されてはゐないと思ひます。崩壊したのは国家機構、国家制度であり、いのちとしての国家は持続してゐると思ひます。何によつて持続してゐるか。戦前、戦後を通じて、一人の人格である天皇が天皇として存在してをられるといふ事実が、生命としての国家の持続を証明してゐると言へないでせうか。その持続を否認する思想

と刺しちがへて死んだといふのが、三島由紀夫さんの自決の思想史的な意味であらうと思ひます。ともあれ、生命体としての国家は、われわれの外部にある物を、科学的、客観的に認識するといふ方法では分らない。祖先の自己犠牲の行為、ひたすら国を守らうとした人たちの言葉に共感、共鳴し、それと自己同一化するといふ体験がなければ、国といふものの実体は分らない。それは科学的な操作だけではつかむことができないといふことをはつきり心にとめていただきたいと思ふのです。何の疑問もなく使はれてゐる「人文科学」といふ言葉にも、改めて正確な検討が加へられねばなりません。問題は、広く歴史や社会をふくめて、人間に関する学問の方法論に帰着すると思はれます。

科学と学問

この問題は、実は私の手に余る問題でありまして、自然科学と人間に関する学問の方法論の違いを論ずる資格のある人は、本質的に異なる二つの領域を究めた人でなければなりません。ヴントのやうな稀有な大学者にして、始めて可能なことでせう。私はせいぜい、先人の仕事の紹介をさせて頂くに止まります。結論を先に申し上げますと、科学だけが学問ではないといふことになりませう。

一昨年の合宿教室で、小林秀雄先生が『信ずることと知ること』といふ題で話されましたが、先生はその御講義の中で、近代科学だけが学問ではない。その狭隘な方法だけではどうにもならぬ学問もあるといふことを、確信をもって断乎としておっしゃいました。私は眼を開かれた思ひがしたことをはつきり覚えてをります。

最近岩波新書から、中村雄二郎氏の『哲学の現在』といふ書物が出されました。その中で、自然を対象的に、厳密にとらえるためには数学的合理性と実証性が需要であるが、その二つを結びつけたところに機械論的自然観が生れたことを述べ、続いて次のやうに述べてゐます。

△物体や自然は、客体として精神つまり主体からまったく引きはなされた上で、縦・横・高さをもった空間的拡がりや還元され、精神とは混同される余地のない量的な世界となった。▽
縦・横・高さを持った空間的拡がりとは、哲学の用語で言へば「延長」といふ概念で、これが精神における「思惟」の対照語であることは周知の通りです。精神と全く切り離された計量することのできる世界、それが自然科学の対象の世界です。更に氏は「科学の知」の特質について次のやうに述べます。

△なぜ科学の知だけがとくに自己目的化したり、完全な手段となったりするように考えられるのか、といえ、それは科学の知が、対象となる物事から感覚的なイメージ性、多義性を徹底的に奪い去ることによって、それと私たちとの生きた有機的なつながりをまったく断ちきる

ため、科学の知において、物事の認識が私たち一人一人と直接には無関係の、独立したものになるからである。そして、この物事と私たちとの有機的なつながりにとってかわったものは、客体としての純粋な物体と、主体としての純粋な精神という、純粋ではあるが抽象的なもの同士結びつきである。▽

少し長い引用になりましたが、ここで「科学」といふのは「自然科学」と考へてよいでせう。自然科学的な認識といふのは、対象を個人の価値観や人生観から切り離すことによつて、始めて成立するわけです。人間と物との間には、さまざまな有機的なつながりがあります。さういふ人間の広大な経験の中から、因果律に適合するやうな、あるひは数に換算できるやうな合理的経験だけに絞ることによつて、自然科学の方法が生れたと言へませう。しかし、その代償として人間の持つてゐる非常に大切な経験が排除されるといふことを知らなければいけないと思ひます。これは決して自然科学を貶しめることではなく、学問の世界においても、人間の文化全般の中においても、自然科学をしてその所を得しめるといふことが大切です。自然科学的方法や、自然科学的認識が人生の全体を支配するやうになれば、人生はいびつになり、人生の貴重な豊かな経験が犠牲にされるといふことを銘記すべきであらうと思ひます。

もう一つ例を上げたいと思ひます。国文研の合宿にも何度か来られた、工学博士奥田克己先生の『科学の限界と日本の教学』の中から引用いたします。

△科学は通常、自然科学、社会科学、人文科学などに分類されるが、これは便宜上の分類法であつて、学問の性格から見ると、科学はすべて自然科学なのである。すなわち、大自然のありとあらゆる事象を、すべて自然現象であるとし、一切主観を交じえることなく、冷静に客観的に観察するのが、科学の立場であつて、人間および人間社会がかもし出す現象といえども、これを客観的に、すなわち科学的に見るかぎりにおいては、自然現象に過ぎないのである。▽
今まで述べて来た国家の問題にしても、天皇の問題にしても、科学的に見るといふことは、その対象と自分の具体的なつながりを排除して、「物」を見ると同じやうに見ることです。例へば歴史学の対象に科学的方法を適用することはもちろん必要です。しかし、さういふ科学的方法を駆使して究明された事実を、歴史の中にどのやうに位置づけるかといふことになれば、その研究者の価値観、全人格的判断といふものが必要になつて来る。小林秀雄先生は、過去にある事実があつたことを知るだけではないけない。その事実が感じられるやうになつて、始めてそれは歴史事実になると言はれました。過去の事実にかかはった人達をいきいきと自分の心の中に再現する。さういふ詩的想像力といふものも、すぐれた歴史学者には必要な能力でせう。たしかに、あるところまでは実証的な方法が必要ですが、歴史の根幹にふれるといふところになれば、知性も感情もふくめて、研究者の古人に対する全人格的傾倒が要請されるのです。自然科学の方法のやうに、対象を遠ざけて客観化するのではなく、逆に対象に接近し、限りなく

愛惜することによって、始めて眞実が解明できるといふ方法もあるわけです。岡潔先生は、歴史といふものの根底は「なつかしさの情」であるといはれます。古人がなつかしいといふ感情が歴史の本質だといふのです。そして、日本の歴史の深層には、他者のために自己のいのちを捧げた人たちの、清らかな情緒が流れてゐる。それを自分は幼い時に繰り返し繰り返し教へられた。それは、自我といふもの、私といふものを後にして、人のことを先とせよといふ教へでもあった。それが数学的眞理を発見する時に大變役に立ったとはつきりおっしゃつてゐるのです。

吉田松陰が刑死の直前父宛に出した手紙は「平生之学問浅薄にして至誠天地を感格する事出来不申、非常之變に立到り申候」といふ一文から始まつてゐます。「親思ふところにまさる親ごころけふの音づれ何ときくらん」といふ有名な絶唱がこの後に続くわけです。奥田先生は、この冒頭の一文を引用して、次のやうに述べてをられます。

△ここでの学問は、至誠を探索する学問のことで、至誠とは眞心であり、人間の心の眞実であり、己の心を内省することによって、すなわち、主觀的に実証することによって、はじめて信解することのできる主觀的眞実である。松陰のいう学問は、明らかに本書でいうところの教学を意味するものである。▽

「至誠」とは眞心であり、人間の心の眞実である。至誠といふものは、対象化することがで

きません。客観的に対象化したり、計量したりすることができません。Aといふ人の至誠と、Bといふ人の至誠は、Aの方が重いか、Bの方が軽いかいふことはできない。計量できないものには、自然科学の方法は適用できません。逆に計量できないものに自然科学の方法を適用するのは間違である、と言ひかへてもよいでせう。子供をなくした母親の悲しみの深さなどといふものも計ることができない。人生には計量することができないもの、冷酷に物体を見るやうに客観化することができないものが沢山あるわけです。さういふものを探求する学問は、科学とは別の粹なのです。少くとも江戸時代までの学問とは、もちろん解釈学や訓詁の学もありましたが、究極においては、自分の生命の根源は何か、五十年そこそこのいのちを、どういふ姿勢で生きるべきか、何のために自分の生命を捧ぐべきか、さういふ本質的な生き甲斐、価値の探求であつたわけです。奥田先生は、「科学は存在の学であり、教学は価値の学である」とも言つてをられます。徹底して、まごころを深めて「信解」するのです。「信解」とは頭でわかるのではない。体験的に、全人格的に納得し、了解するのです。さういふ努力によつて——昔の人はそれを「まごころをせむる」と申しましたが——はじめて実証されるやうな主観的眞実は、主観的でありながら万人の心にかよふものとなるのです。

この「至誠」といふことは、もう明治の終りごろの知識人には分らなくなつてゐます。せいぜい漱石ぐらいまでは体験的に分つてゐました。漱石は大正三年第一高等学校で「模倣と独立」

といふ講演をしましたが、その中で「乃木さんの死は至誠より出たものである」と、至誠といふ言葉をはっきり使つてゐます。さういふ経験があるから、「こゝろ」といふ作品の中で、「明治の精神に殉死する」といふ言葉を、主人公の口から吐かせることになつたのだと思ひます。

自分の生き甲斐を探索し、自分の生命の根源を探索する学問、自分の生きる姿勢を探索するやうな学問は、残念ながら現在の大学においては学問としての存在権を与へられてゐません。ほんの百年ほど前までは、学問とは人が禽獸と異なる所以を学ぶことであつた。松陰が息づまるやうな国家の危機の中で、全身心を傾けて「孟子」を読んだやうな学問の姿は、「科学」の範疇からはみ出てるがゆゑに、学問として遇せられないといふのが現状です。体系化された知識でなければ学問ではないといふ通念からは、古人が長い間かかつて築き上げて来た「至誠を探索する学問」は欠落してしまひます。今の大学では、極論すれば裝飾としての知識に過ぎないものが、学問の名を僭称してゐるといつても過言ではありません。さういふ意味で、この合宿では、古典の輪読や短歌の創作を通じて、人の真心に敏感に感応する能力、歴史上の人物の行為に素直に感応できるやうな力を磨いてゆきたいと思ひます。公教育の場から捨てられてしまつたさういふ学問は、どこかで教へられるべきだと確信してゐるからです。

問題が大き過ぎて、最終的には突っ込みが足りないことになりましたが、科学だけが学問ではないのです。人間の生き方を心をこめて学ぶ学問といふものが、今こそ復活しなければ、人

間の再建といふこともあり得ないし、人間の再建があり得ない以上、日本は遠からず禽獸の群居する集団になりさがってしまふといふ感を拭ひ切れません。一つの問題提起として、これから深めていってほしいと思ひます。

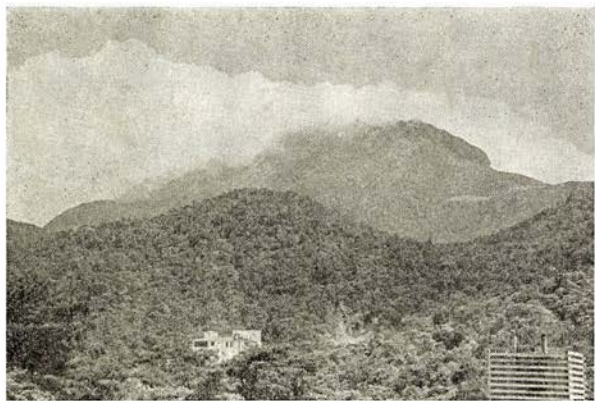
至誠にして動かざる者

未だ之れあらざるなり

——吉田松陰の魂——

新日本製鉄㈱

今
林
賢
郁



合宿地より妙見岳を望む

はじめに

安政元年〜安政五年

「至誠」の實踐

「至誠」の不滅

はじめに

ただいまより古典講義といふことで、お話を申し上げるわけですが、私は専門的に古典の研究をしてゐる者でもなく、また学校で生徒に教へてゐるわけでもありません。私は新日本製鉄に勤務する一会社員であります。入社以来九年数ヶ月が経過し、仕事も忙しくまたその責任も当然のことながらより厳しく要求されるやうになつてをります。さういふ次第で、一日の大半を仕事に費やすやうな日々を送つてゐるわけですが、その一方で、私の心の中には、自分のどのやうに生きてらいいのか、といふ問題が常に存在してゐます。そしてその問題は当然「国家」といふテーマを考へるといふことと分ちがたく結びついてくるのです。ともあれあわただしい毎日の生活の中で、さういふテーマに心を向けるといふことは大変むずかしくまたわずらわしいことでもあります。私はやはり一人の日本人として、今私に出来ることは一体何なのか、あるいは、今しなければいけないことは何か——このやうなことに努めて心を向けやうとしてきました。そしてその過程の中で、私はかつてこの国に生きた先人たちの生き方を偲び、学ぶことによつて、自己の姿勢を整へてまゐりました。いくたの先人たちは、一体どのやうな学問を積み重ねながら日々を生き、そしてその時代の問題に迫つていったのか。私は古典から

このやうなことを学んできました。先人たちの深い思ひと激しいエネルギーにみちた古典の世界は、ある時は私を叱咤激励し、またある時は慰めもしてくれました。そのやうなことで、本日は、古典「講義」といふことではなくて、折にふれて古典を読んではまるったものの一人として、吉田松陰についていささかお話を申し上げながら、みなさまとご一緒に古典の言葉に直接触れてみたいと思つてをります。

それではなぜ吉田松陰についてお話をするのかといふことでありますが、私は何よりも吉田松陰といふ実に骨太い、男らしい武士が大変好きなのです。あの幕末の動乱の時代には、幾多の志士が輩出しましたが、鋭敏な頭脳と、勇猛果敢な行動力と、それから驚くべき読書量と、それに伴ふ思索と執筆、更には幾多の俊秀を育てあげた教育者として、吉田松陰に類ひする志士は他にゐるのではないかと私は思つてをります。さういふものすべてをひっさげて、吉田松陰はあの時代の真只中に身をさらし、身も心も国のために捧げ尽くした武士でありました。

それをしかも三〇歳で完結したといふことに、私は本当に敬虔の念を禁じえないのであります。さういふ吉田松陰に対し、たとへば革命家といふ見方があります。天皇絶対主義者、あるひは精神主義者、理想主義者といふ見方もできませう。だが、吉田松陰の全生涯は、そのやうな見方自体を厳しく拒否する、あまりにも純粹で激しい生命にみちたものであります。一人の人間の生涯をかけた行為を前にして、ある部分を取り出し、吉田松陰はたとへば体制を打破

しようと考えたから革命家であると言って安穩としてゐる学問の姿は決して健全ではない。さういふ固定された考へを打破する方途は、やはり私たち一人一人が直接古人の文章にふれることから始まるのだと考へます。

安政元年と安政五年

さて、「至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり——吉田松陰の魂——」といふのが本日のテーマです。「至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり」とは孟子の言葉です。「至誠」とは、心の限りを尽くして人に接し物事に対処していくといふことでせう。さういふ生き方を貫いてゆけば「動かざるもの未だ之れあらざるなり」動かないものは決してないといふのがこの言葉の意味です。吉田松陰はその最後の一瞬まで、孟子のこの言葉を信じ、生涯かけてその「至誠」を貫き通した武士であったのです。そこで本日は、吉田松陰が安政の大獄で逮捕されてから死罪に至るまでの数ヶ月の間に、どのやうに「至誠」を実践し、その道に殉じていったのかといふことを中心にお話してまゐりたいと思ひます。

そこで本論に入ります前に、安政の大獄に至る数年間を眺めておいたほうがわかりやすいと思ひますので簡単に説明します。安政の大獄が起つたのは安政五年（一八五八）ですが、その

数年前の安政元年（一八五四）ペリーが前年の和親条約の返事を求めて浦賀にまゐります。この時吉田松陰は、下田からその船に乗り込まうとしますが失敗します。これが下田踏海事件といはれてゐるものです。翌日自首して下田の獄につながれ、その後江戸伝馬町の獄に移され、その年の暮に萩の野山獄につながれることになります。この事件が安政元年です。それから安政二年、三年、四年の数年間、吉田松陰が最も勉学に努めた時期です。いはば内に蓄へる時期であつたといつてもよいでせう。吉田松陰はこの三年間に猛烈な読書をやります。たとへばその読書量は全集によりますと、安政二年ですと五二二冊、安政三年、五〇五冊、安政四年、この年は十一月までしか入つてゐないのですが、三八九冊以上となつてゐます。時代の問題に全身をさらし、その解決の糸口を求めて膨大な書物を次々と読破していく姿には本当にすさまじいものを感じます。安政四年には松下村塾が建ちまして、この頃から漸く世の中の人々が注目するやうになります。明けて安政五年、いよいよ幕末の激動がテンポを速めて進んでいきます。四月二十三日井伊直弼が大老となり、同六月十九日、幕府は勅許を得ないままに日米通商条約に調印、ここに世論が沸騰し大変な問題になるわけです。吉田松陰も時勢を大変憂慮し、この頃より言論もいよいよ激しさをましてきます。その頃が松下村塾も最盛期で、塾の教育も時局に全く密接したものとなつてまゐります。そして同年九月、梅田雲浜逮捕に始まる安政の大獄が起ころるのであります。そのあと吉田松陰は、同志一七名とともに、当時京都にあつて志士の

捕縛に辣腕をふるってゐた時の老中、間部詮勝の要撃を画策しますが、これも失敗に帰し再び野山獄に投ぜられます。前回、野山獄に投ぜられた時には時代もまだ平穩だったのですが、今回は時勢も切迫し、吉田松陰の実践家としての過激さも増してまゐります。

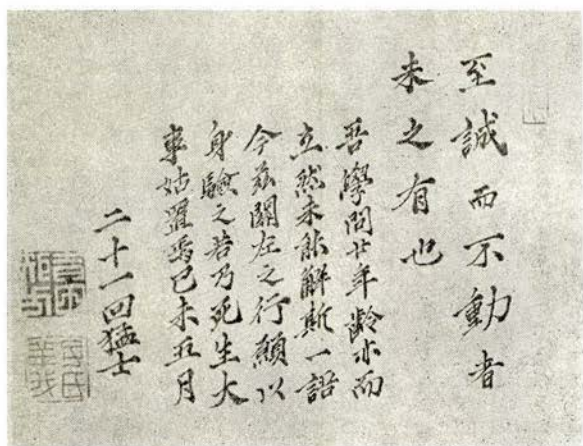
そして翌年の安政六年、吉田松陰にとっていよいよ最後の年が明けます。まず正月には播磨の大高又次郎、備中の平島武二郎萩に來たり、大いに画策するもならず、二十三日には萩を去ります。その時にかれらは置手紙をしていきます。それは、毛利藩主毛利敬親が参勤交代で江戸へ向ふ時に伏見で待伏せをし、藩主を説いて駕籠を京都へ回して、勅を奉じて幕府を問責する挙に出ようといふことだったのです。藩主の東勤については、吉田松陰は前年来、違勅の將軍に対しては参勤すべきではない旨を切論するのですが、藩主は三月五日に萩を出発します。この出発の少し前、吉田松陰は先の置手紙のこともあり、藩主のことが非常に心配になるわけです。それで、野山獄に投ぜられたまま幾人かの門下生を伏見に送らうとするのですが、この頃弟子たちは吉田松陰の過激な動きに敬遠気味で起たうとしない。その中であって、野村和作といふのが使命を帯びて伏見まで出向くやうになるのですが、事態を憂慮した門人たちがそのことを藩に告げ暴露してしまひます。それで野村和作も逮捕、投獄される。ここに吉田松陰はすべての術を奪はれてしまふことになるのです。これが安政六年の三月下旬、そして同五月、安政の大獄の一環として吉田松陰に東送の報がもたらされるわけです。

「至誠」の実践

前置きが長くなりましたが、そこから吉田松陰が一体どういふふうに処していったかといふのが本論であります。テキストを御覧下さい。最初の文章は、いよいよ萩を去るにあたって門人たちに与へた言葉の一つです。

此の別れ想へば當に永訣なるべし。已むなくんば、余に一の護身の符あり。孟子云はく、「至誠にして動かざる者は未だ之れ有らざるなり」と。其れ是れのみ。諸友、其れ之れを記せよ。其の他千萬の言語は、八十一鱗に至ると雖も、苟も一睛を點ずるに非ずんば、遂に是れ眞に非ざるなり。

江戸からの命により、自分は今から出掛けていくが、その行末を思へばこれが永遠の別れになるだらうし「永訣なるべし」と、まず最終的な覚悟を述べます。そこで、「已むなくんば、余に一の護身の符あり」、やむなくさういふことになれば自分には一つの「護身の符」守り札がある。それは何か。「至誠にして動かざる者は未だこれあらざるなり」、「其れ是れのみ」といふ。「諸友、其れ之れを記せよ」、諸君たちよ、どうかこれを記憶しておいてくれ。「其の他



千萬の言語は、八十一鱗に至ると雖も、苟も一睛を點ずるに非ずんば、遂に是れ眞に非ざるなり、——「其他千萬の言語は」つまり至誠を抜きにした千萬の言語は、「遂に是れ眞に非ざるなり」、遂に眞実の言葉にはならないといふのです。その中の「八十一鱗に至ると雖も、苟も一睛を點ずるに非ずんば」といふのは、画に描いた龍は鱗が八十一あるといふが、描いて八十一に至るとも、最後に一つの睛を点じないことには遂にそれは龍とはならない。それと同じやうに、至誠を抜きにした千萬の言語は、遂に眞実の言葉とはならない、つまり「至誠」の二字こそはまさに画龍点睛に相当すると言つてゐるのです。ここには日頃からの松陰の姿勢と覚悟が明確に語られてゐます。それがより具体的にわかるのが次の文章です。同じやうに弟子

に与へた一文です。

至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり。

吾れ學問二十年、齡よはひ亦しり而立たなり、然れども未だ能く斯の一語を解する能はず。

今茲ここに關左の行、願はくは身を以て之れを驗ためさん。乃すなはち死生の大事ことの若こときは、姑しほらくこれを置く。

自分は學問に志してすでに二〇年、年も三〇歳になった。この間、自分は「至誠」に命を通はせ、それを強靱きやうけんならしめようとしてきた。ところが「未だ能く斯の一語を解する能はず」自分には未だ「斯の一語」の深い意味がわからない。現実の人生の場で自分の「至誠」がどこまで通用するのかまだわからないでゐる。然るに、今、それを實驗する絶好の機会が訪づれた。それが「今茲に關左の行、願はくは身を以て之れを驗さん」といふことです。「身を以て之れを驗さん」とは、道を求めることに學問の根幹を置いた人の白熱的表現であると思ひます。吉田松陰にとつて、學問と生き方とは決して別物ではなかつた。だからこそ、死に身をさらしても實驗しようといふ覚悟が生まれるのです。その結果が、生か死か、それはわからない。今必要なのは「斯の一語を解する」ために「身を以て」試みることだ。だから、そのあとの文

章のやうに「乃ち死生の大事の若きは、姑くこれを置く」と言ひ切れるわけです。

次も同じやうな文章です。

至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり。此の語、高大無邊な聖訓なれど、吾れ未だ之れを信ずる能はざるなり。此の度此の語の修行仕る積りなり。

ここでは「修行」と言ってるますが、意味は先程の「実験」と同じでせう。いずれにしても、これらの文章を読みますと、自分の生き方を見据えた生きた学問とはどのやうなものであるかを思はしめられます。さて、そのやうな覚悟と気概、そして自信もひめて、安政五年五月に萩を出発、六月下旬江戸着、七月九日に初めて幕府の訊問をうけます。その時に幕府が訊問したことが二つありますが、「お前は梅田雲浜が萩に來た時會ったさうだが、何の密議をなしたのか」といふのが一つ。もう一つは、「御所内に落し文があつて、その筆跡がお前に似てゐると、梅田雲浜外が言つてゐる。覚えがあるか」といふのです。「落し文」とは、公然と言へないことを文章にして道路などに落しておく文書のことです。それに対し吉田松陰は、「梅田雲浜はどうも悪賢い性質で、お互ひの志を語り合はうなどとは思ひもしない。密議などするものか」と言ひ、それから、「自分は生來、公明正大を旨としてきた。どうして落し文などする

ものか」と答へます。これだけなら問題はなかつたのですが、続けて松陰は、嘉永六年ペリー来朝以来のことを述べつつ、国策に関する意見を説きはじめ、つひに老中を討たうとしたことにまで及んでしまふわけです。結果的には、そのために吉田松陰は死罪になるのであります。これが七月九日で、そのあと、九月五日と十月五日に訊問があるのですが、寛大であつたらしくこの時点では、罪は軽く済むのではないかといふ期待を持ちます。ところが、十月十六日に「口書読み聞かせ」といふのがあつて、最早死罪は免れないといふ予感をいただきます。そこで、いよいよ死罪を覚悟して門人たちに与へた手紙が三番目の文章——「諸友に語る書」——です。

吾れ甲寅の擧、自ら萬死を分とす。圖らざりき、幕府寛貸以て死せざるを得たり。是れ今日宜しく幕府の爲めに死すべきの一なり。甲寅の後、幽囚せられて國に在り、而も吾が公けんて眷顧衰へず。是れ今日宜しく吾が公の爲めに死すべきの二なり。加之聖天子宵衣旰食、夷事しんを軫念したまひ、去年來の事豈に普率の宜しく旁觀坐視すべき所ならんや。是れ今日宜しく天子の爲めに死すべきの三なり。

三の宜しく死すべきありて死す、死すとも朽ちず。亦何ぞ惜しまん。

ここでひとまず切ります。「甲寅の擧」とは下田事件のことです。この時自分は当然死刑に相当すると思つた。ところが、「幕府寛貸」、「寛」は寛大の寛、「貸」は許すといふ意味です。この幕府の「寛貸」によつて死なないですんだ。だから今、自分は当然幕府のために死すべきである。これがまずはじめである。「是れ今日宜しく幕府の為に死すべきの一なり」といふことです。それから、その「甲寅の擧」のあと、自分は萩に送られ獄に入れられたが、それでも「吾が公」藩主毛利敬親の「眷顧衰えず」、「眷顧」といふのは情をかけることです。ずっと心配をしていた。だから、「是れ今日宜しく吾が公の為に死すべきの一なり」それが「死すべきの一」であるといふ。「加之聖天子宵衣吁食」、しかのみならず聖天子とは孝明天皇のことです。「宵衣吁食」といふのは、君主が早朝に礼服をつけ、夜遅く食事をとり、寸暇なく政治に励むことをいひます。孝明天皇の御在位期間といふのは、まさにアジア全体が列強から攻められ、次々と植民地化されるやうな時代でした。一八五八年、インドが植民地化されます。それで、孝明天皇は「夷事を軫念したまひ」、日本もインドなどと同じになりはしないかと非常にご心配になつて、幕府にいろいろと御意見もお述べになるし、諸藩も動かさうとされるのでありますが、結局御心は実らずに、幕府は遂に勅許をえないままに日米通商条約を結んでしまふわけです。それが「去年來の事」の中味です。そのやうな事態を前にして、「豈普率の宜しく旁觀坐視すべき所ならんや」、どうして「普率」普天率土、すなはち天下の人すべては、「旁觀」「坐視」するこ

とができやうか、決してできない。これが「今日宜しく天子の為に死すべきの三なり」といふのです。このやうに「三の宜しく死すべきありて死す」だから「死すとも朽ちず。亦何ぞ惜しまん」と言ひ切れるのでせう。次を続けます。

今茲こゝし五月、檻輿かんよ國を去る。平生の心事こゝぶ具さに諸友に語り、復遺またいけつ歛なし。諸友蓋し吾が志を知らん、為めに我れを哀しむなかれ、我れを哀しむは我れを知るに如かず。我れを知るは吾が志を張りて之れを大にするに如かざるなり。

吾れの將に去らんとするや、子遠しえん吾れに贈るに死の字を以てす。吾れ之れに復するに誠の字を以てす。子遠の言大いに是れ理あり、若し誠字にして未だ遂げずんば、或は頭巾の氣習あらん。但し（後文闕）

自分は五月、江戸からの命により、「檻輿」檻の駕籠に入れられて國を立った。その時、「平生の心事」日頃から自分が思つてゐることは、具つぶさに語つたので言ひ残してゐることは何も無い。「諸友蓋し吾が志を知らん、為めに我れを哀しむなかれ」、諸君たちは自分の志を知つてゐるだらう、だから、自分がたとへ死罪になつても哀しまないでくれ、そして、「我れを哀しむは我れを知るに如かず、我れを知るは吾が志を張りて之を大にするに如かざるなり」といふ。

自分のことを哀しむことは自分を知るといふことには及ばない、さらに、自分を知るといふことは、自分の志を天下に拡げていくことには如かない。だから、何よりも自分の志を継承して「之れを大にする」やうに努めてくれといふのです。いよいよ死罪が免れないと知った時、吉田松陰に残されてゐた道は何かといふと、門人や友人たちに自分の思ひを託すことです。魂を残す、つまり留魂です。その一つが、ここには今のやうな言葉で出てゐます。

「吾れの將に去らんとするや、子遠吾れに贈るに死の字を以てす」、江戸に向けて萩を去らうとした時、弟子の子遠が死の字を贈った。先生は多分もう今度は生きてはお歸りになれませんまい。どうぞ覚悟して行って下さい。かう言つて死の字を贈った。だが自分は「之れに復するに誠の字を以て」した。死はとらずに誠といふ字を用ひた。子遠の言はたしかに理になつてゐる。だがそれに対し「誠の字を以て」した以上、身を以て「誠字」を完遂しなければ、「或は頭巾の氣習あらん」、頭巾とは全集の註によれば、俗儒をさすことのやうです。すなはち、表面だけを立派に見せて中味が伴はないことになるだらうといふことでせう。このあとは「但し」で文章が欠けており、あとの展開はわかりませんが、少なくともこのたびの東送は、吉田松陰にとつて、「至誠にして動かざる者は未だ之れあらざるなり」の実験あるひは修行の場であつた以上、松陰の心を占めてゐたものは「死」ではなく、生命をかけた「誠」の実践であつたのであります。

次は「留魂録」の文章です。松陰は十月二十七日に死罪になりますが、その二日前、二十五日の夕方から二十六日にかけて書き残したものがこの文章です。

余去年已來心蹟百變、擧げて數へ難し。就中、趙の貫高を希ひ、楚の屈平を仰ぐ、諸知友の知る所なり。故に子遠が送別の日に「燕趙多士一貫高。荆楚深ク憂フ只屈平」と云ふも此の事なり。然るに五月十一日關東の行を聞きしよりは、又一の誠字に工夫を付けたり。時に子遠死字を贈る。余是れを用ひず、一白綿布を求めて、孟子の「至誠にして動かざる者は未だ之れ有らざるなり」の一句を書し、手巾へ縫ひ付け携へて江戸に來り、是れを評定所に留め置きしも吾が志を表するなり。去年來の事、恐れ多くも天朝・幕府の間、誠意相孚せざる所あり。天苟も吾が區々の悃誠を諒し給はば、幕吏必ず吾が説を是とせんと志を立てたれども、蚊蠱山を負ふの喩、終に事をなすこと能はず、今日に至る、亦吾が徳の菲薄なるによれば今將た誰れをか尤め且つ怨まんや。

去年再び野山獄に投獄されて以来、「心蹟百變、擧げて數へ難し」、心は何度も変はつて數へきれないほどだ。といふのは、野山獄に投ぜられて以来の松陰は、進んで死を求めたり、憤死しようとしたり、門人たちとは義絶もし、又餓死しようとしたり、といふやうに心が揺れ動き

ます。これはさういふことを言つてゐるのです。「就中、趙の貫高を希ひ、楚の屈平を仰ぐ」とは、趙に貫高といふ宰相がゐたのですが、趙王が漢の高祖に辱められた。そこで高祖を殺さうとするのですが、志敗れて捕へられてしまふ。しかし「王の無罪を釈明するまでは死せず」となして三族刑せられ縋身に鉄針を被つても飽く迄趙王の無罪を主張し、王が赦されるのを聞いて自刎して死んでいった人物です。その行為を吉田松陰は模範にしたのです。「楚の屈平を仰ぐ」といふのは汨羅べきらに身を投じた屈原のことです。屈原は楚の懷王に仕へた重臣ですが、王を諫めて聞かれず、また讒言にあつて流され、忠義をつくす道を閉され、石を懷にして汨羅の淵に身を投ずるわけですが、その屈平の行為を仰いできた、といふのです。子遠が「燕趙多士一貫高。荆楚深ク憂フ只屈平」と送別の句に言つたのは此の事である。このやうに自分は日頃から貫高と屈平を仰いで「死」といふことを考へてきた。ところが、「関東の行を聞きしよりは」、「又一の誠字に工夫を付けたり」、誠といふ字に工夫をつけた。そこに自分の生涯を貫くことに決めたといふのです。だから、子遠が死字を贈つたとき、自分はこれを用ひず、一枚の白い綿布に、「至誠にして動かざる者は未だ之れあらざるなり」の一句を書き、手巾へ縫ひつけて江戸に来て、これを評定所に留め置いたのもこの志をしめしてゐるのだといふ。至誠にかける松陰の気魄が強く迫ってきます。さて、「去年來の事、恐れ多くも天朝・幕府の間、誠意相孚せざる所あり」天朝と幕府の間に誠意が相通じないところがあった。だから、「天苟も



吾が區々の悃誠を諒し給はば」、「區々の悃誠」といふのは、小さな、わずかな誠、「悃」も誠といふ意味です。自分のささやかではあるが、しかし心を込めた誠を天が「諒し給はば」わかってくれるならば、「幕吏必ず吾が説を是とせんと志を立てたれども」、「蚊蠹山を負ふの喩」、蚊は力、蠹はアブのことです。蚊のやうな小さな虫に山を負はせるといふことで、力が弱くて重い荷に耐へないことの喩の通り、「終に事をなすこと能はず、今日に至る」しかしそれは、「亦吾が徳の菲薄なるによれば」自分の徳が菲薄であったためにこのやうな事態になったのだ。だから、「今將た誰れをか尤め且つ怨まんや」誰かをとがめたり怨んだりしようか、と松陰はいふのです。松陰にとって、徳の菲薄はそのまま自分の学問の浅薄さを意味してゐたのです。自分の身も心も傾倒し尽くして幕府を説いた松陰であつたが、その尊攘の心も空しく今死に直面してゐる

る。その松陰が「吾が徳の菲薄なるによれば、今將た誰れをか尤め且つ怨まんや」と言つて、自分が信じた「至誠の道」に殉じようとするのです。このやうな文章に接しますと、いかに至誠といふものを松陰が生き生きと心の中に捉へてゐたかといふことが痛切に思はしめられるのであります。生命を賭けた決死の実験も結果的には失敗に終りました。けれども、至誠に生命を賭けてそれを完遂した、まさにそのことによつて、吉田松陰の至誠は完結されたと思ひます。

「至誠」の不滅

残りの時間も少なくなりました。読むだけでもと思ひますのでその次を読んでみます。

今日死を決するの安心は四時の順環に於て得る所あり。蓋し彼の禾稼くわかを見るに、春種し、夏苗し、秋刈り、冬藏す。秋冬に至れば人皆其の歳功の成るを悦び、酒を造り醴れいを爲り、村野歓聲あり。未だ會て西成に臨んで歳功の終るを哀しむものを聞かず。吾れ行年三十、一事成ることなくして死して禾稼の未だ秀でず實らざるに似たれば惜しむべきに似たり。然れども義卿の身を以て云へば、是れ亦秀實の時なり、何ぞ必ずしも哀しまん。何となれ

ば人壽は定りなし、禾稼の必ず四時を經る如きに非ず。十歳にして死する者は十歳中自ら四時あり。二十は自から二十の四時あり。三十は自ら三十の四時あり。五十、百は自ら五十、百の四時あり。……義卿三十、四時已に備はる、亦秀で亦實る、其の稅しひなたると其の粟たると吾が知る所に非ず、若し同志の士其の微衷を憐み繼紹の人あらば、乃ち後來の種子未だ絶えず、自ら禾稼の有年に恥ぢざるなり。同志其れを是れを考思せよ。

自分は三十で死罪にあつて、結局自分のなすことを終へなかつたのだから、穀物が実らないのに似てゐるので惜しいことだと人には見えるかもしれない。しかし、自分は「至誠の道」に生命を賭け生涯を貫いた。この生き方を見て、一人の同志でも自分の志を汲んでこれを継承してくれる人があれば、その種子がまた種子を生む。松陰はこの継承を信じたのです。それは又松陰の不動の確信でもあったのです。吉田松陰はさういふ種子として門人たちの心の中に甦へらうとしたのではないでせうか。

時代はこのあと七、八年後に大政奉還をむかへるわけですが、松下村塾の俊秀とうたはれた高杉晋作、久坂玄瑞、更には入江杉藏もその時代をみることもなくこの世を去ります。吉田松陰自身が自分の命をかけ、そして最も頼みとした門人たちも命を落とさざるを得なかつた時代といふのは大変に不幸だったとは思ひますが、しかし、松陰が蒔いた一粒の種が門人たちの心

に生き、そして明治維新へとつながっていったといふことを考へますと、一人の人間の力には確かに限りはある、だが、一人の人間が一人の人間に不滅の灯を点すことがどれだけ大事なところか、そして、それがどれだけ力の力になるのかといふことをしみじみ思ふのです。吉田松陰はそのことを自らの全生涯をかけて証明してみせたと思ふのであります。私どもが今生きてゐる時代は、諸君の多くが感じてゐるやうに、国や人生のことを、あるいは天皇のことを語らうにもなかなか語れる雰囲気ではない。大学ではたとへそのやうな話をしてもすぐシラケてしまふ、と諸君は言ふ。それは事実でせう。しかし、そんなことは今にはじまったことではないのです。私の在学時はもとより、戦前も大正時代もさうだったのです。だが、その中においてもやはり、必ずいつかは誰かがわかつてくれると信じて、自分の全身心を傾けて人にあるひは物事に対処していった人がゐたのです。さう思へば、砂を噛むやうな今の時代でも出来ないことはない。事実自分に出来ることを黙々とやってみる人もたくさんゐる。さういふ力が、どこかでこの国を支へてゐるんじゃないでせうか。何事でもよい、自分の志を定めてそれを試してみる。試すことよつて自分の志の弱さを、あるいは強さを感じ、そしてそれを自分の学問の根幹に据ゑていくといふことは本当に大事なことでないでせうか。吉田松陰の文章を読みながらさういふことを痛切に思ひます。

それでは最後に、「杉蔵を送る敍」といふ文章の最後の部分をご紹介します。吉田松陰

が大変心を許した弟子の入江杉藏に贈った言葉ですが、この部分が実に美しい。このやうな潑刺とした文章を残し得たといふことは、やはり人生そのものが潑刺としてゐたことの証左でせう。このやうな文章は皆さん声に出してしっかり読んでいただきたいと思ひます。

杉藏往^ゆけ。月白く風清し、飄然馬に上りて、三百程、十数日、酒も飲むべし、詩も賦すべし。今日の事まことに急なり。然れども天下は大物なり、一朝奮激の能く動かすところにあらず、それただ積誠これを動かし、然る後動くあるのみ。

今日の事まことに急なり、しかし、一朝奮激したからといって天下は動くものではない、それほど天下は大物なんだ。それではどうするか。松陰が言つてゐることはここでも一つです。「それただ積誠これを動かし、然る後動くあるのみ」、どうか言葉の調べとともにそこにこもる思ひを読みとって下さい。(昭和四十三年 早稲田大学卒)

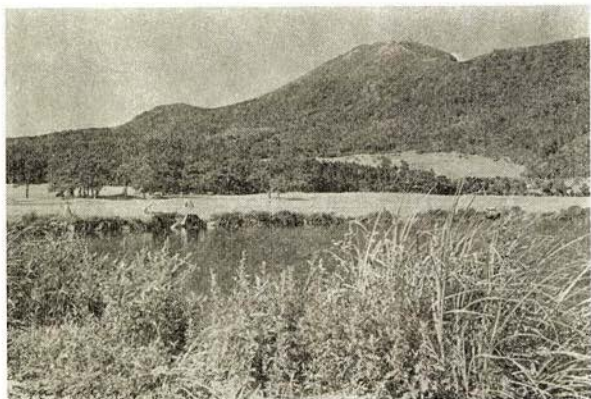
輪読導入講義

「聖徳太子の信仰思想と

日本文化創業」

福岡県立修猷館高等学校教諭

小柳陽太郎



ゴルフ場より妙見岳を望む

聖徳太子の文化史的偉業

片岡山の御歌 ― 平等の世界

△講師はこの講義のはじめに、前回の合宿レポート「日本への回帰」(第十二集)の講義録を引用しながら、学問の世界における輪読のもつ意義について、さらにテキストの著者黒上正一郎先生について説明を加へられたが、この記録ではその部分は省いた。前回のレポートを御参照いただきたいと思ふ▽

では本書の説明にはいつてゆきますが、今回は本書の著者黒上正一郎先生が聖徳太子がなしとげられた文化史的偉業についてその核心を示された個所と、聖徳太子がおよみになった御歌について書かれてゐる個所の二つをとりあげて、思ふところを若干述べさせていただきたいと思ひます。

聖徳太子の文化史的偉業

凡そ東亜の国々に於いて三宝興隆のために貢献せる帝王は必ずしも少くはない。而もその人々は伝統的教義に対する誠信の受容者であり、また仏教教団の熱心なる外護者であつたらうけれども、其の信仰教理を自ら国家生活の体験に融合し、その精神永く一国教化の趨向を照明せし如きは、殆んど之を見出す能はざるところである。真に教化と政治との融一を実現する如き精神原理は其の人々に依つては示されなかつたのである。ここに太子が我が文明の源流に立つて御身親ら真俗相依の範を示させ給ひ、大乘仏教

を国民的信念に統一して、政治道德活動を内容とする人生宗教を广泛宣传し給ひし御心は、永く国民の仰ぎまつらねばならぬところである。ここに外来の宗教教義は国民文化の開展要素として融合せられ、同時に大陸仏教の理想そのものも、また現実国土の道德活動にその生命化の郷土を見出したのである。東亜数億の宗教心を代表する仏教がすでに本国に於いて衰頽せるに拘らず、日本国土に其の生命を開展せしめられ、永く世界文化の上に其の意義を保持せしめられつつあることは、正しくこの偉大の御精神に依つて之が統撰され、遺教とこしへに国民教化活動の進路を支配せしがためである。太子の信仰思想の裡には既にわが国の世界人道的使命が発現せられてあつたのである。

われらはかくの如き御精神の表現をうつくしく三經義疏の内容に仰ぎまつるのである。

(五く六頁)

最初に出てくる三宝とは仏法僧のこと。「仏」は帰依、礼拝の対象としての仏、「法」はこの世の道理、「僧」は仏の道を具体的に実践する人格、それを合せて三宝といふのです。その三宝を興隆させるために、すなはち仏教を盛んならしめるために貢献した帝王は、東亜の歴史をひもとけば決して少くはなかつた。その人達は、伝統的な教義を心をこめて受け入れ、仏教教団を護ってくれた。

しかしながら「其の信仰教理を自ら国家生活の体験に融合し、その精神永く一国教化の趨向

を照明せし如き」人は過去の歴史の中に殆んど見出すことが出来ない。先生はさう言はれます。

例へば紀元前三世紀ごろインド、マウリア王朝にアシヨカ王が現れ、中国の南北朝時代、梁の国には武帝がゐた。これらの帝王が仏教興隆の為にどれほどその心血をそそいだか、その業績は歴史に詳しく記されてゐる。

ところが、アシヨカ王が亡くなってから僅か五十年で、マウリア王朝は崩壊してしまふし、梁の武帝に至っては武帝逝いて八年にして自らがうちたてた梁の国は滅びてしまふのです。といふことはこれらの帝王たちは、たしかに仏法の興隆に全力はつくしたでせうが、それは遂に国家生活の中で生かされることなく、仏法と国家生活は結局不統一のままに終わったことを示してゐます。

だが聖徳太子の場合はさうではなかった。その間の



事情について書かれたのがここにとりあげた文章なのですが、これを読んでいく際に心にとどめていただきたいことを二、三申し上げておきます。

○

三行目「自ら国家生活の体験に融合し、その精神永く一国教化の趨向を照明せし如きは」といふ文がありますが、このやうな文章を読む場合には、ただそれを概念的にうけとめて解釈するのではなく、その一つ一つの言葉のもつ深さにおもひをさせながら読んでいただきたいのです。例へば「国家生活」といふ言葉が使はれてゐますが、この言葉は単に国家といふ機構の中における生活といふやうなことではなく、国家と個人のかかはり方についておもひをひそめた、その緊張感の中に生れた言葉だと思ふのです。

さう読んで、はじめて次の「体験に融合し」といふ言葉につづいていく所以も理解出来るので、もし「国家生活」といふ言葉が一般的な意味にすぎないならば、ここは「国家生活にとり入れ」といふ程度でよかつたはずですが、だが筆者は国家生活の次に敢へて「の体験に」といふ言葉を挿入し、さらに「とり入れ」と言はずに「融合し」と言はれた、その言葉の微妙な脈絡に心をとどめていただきたいのです。ともあれ「国家生活」といふ何げない言葉も深い意味で用ひられてゐることに心をとどめて下さい。同じことはそれにつづく「その精神永く一国教化

の趨向を照明」するといふ個所についても言へるので、「永く」といふ言葉、「教化の趨向」といふ言葉、「照明」といふ言葉、それぞれに、他の言葉ではおきかへることの出来ない筆者のおもひがこめられてゐるのです。

○

次に「ここに太子が我が文明の源流に立つて御身親ら真俗相依の範を示させ給ひ」といふ個所について申しあげておきます。「我が文明」といふのは日本人の生き方、日本人が昔から大切にしてきた生き方といふことだと思ひますが、それは次の「真俗相依」といふことと密接につながつてゐるのです。いふまでもなく「真俗相依」といふことは仏教における教へですが、それとわが文明の源流に立つこととは実はそのまま直結する、それは何故か。「真俗相依」とは、真とは真諦、すなはち宗教的真理であり、俗とは俗諦、すなはち現実の政治経済生活のことをさすのですが、普通人々は、この真諦と俗諦を二元的に考へて、どちらか一方をとるといふやうに考へる。だがさうではなくその二つを一つのものとして把握する生き方、それが「真俗相依」といふ人生態度です。すなはち俗塵を捨てて仏教の世界に入るとか、现实生活を重んじて仏教を軽んじるとかといふやうな二者択一の態度ではなく、现实生活の中に宗教的真理を実現する、そのために全力をつくして生きてゆくといふことです。ところがこの「真俗相

依」の人生態度、それは実は日本に仏教が入ってくる以前から、日本人が大切にしてきた生き方でもあったのです。そのやうな日本人の生き方については例へば日本武尊の御生涯を思ひ浮かべていただければよくわかると思ふのです。尊は自らの真実をこの現実生活の中に実現すべく命のかぎり戦つて、その御生涯を終へられました。「嬢子せうごの床の辺に我が置きしつるぎの太刀その太刀はや」といふ臨終の御歌の中には、生涯を現実生活での苦闘に捧げられた尊のなしみがこの上もなく高い調べで歌ひ上げられてゐます。かうしておなくなりになった尊の魂は、八尋白智鳥となつて大空をはばたいて、天に向つて登つてゆかれるといふ壮大なロマンを生むのですが、尊が現実の中で徹底してお苦しみになったからこそ、そのやうなお姿になられたのであつて、白い鳥のイメージは決して、現実の外に描かれた、甘いロマンティックな夢ではなかつた。まして現実から逃避する弱者の幻想ではなかつた。それは限りない勇氣をもつて現実と戦はれた尊の魂そのものの表現でした。

さう言へば、聖徳太子が薨後、天寿国に行かれたにちがひないといふ御妃の述懐もここで思ひ合はせられます。太子の行かれた天寿国もまた、現実から離れたところに描かれた世界ではなく、現実での太子の御苦闘のいやはてに描かれた仏国土ではなかつたか、私にはこの天寿国にはるかに登つてゆかれた太子の魂と、八尋白智鳥になつて大空をはばたいて行つた日本武尊の魂が二つダブツて感じられるのです。ここにこそ「我が文明の源流」がある、それを仏

教的に表現すれば「真俗相依」といふことになるのです。

○

「大乘仏教を国民的信念に統一して」といふところも同じです。大乘仏教とはいふまでもなく、小乗仏教が自分だけの救ひを考へるのに対して、他の人が救はれない限り、自分は救はれなくてもいい、仏様の世界に救はれるのは皆と一緒でなければならぬといふことを念ずる宗教ですが、その、「皆と一緒に」、「他と共に」といふ心のひろがりもまた、日本民族の信念としてすでに用意されてゐたのです。さうであればこそ大乘仏教は日本人の精神にしっかり定着し得たので、そのやうな土壌のないところに「大乘仏教」といふ種を蒔いてもそれは決して稔らなかつたはずです。

次に「政治道徳活動を内容とする人生宗教を广泛宣传し給ひし御心は」といふ個所では「人生宗教」といふ言葉に心をとめて下さい。「人生宗教」といふのは聞きなれない言葉だと思ひますが、それは一体どのやうな内容をもつてゐるか。一般の宗教では、人々は先程申し上げましたやうに、一刻も早くこの塵にまみれた世俗をはなれて救ひの世界、又は悟りの世界にはいらうとする。しかしそれは決して宗教の正しいあり方ではない、真実の宗教は先程も申しました「真俗相依」、人生の現実に目をそむけることなく、その中に宗教的真理を貫き、宗教を現実

の政治活動の体験の中に生かしてゆく、さういふものでなければならぬ。さういふ「政治道徳活動」を内容とする「宗教のあり方」をふまへて、先生は「人生」といふ言葉を敢へて「宗教」の上に置いて、「人生宗教」とおっしゃったのではないでせうか。さらに言へば、「人生宗教」といふ言葉の中には、宗教といふ形式を越えた人生そのものの真実のあり方といふ意味もふくめられてゐるやうに思はれます。それは次に記されてゐる「大陸仏教の理想そのものも、また現実国土の道徳活動にその生命化の郷土を見出したのである」といふ言葉によつても察せられるところですが、仏教といへども「現実国土の道徳活動」によつてはじめて生命を与へられるといふ人生重視の思想が、この「人生宗教」といふ言葉の中にこめられてゐると思はれるので

○

大陸仏教といふのはいはば普遍的な思想です。それは非常にすぐれた思想ではあつても、日本といふ、この現実国土の中の政治道徳活動に結びつくことによつて、はじめていのちを与へられるのであつて、大陸仏教といふものだけでは、それは未だ故郷をもたぬ抽象の思想にすぎないのです。かうして抽象から具体的に、普遍から個にといふ道筋の中で、仏教思想は生命化されてゆくのですが、そのためにはそこに一個の偉大な思想家を必要とする、それが日本にお

いては、聖徳太子といふお方であった。この間の事情について黒上先生は次のやうに言はれま
す。

「東亜数億の宗教心を代表する仏教がすでに本国に於いて衰頽せるに拘らず、日本国土に其
の生命を開展せしめられ、永く世界文化の上に其の意義を保持せしめられつつあることは、正
しくこの偉大の御精神に依つて之が統撰され、遺教とこしへに国民教化活動の進路を支配せし
がためである」

仏教が本国において衰退したといふことは、或はアシヨカ王に見るやうに、梁の武帝に見る
やうに、それらの仏教思想が遂に「現実国土の中に生命化の郷土を見出」すことが出来なかつ
たといふことです。仏教は仏教、現実には現実、その二つがバラバラのままに終つてしまつたた
めに仏教にいのちが与へられることができなかった。だが日本ではさうではなかつた。日本と
いふ現実の国土の中で仏教は生命を与へられた。さればこそ日本における仏教は生きた現実の
力として世界文化の上に独自の意義をもつことが出来たのです。だがそれを可能にしたのは外
ならぬ聖徳太子といふ「偉大な御精神」であつた。その太子の御精神によつて「統撰」される
ことによつて、すなはち統一され、いのちを与へられることによつて、日本における仏教は千
数百年の歴史を通して、「国民教化活動の進路を支配」することが出来たのです。アシヨカ王
逝いて五十年、武帝なきあと僅か八年にして、彼らが現実国土を失つたことに比べれば我々は

何といふ永い歴史に恵まれてゐることか、それは思想と現実を統一された、すなはち「御身親ら真俗相依の範を示させ給」ふた太子の御精神の導きである。黒上先生はさう言はれてゐるのです。

片岡山の御歌 —— 平等の世界

太子の信仰思想は三経義疏また拾七条憲法に仰ぎ得るけれども、直接やまと言葉の親しさを以て大御心を偲ばしむるものは、日本書紀(推古天皇紀)に伝へられたる片岡山の御歌である。書紀には、「二十一年冬十二月庚午の朔の日、皇太子、片岡山に遊行しき。時に飢ゑたる者道の垂に臥せり。仍りて姓名を問ひたまへども言さず。皇太子、視て飲食を与へたまひ、すなわち衣裳を脱ぎて飢ゑたる者に覆ひて言りたまひしく「安らかに臥せ」と宣りて、歌よみしたまひしく」として

しなてる 片岡山に 飯に飢て こやせる その旅人 あはれ 親なしに なれなりけめや

さすたけの 君はやなき 飯に飢て こやせる その旅人 あはれ

と一首の御歌をあぐるのである。(略)推古天皇二十一年十一月太子は片岡山にいでまし、道の辺に飢ゑたる者の臥すのをみそなはしてあはれみましたのである。その御歌の形式は素朴であると共に御言葉の高きしらは痛切の大御心の直ちに我等の胸に迫るをおぼゆるのである。「しなてる 片岡山に 飯に飢て こやせる その旅人 あはれ」とみそなはしましたままの痛感を直敘せさせ給ひ、「親なし

に「なれなりけめや」と人の運命と心理を洞察して再び「その旅人 あはれ」とくりかへし給ふ前後の同じ御言葉の大いなる繰返しは、内にこもりまず大御心の切実なるがために息をもつがせ給はずして、一首を限りなき節奏の波動に渾融せしめ給ふのである。あはれみまず大御心に飢人のかなしき運命は生きしめられ、御歌は個人的特異性を止めぬほどに全人格的痛感が悲痛の洞察をつくして、ここに我は他に没し、他はまた我に生きて人生の大海に無限安慰の光明をめぐませ給ふのである。「群生とその苦楽を同じうす」(維摩経義疏文殊問疾品)とのたまひし大御心のうつきあらはれを仰ぎまつるのである。

(一五七〜一五九頁)

最初に出てるる三経義疏といふのは法華経、勝鬘経、維摩経といふ三つの經典について聖徳太子が御書きになった註釈書のことですが、この三経義疏や拾七条憲法に、太子の信仰思想はつぶさに記されてゐる。しかしながら、それらは何といつても漢語的な表現ですが、太子にはわれわれ日本人の心に、直接にひびいてくる親しみ深いやまと言葉によって表現された歌がある。それは日本書紀に伝へられた片岡山の御歌だと言はれるのです。片岡山とは法隆寺の少し南の方にある丘のこと、その丘をお通りになった時、或る飢ゑた人にお会ひになった時のお歌なのです。その詞書きは読んでいただければおわかりになるはずですが、ただその中ではおしまひのところにある「安らかに臥せ」といふ太子の御言葉に注意して下さい。実はこの歌にまつはる伝説は太子信仰と重なって、ずっと後の時代に至るまでいろいろな形で文献に現はれます

が、何故かこの「安らかに臥せ」といふ言葉は出てこない。さりげない言葉ですが、この言葉が記されてゐない他の文献と比較してゐると、その一つの言葉を記した日本書紀の編者の心くばりがしみじみと伝はってくるやうなおもひがいたします。短い言葉ですが、大切にしていただきたいと思ひます。

歌の意味は、最初の「しなてる」は片岡の枕詞、その片岡山で食べ物がなく横に臥してゐる旅人よ、かはいさうに、そこで一旦切れます。次の「親なしになれなりけめや」は一般にはお前は親なしに生きてきたのだらうか、そんな筈はない、親はゐる筈なのに」と解釈してゐるやうですが、私はもっと端的に「お前の親は死んでしまったのか」と解釈すべきだと思ひます。第一に前のやうに解すると何かそこに理屈っぽいものを感じますし、そのために気持に屈折が出来てしまひます。第二にはこの歌は後の時代に歌ひつがれて長歌形式が短歌形式に変化してゆくのですが、今昔物語には次のやうに記されてゐます。

下照るや片岡山に飯に飢ゑて伏せる旅人あはれ親なし

この歌では明らかにお前の親は死んでしまったのだといふことになつてゐますが、この歌が伝承されてゆく間には、このやうな解釈が一般に行はれてゐたことがわかります。さういふことから見ても矢張り「お前の親は死んでしまったのか」といふ解釈が正しいのではないでせうか。

次の「さすたけの」は「君」の枕詞、この「君」についてもいろんな解釈があって、天皇とか、ある地域を治めてゐる領主とかいふ解釈も行はれてゐるやうです。例へば、天皇の場合だと、天皇が治めてをられるこの国でそんな飢ゑ人があるといふことはあり得ない筈だ。ちゃん天皇はいらっしゃるはずだ、なのに……といふことになる。私はこの解釈もどうも理屈っぽくて何かなじめないやうに思ひます。ここでもやはり、もっと卒直に、妻とか恋人とかいふ解釈でいいと思ふ。お前には妻はゐるのか(「はやは」は、「は」は助詞の「は」、「や」は疑問です。「はやすでに」といふ意味ではありません。)このやうな場合、天皇のことなどを言ふよりその飢ゑ人を暖かく見守ってくれる妻を連想して、その妻はゐるのかと呼びかけるのがずっと自然ではないでせうか。現に、これとほぼ似た聖徳太子のお歌が矢張り短歌形式になって、万葉集の中に収められてゐますが、それは

家にあらば妹が手纏かむ草枕旅こやに臥たびとせるこの旅人あはれ

といふお歌です。すなはち「家にゐるならば妻の手を枕として寝ることも出来るだらうに」といふことで、作者は直ちに旅人の妻を連想してゐるのです。このことからしても「君」はやはり「妻」ととるべきでせう。さうして最後にもう一度、「飯に飢てこやせるその旅人あはれ」という切実のおもひを繰返してこの歌は終るのです。この最後の繰返しについて黒上先生は、「再び『その旅人 あはれ』とくりかへし給ふ前後の同じ御言葉の大いなる繰返しは、内にこ

もります大御心の切実なるがために息をもつがせ給はずして、一首を限りなき節奏の波動に渾融せしめ給ふのである」と述べられ、この「大いなる」繰返しの背後に「内にこもります大御心の切実」さを偲んでをられます。そしてその大御心の切実さが、この一首を「限りなき節奏の波動」の中に「渾融せしめ」る原動力になってゐると言はれるのです。

先生はさらに次のやうにつづけられます。「あはれみます大御心に飢人のかなしき運命は生きしめられ、御歌は個人的特異性を止めぬほどに全人格的痛感が悲痛の洞察をつくして、ここに我は他に没し、他はまた我に生きて人生の大海に無限安慰の光明をめぐませ給ふのである」全身をゆさぶるとき飢人に対する太子の御痛感「我は他に没し、他はまた我に生き」る悲痛平等の世界を現出せしめられるのです。それはまさしく「人生の大海」であり、その大海の中に摂取されて、われわれは、無限安慰の光明」をめぐまれるのです。この「人生の大海」といふ言葉は、太子が勝鬘經義疏の中で、經典の中にある「大海」といふ言葉をとりあげて「海とは菩薩に比す。言ふ心は、広く衆生を抱くこと、即ち大海の抱納無窮なるが如し。」とお述べになつた御言葉や、維摩經の中で維摩詰のことを「心大いなること海の如し」と讚嘆した言葉について、太子が、「万機に達して遍照せざること無し」と註をお加へになつた御言葉などを思ひ出させます。あらゆるものを抱きとめ、生きとし生けるすべてのものにあまね遍く心をそそがれる太子の大御心の中に、「無限安慰」の光を仰がれる黒上先生の御心がひしひしと伝は

って参ります。かくて維摩経義疏の中で「群生とその苦楽を同じうす」とおっしゃったその御精神は、この御歌の中にゆるぎない姿として表現されてゐると先生は言はれるのです。この維摩経義疏の「群生とその苦楽を同じうす」といふ御言葉のすぐ前には「大士は其の身の苦を忘れて苦を同じくして化す」といふ、これまた切々たる太子の御言葉が記されてゐますが、我が身の苦を忘れ、他の人々の苦しみの中に我が身を没入せしめたまふ太子の御精神の中に、我々のいのちは生きしめられ、そこに本当に平等の世界が実現するのです。

最後にもう一つ申し上げたいことは、この黒上先生の御言葉、特に「『その旅人、あはれ』とくりかへし給ふ」といふ個所から最後の「仰ぎまつるのである」まで、その文章の一つ一つの言葉にこめられたおもひの深さです。このやうな文章にふれてゐると、書物を読むときに言葉のもつ意味をたどることもさることながら、その言葉の調べに心を合せることがいかに大切なことかをしみじみと感じさせられます。そのことは他ならぬ黒上先生が聖徳太子の御言葉にふれられたとき痛感なされたことなのです。そのことをふまへて、先生は太子研究の正しいあり方について次のやうに述べてをられます。

「故に太子御著作の研究は、単に語義の訓詁、また教義の解説に依つてのみ之を成就せらるべきではない。国民的憶念の信に基きてその御言葉の微妙の脈絡に心的内容を洞察し、此にこれらの知的作業を統一することに依つて始めて到達せらるべきである。即ち言葉の生命に対す

る芸術的直観に一切の分析的研究所を綜合することである。」(本書、一七二頁)

勿論知的作業がつまらないといふのではない。しかしそれは言葉の生命に対する芸術的直観によつてはじめて綜合統一せられ、生きたものになるといはれるのです。人のことばにふれることは人のいのちにふれることだ。そのためには、言葉の微妙な脈絡の中に、心の中味を洞察する力が訓練されなければいけない。その訓練を放置したまままで概念を操作しても、そのやうな人の目には何一つ眞実は見えてはこないでせう。

これから班に別れて輪読していただくわけですが、特にこの御本の中の波うつごときことばの調べに深く心をとどめて読み味はっていただきたいと思ひます。

短歌創作について

九州大学大学院医学研究科四年

前田秀一郎



妙見岳より高原を望む

はじめに

短歌創作の意義

「万葉集」の歌

正岡子規の歌

短歌のつくり方

はじめに

皆様は、これから妙見岳登山、短歌創作といふ時間を持たれることになってをられますが、今迄に短歌を作られたことのない方も多くいらつしやると思ひます。「短歌を作るなどといふことは自分には縁遠いことで、短歌創作のことを思ふと折角の雲仙国立公園での散策も憂鬱になつてしまふ。」とお考への方も多いいのではないでせうか。確かに私達は日頃短歌を作る機会が少なく、しかも最近の新聞の歌壇や雑誌に載つてゐる短歌の中には、作者だけにしかわからぬやうな思ひを難しい言葉で表現してゐるものも多いため、短歌は特殊な才能にめぐまれた人達の教養や趣味として作られるものだと考へられがちです。そこで今からの一時間、私達はこの合宿教室で何故短歌を作るのか、又実際に短歌を作る際にどのやうなことに心を配るかといふことをお話したいと思ひます。

短歌創作の意義

短歌は、五七五七七の文語定型詩で千数百年の伝統をもつてゐます。その伝統は、専門歌人たちだけによつて守り伝へられたものではありません。様々な職業の人々が身分の上下や知識の有無にかかはらず、日々の生活の中で体験した人生上の出来事や美しい自然に触れての思ひ

を、五七五七七といふ同じ定型によみ込んでをり、それら優れた短歌の一首一首によって長い伝統が守り継がれてきたのです。従つて短歌は元来自分の思ひを表現する万人共通の詩型として、日本人にとつて極めて身近かなものだったのです。身近かなものと申しましても、それは短歌がたやすくできるといふことではありません。実際に作つてみられるとおわかりになると思ひますが、感じたことをただならべただけでは、五七五七七のわづか三十一文字に自分の思ひをよみこむことはできません。自分のもつとも表現したいのはどういふことか、言ひ換へると感動の中心は、どこにあるかを見定めて短歌によみあらはすことが大切です。その為には、よみたいと思ふ事がらをよくみつめることが必要です。その上で、自分の心にできるだけびつたりした言葉を選んでいく。さうすることによつて、眼には見ることの出来ぬ内心の動きが、言葉の姿、短歌の調べとしてはつきりとよみあらはされていくのです。そのやうにして歌がよめた場合には、たとへ拙ない歌であつても、自分の思ひをよみあらはすことが出来たといふよろこびで、心が晴れやかになる。このやうに短歌をつくることは、自分の内心を省みることになるのです。このことは、短歌創作の大事な意義の一つです。

次に短歌は心を動かされた物ごとをよみあらはすものですから感動がなければ歌は出来ません。しかし歌をよまうとして周囲の物事を注意深く見てゐますと、今迄は見過ぎてゐた美しい物が、思はぬところに潜んでゐるのに気付かされ、つよく心を動かされることがしばしばあ

ります。そのやうな体験を繰り返すうちに、私達のものごとで感ずる心は深められていくのです。このやうに短歌をつくることによって、私達の情意は深められる。そこにも短歌をつくる意義、よろこびがあるのです。また先程申しました様に、短歌創作は、自分の内心の動きを言葉の姿でとらへることになります。このことは、また、他の人の作った短歌をよみ味ふことによって、その作者の心を知ることにもなるのです。昔の人のよんだ短歌をよみ味はふことによって、私達は年月の隔りを越えて、歌に込められた作者の思ひを生き活きと感じ取ることが出来ます。そして人と短歌をよみ交はすことは、その人と心を開いて語り合ふことになるのです。このやうに短歌が人の心と心とを結びつけるといふ事は、短歌のもつ素晴らしい働きであり、ここにも短歌創作の大事な意義があると思ひます。

以上、短歌創作の意義を述べてまいりましたが、これ



からプリントに記してをります歌のいくつかを皆様と読み味はひながら、これらの意義、さらに実際に短歌を作る際に、どのやうなことに心を配るかといったことについて、お話しをすめたいと思ひます。

「萬葉集」の歌

「萬葉集」は、御存知のやうに奈良時代の末に成立した日本文学史の上で最も重要な歌集で、皇族方の歌や、身分の低いために名の知られていない庶民の歌迄、併せて約四千五百首が収められてゐます。私は、学生時代に友人の勧めで「萬葉集」をよむやうになつたのですが、巻一にある中皇命なかつすめらみことが、紀伊の温泉に行かれた時の御歌三首につよく心をひかれました。中皇命は、舒明天皇の皇女、間人皇女はしひとであられるとか、舒明天皇の皇后で後に齋明天皇となられた方であるとか諸説がありますが、何れにしても専門歌人ではありません。その三首のうち二首をよんでみませう。

わが背子せこは仮廬かりほ作らす草かやなくば小松こまつが下の草かやを刈らさぬ
わが欲ほりし野島のは見せつ底深あこき阿胡根あこねの浦うらの珠たまぞ拾ひろはぬ

一首目の「背子^{せこ}」は、夫や兄弟など男性を親しみ呼びかける言葉で、「作らす」の「す」、
「刈らさね」の「さ」は尊敬の助動詞で、従って親しみのなかにもつつましさの感じられる歌
ですが、歌の意は、「あなたは今、旅のやどりに仮小屋をおつくりになっていらっしやいます
が、もし屋根をおふきになるかやが御不足なら、あそこの小さな松の下のかやをお刈りなさい
ませ」となります。二首目の「珠」は、美しい小石又は、貝のことで真珠をさすこともありま
す。歌の意は「私が前からは非みたいと願ってをりました野島の海辺の景色は見せて戴きまし
た。けれど底の深い阿胡根浦の珠は、まだ拾ひません。」といふ歌で、「深い海底にある珠が欲
しいものです。」といふ意を含んでゐます。一首ともに、思ひをそのまま言葉に表した何の技
巧も感じられない歌ですが、美しい草木の緑や海辺の景色が眼に浮かび、若い女性の純真では
つらつとした心が感じられます。おそらく結婚されて間もない頃の御歌と思はれますが、仮に
皆様が恋しい女性からこのやうに呼びかけられたらどうなさいますか。私でしたら、松の下の
かやは一本たりとも残さず刈りつくすでせうし、水にもぐるのは苦手ですが、息の続く限り
は、もぐって真珠を拾つてこようと努力するに違ひありません。若い女性の可愛らしさが活き
活きと伝はつてきて、千三百年も前によまれたのですが、その年月の隔りを感じさせぬ素晴ら
しい御歌であると思ひます。この御歌にみられるやうに、短歌をつくる上で最も大切なこと
は、巧くよまうとすることよりも、自分の思ひを卒直に表現すること、まごころをよんだ歌

は、必ず人の心に訴へる力をもつてゐます。

ところで、この歌に触れた時に、私はこのやうにはつらつとした歌を遺した萬葉の人々は、どのやうな時代に生きたかを知りたいと思ひ、「萬葉集」に戴つてゐるこの当時、すなはち七世紀頃によまれた歌の時代背景を調べてみました。当時の日本は、氏族専横の豪族社会から統一国家としての律令制国家への大変革期にありました。六四五年、中大兄皇子の決断により、大化の改新が断行され、蘇我入鹿が誅滅され、変革の火蓋が切られました。「萬葉集」巻一に中大兄皇子すなはち後の天智天皇の次の御歌があります。

わたつみの豊旗雲に入日さしこよひの月夜つくよ明らけくこそ

「わたつみ」は海、「豊旗雲」は、美しく旗のやうにたなびいてゐる雲、「月夜」は月そのものことで、「明らけくこそ」の「こそ」のあとには推定の気持がこめられてゐます。歌の意は「今、浜辺に立ってみわたすと海の上に豊かに旗のやうになつてゐる雲にあかく夕日の光が射してゐる。この様子では多分、今夜の月は澄んで明るいことであらう」といふ、海上にかかった豊旗雲に入日の射す雄大な景色から、直ちに澄んで明るい海上の夜の月を想像された荘麗な御歌です。公地公民の原理に立つ新しい統一国家確立の為、果敢に行動された皇子の、将来に

対する明るい希望の感じられる御歌です。しかしこの統一国家への変換は、多くの障礙に直面し、多くの悲劇の上に行はれました。六五七年には、孝徳天皇の皇子、有間皇子が、蘇我赤兄にそそのかされ、斎明天皇、中大兄皇子の政治に対し、反逆を企てられたといふ蘇我赤兄の密告により、刑死されるといふことがありました。「萬葉集」卷二に皇子の次の御歌があります。

有馬皇子自ら傷みて松の枝を結べる歌一首

磐代いはしろの浜松が枝を引き結びまさきく有らばまた還りみむ

家いへにあれば筒けいに盛る飯いひを草枕旅にしあれば椎の葉に盛る

この御歌は、有間皇子が捕へられ護送される途中でよまれたものです。中大兄皇子が、何故の謀反かと尋ねられたのに対し、皇子は「天と赤兄とのみ知る」と答へられます。そして刑に処せられたのです。一首目の松の枝を結ぶのは、幸福を願ふ行ひであり、「まさきくあらば」の「ま」は接頭語で「さきく」は幸であるといふので「罪を免れることができたらば」といふ意味です。従つて歌意は、「磐代の浜の松の枝を結んで幸を祈つて行く。無事であることができたならまた帰つてきてこの結び松を見よう。」といふことです。死の子感に心を痛められながら、なほ無事であることを望まれてゐるお心がうかがはれます。二首目の「筒」とは食物

を盛る椀のやうなもので「家にゐる時は食器に盛った御飯を、草を枕に寝る不自由な旅であるから椎の葉に盛ることである」といふ意味です。生死の境にあつてよまれたこの二首の御歌は、共に御自分の行動をありのままに表現してをられ、十九歳といふお若い皇子の素直な人がらがあらはれてゐて、よむ人に同情の気持ちをおこさせます。

この後六六三年には、朝鮮半島、白村江において日本軍は、唐、新羅に敗れ、大陸での基盤を失ひ、内治外交共に危機に陥ります。そのやうな中で公地公民の原理に立つ統一国家の基盤を打ち立てるべく改新の事業は推進され、六六八年、天智天皇は近江の都で正式に踐祚されます。しかし三年後、変革の中心的御存在であられた天皇は崩御され、六七二年、皇子の大友皇子（弘文天皇）と弟の大海人皇子との間に壬申の乱が戦はれ、乱平定の後、大海人皇子は踐祚され、天武天皇となりました。この天武天皇の御世に改新の事業は完成し、白鳳の文化が展開しました。やがて六八六年、この英邁な天皇も崩御され、今や、統一国家日本の将来は、皇太子、草壁皇子をはじめとする天皇の皇子達、十余名の協力にかかつてゐました。ところが日本書紀には、天武天皇崩御の時に、「大津皇子、皇太子を謀反かたむけむとす」といふ記事がありません。大津皇子は、天武天皇の皇子で母君は、持統天皇の姉君であられる大田皇女です。この大津皇子と持統天皇を母君とする皇太子、草壁皇子とをめぐる宮廷内の対立が決定的なものとなつたやうです。大津皇子は直ちに捕へられ、死を賜りました。時に二十四歳の若さでした。大

津皇子には、母君を同じくする二歳年上の姉君、おほくのひめみこ大伯皇女がられました。御二人の母君、大田皇女は、既に亡くなってをられ、大伯皇女は、いつきのみや齋宮として伊勢にをられました。齋宮とは、天皇の代りに伊勢の大神宮にお仕へする重要な任務で、未婚の女性が任にあたりました。父帝崩御の後、謀反の疑ひをかけられた大津皇子は、このただ一人の血を分けた姉君をひそかに訪ねられました。「萬葉集」巻二にこの時に詠まれた皇女の歌が載せられてゐます。

大津皇子ひそかに伊勢神宮に下りて上り来ませる時大伯皇女のみませる歌二首

わが背子を大和へ遣るとき夜更けてあかとき曉露に吾が立ちぬれし

二人行けど行き過ぎがたき秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ

一首目の「わが背子」とは弟の大津皇子のことです。「大和へ遣ると」の「遣ると」といふのは、皇女の「自分のもとから弟を今、帰したくない」と思はれる御心がつよいのでこのやうな表現になったものと思はれます。例へば、「わが背子の大和へ行くを」としてみますと、単なる情況の描写になつてしまひ、皇女の皇子を思はれる御心がそれほど感じられません。このやうに言葉は、作者の心の表はれなのです。「さ夜更けて」の「さ」は接頭語で、人目をはばかって夜ふけに出発されたのでせう。「曉露」とは夜明けの露のことです。一首目の意は「私

の弟が大和へ帰らうとして夜がふけて出発したのを見送り立ちつくしてゐるうちに夜明けの露に濡れてしまった。」といふことで、一首目は「一人でつれだつて行つても心細く行き過ぎにくい秋の山を、どのやうにして君はひとりで行かれるのであらうか」といふ意味です。前の歌は、皇子を送られた時の歌であり、後の歌は、ひとりできびしく去つて行かれた皇子を思ひやつてよまれた歌です。たった一人の弟の悲痛な思ひを敏感に感じとられた皇女の切ない心情が胸をうちます。この直後、大津皇子は捕へられ自害されました。皇子を気づかつて大和へ上つてこられた皇女は、皇子の死を知らされ、次の歌をよまれました。

現身うつせみの人にある吾われや明日よりは二上山いにしへを兄弟いろせと吾が見む

「現身うつせみの人」とは、地上にある人の意、二上山は皇子の埋葬された山です。「兄弟」は弟、大津皇子をさします。一首の意は、「生きて現世に残つてゐる私は、明日からはこの二上山をわが弟の君と思つて見て偲ぼう」といふことです。弟の死を悲しまれる皇女の御心は、この御歌によって現代の私達に年月の隔りを越えて伝はつてきます。

以上読んでまゐりました有間皇子、大伯皇女の歌に表現された悲しみは、この時代の動乱を生きた全ての人々の悲しみの象徴であり、これらの歌によって私達は、動乱の中に戦ひ生きた

古代の人々の緊張した生を偲ぶことができます。後の白鳳、天平の文化を開花させた人々は、この悲しみを痛感してゐた人々でもあったのです。持統天皇の御代に、かつて天智天皇が改新の政治をすすめられ、今は荒れ果ててしまった近江の都に立った柿本人麻呂のよんだ歌が「萬葉集」巻三にあります。

近江あふみの海夕浪うみ千鳥汝が鳴けば心もしのいにしへ思ほゆ

「近江の海」とは琵琶湖のことで「夕浪千鳥」とは夕暮れの浪にぬれつつ飛び交ふ千鳥、「千鳥」は固有名詞ではなく、多くの小鳥が群れをなしてゐるのを指すといふ説があります。「心もしのに」は、心もしつとりとなびくといった意で、一首は、「暮れていく琵琶湖の夕浪にぬれつつ飛び交ふ小鳥たちよ。お前が鳴くと心がなえなえて死なむばかりに、いにしへのことが思はれてならない。」といふ意味です。大化の改新を推進された天智天皇の御代のこと、この大業推進の過程でおこった数々の悲劇への思ひ出が人麻呂の胸をしめつけるのです。「萬葉集」を代表する歌人、柿本人麻呂の精神の根柢にこのやうに深い、「古へ」への思慕があることを忘れてはならないと思ひます。「萬葉集」には、この他にも多くの素晴らしい歌があり、「萬葉集」以後にも歌風の変遷はありましたが、短歌は現代迄連綿とうたひつがれ、多く

の人々によって無数の名歌が遺されてゐます。その中から次に明治の歌人、正岡子規の歌をよんでまゐりたいと思ひます。

正岡子規の歌

子規は、二十三歳の時、肺結核の為咯血し、その結核が原因で脊椎カリエスに侵され、二十九歳から三十六歳で亡くなる迄の八年間は、病床に横たはったまま寝返りもできない闘病生活をおくつたのです。さういふ悲惨な宿命の中で、子規は明治三十一年、三十二歳の時、「歌よみに与ふる書」といふ文章を発表し、当時よまれてゐた多くの短歌が、自分の實際の体験に基づくのでは無く、「空想」とか「観念」をもととしてつくられ、思ひをありのままに表はしてゐない傾向を批判し、萬葉の歌風を慕ひ、現実を凝視して自分の感動を卒直に表現すべきことを訴へ、明治三十二年には、病床に集つて来る七、八人の同志と共に短歌会を発足させ、自ら短歌創作を實踐しつゝ短歌の改革をすすめていったのです。次の連作短歌十首は、このやうな子規晩年の明治三十四年によまれたものです。歌の下に記した番号は、説明の便宜の為のものです。

五月五日にはかしは餅とて榊さかきの葉はに餅を包みて祝ふ事いづこも同さまじなるべし。昔は膳夫をかしはでと

言ひ、歌にも「旅にしあれば椎の葉に盛る」ともあれば、食物を木の葉に盛りし事もありけんを、今の世に至りて猶五日のかしは餅ばかり其名残をとどめたるぞゆかしき。かしは餅の歌をつくる。

椎の葉にもりにし昔おもほへてかしはのもちひ見ればなつかし (1)

白妙のもちひを包むかしは葉の香をなつかしみくへど飽かぬかも (2)

いにしへゆ今につたへてあやめふく今日のもちひをかしは葉に巻く (3)

うま人もけふのもちひを白かねのうつはに盛らずかしは葉に巻く (4)

ことほぎて贈る五日のかしはもち食ふもくはずも君がまに (5)

かしは葉の若葉の色をなつかしみこゝだくひけり腹ふくるゝに (6)

九重の大宮人もかしはもち今日はをすかも賤の男さびて (7)

常にくふかくのたちばなそれもあれどかしはのもちひ今日はゆかしも (8)

みどり子のおひすゑいはふかしは餅われもくひけり病癒ゆがに (9)

色深き葉廣がしはの葉を廣みもちひぞつゝむいにしへゆ今に (10)

ことばがきにある膳夫といふのは料理人のことで、引用の歌のことばは、先の有間皇子の御歌のことばです。(1)の「もちひ」は「餅飯」の略で餅のことです。(3)の「あやめふく今日」とは、「あやめ」つまり菖蒲を軒にさす今日といふことで、五月五日の端午の節句の今日といふ

ことです。(4)の「うま人」とは、家柄の良い人、位の高い人といふことで、身分の高い人も今日の餅は、銀の食器に盛らず、かしはの葉にまいて食べるといふことです。(5)の「ことほぎて」といふのは、今日の節句をお祝ひしてといふ意、「君がまにまに」とは、君の好きなやうにしてくれといふことです。(6)「ここだ」といふのは甚しくといふ意、(7)の「九重の大宮人」とは、宮中に仕へる身分の高い公卿のことで、「をす」とは、食べるの尊敬語、「賤の男」とは、身分の卑しい男のことで「さびて」の「さぶ」とは、そのものらしい態度、状態であることを示す接尾語です。かしは餅は、手づかみで口にはほぼぼって食べるところにうまさがあるので、今日は、公卿さんも身分の卑しい男のやうにしてかしは餅を召し上がってをられることであらうかといふ意です。(8)の「かぐのたちばな」とは香りのたかいみかん、(9)の「みどり子」とは幼い子供のこと、「おひすゑ」とは、生ひ行く先のこと、「おひすゑいはふ」とは、成長を祝ふこと、「病癒ゆがに」とは、病気がなほってしまふかのやうに、といふことです。(10)の「葉を廣み」とは葉が廣いのでといふ意です。子規は、「歌よみに与ふる書」の中で、歌の用語について「雅語俗語洋語漢語必要次第用ふる積りに候」といひ「如何なる詞にても美の意を運ぶに足るべき者は皆歌の詞と可申、之を外にして歌の詞といふ者は無之候」と言つてゐます。この連作でも、食べるといふことを表はすのに、「食ふ」といったり、「をす」といふみやびた言葉を用ひたり、「腹ふくるゝに」といふ言葉があるかと思ふと「かぐのたちばな」とい

ふ優雅な言葉を用ひてゐたりして、実に自在に言葉を駆使してゐます。そのことによつて、子規の精神の躍動が、正確に活き活きと表現されてゐます。子規は、自分の病氣のことについては、(9)で「病癒ゆがに」とさりげなく述べてゐるだけですが、彼の遺した隨筆によると、この連作をつくつた頃には、病は悪化し、毎日のやうに高熱を發し、体の激烈な痛みに苦しめられ、身動きすらできないこともしばしばあったのです。大抵の場合には、このやうな苦しみの中であつては、その苦しみにのみ心を奪はれてしまふことせう。しかし子規は、当時の歌壇の短歌が空想や技巧に走つて心情のままを現はしてゐない風潮に対し、現実を見据ゑて、體驗した事物をありのままに表現する「写生」を短歌創作の基本として提唱し、実行した人でした。従つて子規は、短歌や俳句を創作することによつて現実をありのままに見据ゑる能力を養ひ育ててきてゐたのです。悪化していく病勢によつて死を予感した子規が、身の周りの事物をいとほしく見つめた時、ともすれば見過ごしてゐた美しいものの存在に気づくことができたのではないでせうか。子規にとつて病氣の苦痛のみが現実だったのではなく、永年の創作活動によつて磨かれ、洗練された情意が感じとる美しさも又、ゆるがすことのできぬ眞実だったのです。そしてそのやうな美しいものに対する惜別の思ひを子規は歌に表現したのです。五月五日のかしは餅を見て、私は、おいしさうだと思ひ、子供の頃、かしは餅を食べたことをなつかしく思ひだすことはありましたが、子規のやうに、有間皇子の生きた萬葉の昔をも思ひおこす

といふことは、考へ及ばぬことでした。子規は、かしは餅を通して伝統を生活実感としてとらへてゐるのです。そのよろこびが、同じ伝統に生きる人々、「九重の大宮人」や「賤の男」、に對するわけへだての無い親近感、同感となり、病氣の苦痛をもいつか忘れさせてしまふほどにひろがつてゐるのです。かし餅を、こんなにおいしく食べることできた子規を素晴らしいと思ひます。子規のやうな豊かな感性を少しでも身につけたいものと思ひます。私共のこの合宿教室に過去数度お越し下さって御講義をして戴いてをります文芸評論家の小林秀雄さんは、その著書『美を求める心』の中で「さういふ姿（物の美しい姿）を感じる能力は誰にでも備はり、さういふ姿を求める心は誰にでもあるのです。ただ、この能力が、私達にとって、どんなに貴重な能力であるか、また、この能力は、養ひ育てようとしなければ衰弱してしまふ事を、知つてゐる人は、少ないのです。」「感ずるといふことも学ばなければならぬものなのです。」と述べてをられますが、最初に申しましたやうに、短歌創作は、私達の感性を磨き、育てるために素晴らしい成果をあげるものです。子規のこの連作短歌は、私達にそのことを教へてくれてゐると思ひます。

以上、萬葉集の歌、子規の歌をよんでまゐりましたが、これらの歌によつて短歌が單なる趣味や教養としてよまれてきたものでないことをおわかり戴けたことと思ひます。私達もこれから短歌を創作するのですが、どうかこのやうな萬葉集や子規の歌にならつて、思ひを卒直に、

正確に言葉に表現することを心がけて下さい。

短歌のつくり方

最後になりましたが短歌をつくる上での技術面について少しお話し致したいと思ひます。このことは、合宿第一日目にお話しなさいました山田先生、又明日御講義なさいます夜久先生の御共著であり、合宿教室の必読書となつてをります「短歌のすすめ」の三十五頁から百十七頁に詳しく書いてありますから後でそこを読み返して戴きたいと思ひます。

(一) 用語、仮名遣ひ

まず、用語のことですが、勿論、現代語を用ひてよいのですが、短歌の五七五七七といふ定型は文語の語法の中から生み出され、文語で詠みつがれてきました。ですから、文語の語法と短歌の調べとは切り離せないものになつてゐます。かういふわけで歌は文語の語法にならつて詠むべきだと思ひますが、文語の語法でよめば、仮名遣ひも歴史的仮名遣ひを用ひるのが当然です。しかし急に歴史的仮名遣ひを使はうとしても無理ですので、今日は現代仮名遣ひで結構です。ただゆくゆくは、歴史的仮名遣ひでよんで戴きたいと思ひます。

(二) 一首一文

短歌は原則として、一首一文といって感動の中心を一つに定めてよむことが大切です。例へば、有間皇子の

磐代の浜松が枝を引き結びまさきく有らばまた還りみむ

といふ歌に、もし、文の切れ目を示す句点を入れるとしますと唯一カ所歌の最後にきます。勿論、倒置法の使はれた例へば正岡子規の連作の六首目の

かしは葉の若葉の色をなつかしみここたくひけり腹ふくるゝに

といふ歌ですと、句点は「くひけり」の後で文の途中にきますが、この場合も一カ所のみです。原則として句点は一カ所といふのが普通です。一文でよみ通すことによつて一貫した精神がそこに流れるのです。歌ひたいことがいくつもあるときには、歌ひたいことのひとつを一首づつによんでゆく「かしは餅の歌」のやうな連作形式をとることが必要です。

（三）字余り、字足らず

短歌は、五七五七七といふ定型詩ですが、この定型が生み出されたのは、千数百年前です。それ以前には、おそらく多くの人々によって様々の歌がよまれたことと思ひます。そのやうな歌の中から五七五七七といふ形が出てきた時に、皆がその素晴らしさを認め、同じ形に自分の思ひをよみこんできた。そのやうにして確立されたのが定型だと思ひます。ですから私達が歌をよむといふことは、この伝統につながっていくことでもあるのです。もともと時によつては五音のところ六音になったり、七音が八音になったりすることがあります。これを「字余り」と言ひますが、思ひが痛切で必然的にさうなつた場合には、許されることで時としてそれは素晴らしい歌になります。例へば先程の柿本人麻呂の歌

近江の海夕浪千鳥汝が鳴けば心もしのいにしへ思ほゆ

の「近江の海」、うみ「いにしへ思ほゆ」は一字多い「字余り」です。しかし読んで不自然には感じません。古へを思ふ人麻呂の気持ちがつよいので自づと「字余り」になつてしまつた、このやうな時には、「字余り」は問題になりません。ただ五音のところ六音となつたり、七音が

六音になったりする「字足らず」はよくありません。感動のうすい時に、しばしば「字足らず」になってしまひます。これは避けなければなりません。しかし音数を合はせることのみに注意が集中してしまつては歌はできません。先づ思ひのままを言葉に表現してみる、その上で定型に近づけていくといふ気持ちでよまれればよろしいと思ひます。

さて今から雲仙の自然の中で参加者全員が歌をよみます。どうかスケッチブックでもさげて絵を描きに行かれるやうな気持ちで楽しんで下さい。合宿教室で体験されたこと、自然の美しさ、それらをスケッチして下さい。今上天皇が、この雲仙の地に行幸されたをり、次のやうな御製をよんでをられます。

たかはら
高原にみやまきりしま美しくむらがりさきて小鳥とぶなり

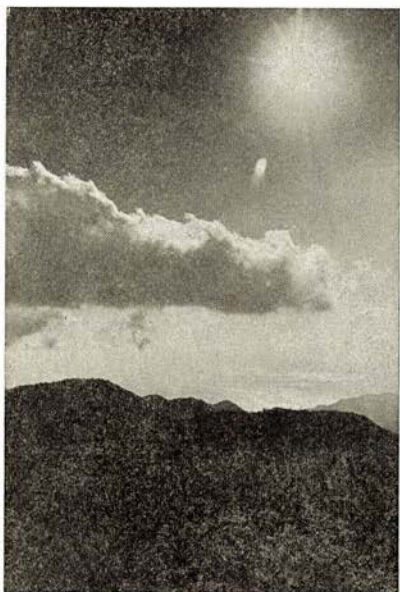
この御製の碑が雲仙野岳に建てられてゐます。このやうな美しい自然の中で思ひを存分に歌におよみになって下さい。

現代流行思想とその批判

——「しきしまのみち」の使命——

亜細亜大学教授・教養部長

夜久正雄



妙見岳より千々岩湾を望む

はじめに

流行の「君が代」解釈について

流行の聖徳太子論について

日本の学問——日本の哲学

学問と和歌——しきしまのみち

名もなき一兵士の遺書

はじめに

現代流行思想と言ひますと、いろんなところに現はれてゐる問題があるわけですが、思想を論ずる場合には、あまり概括的に包括的な事を言つてをりますと、はっきりした事が解らなくなつてしまふ。はつきり、ある一つの思想がどういふものにとどういふ風に現はれてゐるか、といふ事をしっかり突き止めて、さうしてよく考へてみるといふ方法が、物の考へ方としては正しい、しっかりした考へ方だと思はれます。そこで、最初に国歌「君が代」の言葉の解釈を中心にお話することにします。それからもう一つは、聖徳太子といふ方に対して学界あるいは一般の知識人がどのやうに考へてゐるか、その点に就いてお話をしてみたいと思つてをります。

現在の大学で行はれてゐる学問（社会科学とか人文科学）は、実は「科学」ですから「学問」とは言へないものかも知れませんが、そこにはつきりとした大きな欠点があります。それは日本の学問といふものに対しての反省が足りないといふことなんです。例へば、諸君は大学で聖徳太子に就いての講義を受けた事はほとんどないであらうと思ひます。太子は日本の学問の親とも申上げるべき方ですが、その聖徳太子についての講義が大学でほとんど行はれてゐな

いといふ事は、日本の学問もしくは日本の思想に就いての講義がなされていらないといふ事になりませう。

哲学の講義はこの大学でもあるでせうが、「哲学」と言へば西洋哲学といふことになってゐますから、日本の思想に就いては教はらない。例へば平安朝時代の空海とか最澄のやうな人に就いて書かれたものをよく読んだ事があるかと言へば、ほとんどの人はない。大学でさういふ人については教はつてゐない。最近は多少は高等学校の国文学の中でも鎌倉時代の宗教に就いて出てきますが、しかし道元とか親鸞とか日蓮のやうな人の思想を深く自分自身の体験に照らして読むことは行はれてゐない。また江戸時代の儒学を代表する山崎闇齋とか荻生徂徠とか山鹿素行、あるいはこの合宿で随分講義されてゐる吉田松陰先生、かういふ方々に就いての講義もほとんどなされてゐないと思はれます。

全体として言ひますと、日本の大学では日本の学問、日本の思想に就いて知る事は非常に少いのです。これが日本の現代流行思想の根本的な欠点だと思ふのです。この点に就いて早くから御心配になられたのは、明治天皇でいらっしゃいます。明治十九年、明治天皇の御言葉を元田永孚が記録した『聖諭記』といふ文章に御心配のお言葉がうかがはれます。この明治天皇様の御心配はその後の日本の高等教育にそのまま現はれて来てゐるのです。

明治天皇様は御在世中に九万三千三十数首にのぼる御歌をお残しになられてゐるわけで、そ

れが明治天皇様の学問の中心であったと、私は考へる次第です。歌を詠んで心を磨く、あるいは誠を尽くす、かういふ事を明治天皇様は「しきしまのみち」と仰言つてをられます。ですから「しきしまのみち」とは歌を詠むことであり、しかもたゞ芸術的でない歌を詠まうとするのではなく、本当に自分の心を振返つてみて、さうし乍ら自分の心を前に押し進めてゆく。かういふ意味で「しきしまのみち」と仰らせれてゐると思はれます。この「しきしまのみち」は古来から日本の学問の中核であったのですが、明治以降になつて大学の、あるいは高等教育の学科課程の中から外してしまつたために現代の流行思想とは遙かに縁遠いものになつて了つたのです。以下このやうな筋道を追つてお話し申し上げたいと思ひます。

流行の「君が代」解釈について

「君が代」を国歌とする、国歌として「君が代」を教



へるといふ事に就いて、日教組が広範な反対運動を展開してゐる事はみなさんご存じの通りで
ございます。これに対して、このやうな反対は理由のないおかしなことだといふ説も出て来て
をりますが、先日或る新聞の記事に、「君が代」といふ意味は「あなたの齢」といふ意味であ
る、つまり「君が代」はお互ひに年寿を祝ひ合ふ歌なのだから「君が代」を国歌にする事を日
教組の方で問題にする必要はないだらう、といふ意味の事が載つてゐたのです。これは非常に
重要な事だと思はれましたので、私は少し丹念に調べてみました。

君が代は千代に八千代にさざれ石のいはほとなりて苔のむすまで

「君が代」の意味は普通の解釈によれば「天皇の御齡は」といふ事で、「千代に八千代に」
は千年も八千年もといふ意味でせう。「さざれ石」は小石であつて、植物が生えてだんだん大
きくなるやうに、小さな石が大きくなり、さざれ石のいはほとなつて、そしてその岩に苔がむ
すやうになるまで千代に八千代に天皇の御齡が長くあるやうにといふのが一般の解釈でござい
ます。

ところが先程言ひましたやうに、「君」を「あなた」といふ風に解釈する説が出て来てをり
ますので、それに就いて少し考へてみたいと思ひます。ご存知のやうに「君が代」の歌は、

『古今集』といふ平安朝時代の歌集の賀の歌のところに出てをります。「賀」といふのは年寿を祝ふ歌なのです。さういふ祝の歌を集めた部門がありまして、その一番最初に「題しらず、詠人しらず」として次のやうな形で載せられてゐるのです。

わが君は千代に八千代にさざれ石のいはほとなりて苔のむすまで

この「わが君」は、言葉の解釈だけとすれば、「あなた」と解釈して差し支へない。これはあとで反論を申し上げますが、ともかくさういふ風に解釈する事も可能な歌なのです。

しかしこの歌が国歌となつた、国を代表する歌になつた。これは非常にはっきりした事です。明治の初めにイギリスの海軍にならつて日本は海軍を創設しましたが、そのイギリスの海軍には軍楽隊といふものがありました。軍楽隊ではイギリスの女王あるいは国王をお祝ひ申し上げるのに、*God save our gracious Queen. へんじは God save our noble King* といふ歌を国歌として使つてゐたわけです。それで日本にもやはり国歌がなければならぬといふ事で、当時日本に来てゐたイギリスのフェントンといふ軍楽隊の指揮者に頼んで作曲をして貰ひ、「天皇陛下を奉祝する楽譜」として国歌が制定されたのです。これは明らかに「天皇陛下を奉祝する楽譜」として考へられてゐるわけですから、『古今集』の歌が国歌「君が代」とし

て取り上げられた時は、「君」は天皇を指すものであった事に間違ひはないわけです。

ところで、「君が代」を国歌として、天皇奉祝の歌として選んだのは、大山巖元帥ほか二人の方です。大正元年に大山巖元帥はかういふ風に言っています。

「其時自分ガ云フニハ英国ノ国歌 God save the King (神ニ我君ヲ護レ)ト云フ歌ガアル。我国ノ国歌トシテ宜シク宝祚ノ隆昌天壤無窮ナランコトヲ祈リ奉レル歌ヲ撰ムベキデアルト云ヒテ平素愛誦スル『君が代』ノ歌ヲ撰出シタ」(大山巖元帥、大正元年——一九二一十月九日「覚書」)

「我国ノ国歌トシテ、——日本の国の国歌として、「宝祚ノ隆昌」とは天皇の御位の栄える事であり、「天壤無窮」は天地とともに窮まりのないといふ事です。従つて天皇の御位の「天壤無窮ナランコトヲ祈リ奉レル歌ヲ撰ムベキデアルト云ヒテ平素愛誦スル『君が代』ノ歌ヲ撰出シタ」、普段から自分たちが愛誦してゐた「君が代」の歌を選んだのだ。自分たちはかういふ意味で選んだのだと言つてゐるわけでございます。

『古今集』の歌の意味が先づどうであるかは別として「君が代」が国歌として決つたといふ事は、天皇の御齡、ひいては天皇の御位、天皇の御位に象徴せられるところの日本の国の命が、無窮に栄えるといふ事を「君が代」の言葉に籠めて歌ふのだと決つたのであつて、その意味を変更するとすれば、これは大変なことになります。国民全てが同じ心でこの歌を歌ふ事

に意味があるので、それがあつた人はいふ意味で歌ふ、ある人は別の意味で歌ふ、明治の人はかういふ意味で歌つた、いまの我々はかういふ意味で歌ふといふのでは、どうしようもない言葉の大混乱に陥ると思はれます。

しかし、この「君」はあなただといふ風に解釈する人が結構たくさんあつて、『古今集』では「君」はあなたと解釈出来るから国歌としての「君が代」の「君」もあなたでいいのだといふ説が多い。だが果してそれでいいのでせうか。

『古今集』は勅撰の一番最初のもので、その勅撰の詔を下されたのは醍醐天皇でいらつしゃいます。天皇の詔によって天皇をはじめすべての階層の人の歌を撰んでゐるわけです。ことに撰者の長歌の中には醍醐天皇を寿ぎまつる歌があつて、「わが君は」といふ言葉を使って醍醐天皇をお祝い申し上げてゐます。これが『万葉集』ですと「大君は」といふ言葉が使はれるのですが、『古今集』では「大君」の「大」が取れて「君」となつてをります。

『古今集』の時代は天皇が一般の貴族に対して親しい身近な存在である事を示すため、「わが君は」といふ言葉で天皇をお指し申し上げた、従つて「君が代」の場合も同様だといふのが私の考へです。これは私一人ではなく最近まで多くの人はさう考へてゐたのです。だから賀歌の一番最初にこの歌をあげてゐるのです。「読み人知らず」といつて読んだ人も、題もわからないといふのは、すべての人がかういふ気持でゐて、それを代表して詠まれた歌だから「詠み

人知らず」と言ったのだと思はれます。

流行の聖徳太子論について

ここに私の講演の司会をしてくれてゐる須田君が一年の時、聖徳太子の輪読会を一所懸命やらうといふことでやつてゐたら、確か和歌森太郎氏の書いた日本歴史の本の中だつたと思ひますが、聖徳太子の事業は太子がしたのではない、三経義疏は外国人が書いたものだ、十七条憲法は聖徳太子の囲りにゐた「史」といふ書記のやうな人が中国の典籍の中からいいところだけをつぎはぎして作つたのだ、と言つてゐるといふのです。そこで、十七条憲法や義疏の文章が聖徳太子が書かれたものではないとなると、さういふ文章を読んで太子に就いて勉強するといふことは意味がないといふことにならないかと、須田君からの質問がありました、それに答へるために私は三、四冊の本を時間を懸けて一所懸命読みました。

そこでわかりましたことは、この人たちには初めから聖徳太子がしたのではない筈だといふ考へがあるのです。松本清張氏のごときは、近代史学のレントゲン照射を聖徳太子にかけると、今まで聖徳太子がしたと言つてゐたものは全部違ふ事が解るとまで言つてゐます。随分いい加減な事を言つたもので、近代史学のレントゲン照射なんて馬鹿なものがあるわけではないのです。

ともかくこの人たちは聖徳太子に就いて書かれた『日本書紀』や『法王帝説』などみんな信頼出来ないといふのです。それでは他に信頼出来るものがあるかといふと、それは無いのです。ただ聖徳太子がやったにしては偉すぎるといふわけです。『三経義疏』のあれだけの漢文はちよつと書けないだらう。十七条憲法はつきはぎと言ったけれども、そのつきはぎは聖徳太子には出来ないだらう。きつと他の人がやったのではないか。といふやうにだんだん考へていつて結局蘇我馬子が全てやったのだといふのです。これは本当に馬鹿馬鹿しい事で、このやうなことは『日本書紀』にもなんにも書いてはゐない。この人たちが聖徳太子を否定するために、蘇我馬子が書いたと言つてゐるに過ぎないので、それからの方が遙かに不確かでせう。実証するものが全くないので、

何故かうなるか。それは偉大なものを疑つてかかるといふ事から来るのです。疑つてかかつて実証出来るならいいのですが、ただ疑ふといふ事では全く意味がない。疑はうと思へばいくらでも疑へる。どんな人の心も疑ふ事が出来るでせう。だが、ただ疑ふだけでは何も生れないのです。自分が信ずるかさうではないか、といふ事をはっきり断定するのならいいのです。あの人の言ふ事は間違つてゐるとはつきり言ふならいいのです。信じてゐることがあるのですから。しかし疑ふことをつづけるといふ事は恐ろしい心の動きです。かういふ心の悲劇はシェークスピアの『オセロ』といふ劇に実によく描かれてゐます。オセロといふ黒人の将軍が自分の

貞淑な妻を疑ふのです。妻を疑ひ、さらに疑ひが疑ひを生んで結局殺して了ふのです。殺した後で、ただの疑ひであった事が解つて、最後にオセロは、疑ふべからざる真実の心を疑つた事によつて、世にも哀れな最期を遂げねばならなかつた自分の死を、ふるさとの人に伝へてくれ、いましめとしてくれと言つて絶命するのです。

信ずるといふ事は本当に大事なことだ。努力をしなければ信ずる事も出来ないかも知れない。我々の心は、信ずる心と疑ふ心がいつでも戦つてゐるわけですから、我々は信ずるやうにと努力してゆかなければならない。歴史上の人物と付き合ふ場合でもお互ひの間で付き合ふ場合と同じ事です。山田先生が戦後思想の特徴としてあげられたやうに、動物的人間観、動物的自我の肯定つまり人間を動物としてみる考へが現在一般化してゐますが、それは確かに一面の真理です。併し動物的な自分を乗り越えて進んでゆかうとする心もまた誰にでもあるわけで、さういふ心を否定して自分を下へ下へと墮していく精神が、偉大なものも下へ下へとひきずり落していかうとする精神になつて現はれるのです。

先程の「君が代」に就いての解釈も、やはり一面さういふ事があるのです。「君が代」の、「天皇を言寿ぐ」といふ事は、天皇の御心を仰ぐといふ事です。自分たちよりもっと努力してくださいとある天皇を仰ぐといふ事です。それをしたくない。美しい心、真心を感じる自分の心そのものを否定する。そして今よりも向上しようとする心を押へて、現在の自分に満足し

ようといふいやしい心が働いて、「君が代」の「君」を僕とかあなたとかの世界に引きずり降さうと暗黙のうちにするのです。

日本の学問——日本の哲学

先にお話しましたやうに、現代流行思想の欠陥は、日本人が日本の歴史と文化と学問とをよく研究しないところから来てゐる。日本国民としての自覚が乏しいのです。この事を逸早く御指摘になられたのは明治天皇さまです。

明治天皇の伝記を書いた木村毅といふ人の『明治天皇』といふ本があります。その序文に明治天皇のお子さまである東久邇宮聡子さまが「明治天皇思出の種々」といふ優れた文章を書いてをられます。

「明治さまは学校教育に大いにお力を入れられたのですが、東京大学にいらっしゃった時に、科学や西洋の学問はいろいろ盛んになったが日本の学問はどうなつてゐるのか、と御心配になつて御下問になつたさうです。そして、東大に日本の学問の科目がない事を指摘され、日本の最高学府が日本の学問を捨てて疎そかにしてゐる様に思ふがその点はどうか、と時の学長に厳しくたゞされたのですが、日本人が日本自体を学ぶことなく西欧の学問だけに

とらはれてゐる風潮をとて心配されたわけです。」

これは正確には、次にあげる明治十九年十一月五日元田永孚謹記とある『聖諭記』に書かれてゐるのですが、それを東久邇聡子さまがよくかみくだいて述べられてゐるのです。

「皇上親諭シテ曰ク朕過日大学ニ臨ス。設ル所ノ学科ヲ巡視スルニ、理科・化学・植物科・医科・法科等ハ益々其進歩ヲ見ル可シト雖ドモ、主本トスル所ノ修身ノ学科ニ於テハ、曾テ見ル所ナシ。和漢ノ学科ハ修身ヲ專ラトシ、古典講習科アリト聞クト雖ドモ、如何ナル所ニ設ケアルヤ過日觀ルコト無シ。抑^{ソモソモ}大学ハ、日本教育高等ノ学校ニシテ、高等ノ人材ヲ成就スベキ所ナリ。然ルニ今ノ学科ニシテ政事治安ノ道ヲ講習シ得ベキ人材ヲ求メントスルモ決シテ得ベカラス。……故ニ朕今徳大寺侍従長ニ命ジテ渡辺総長ニ問ハシメント欲ス。渡辺亦如何ナル考慮ナルヤ……」

「皇上親諭シテ曰ク」天皇陛下が親しくおさとしになつて言はれることには、「朕過日大学ニ臨ス」私は先日大学に行幸した。「設ル所ノ学科ヲ巡視スルニ」大学のカリキュラムを見てみると、「理科・化学・植物科・医科・法科等ハ益々其進歩ヲ見ル可シト雖モ、主本トスル所ノ修身ノ学科ニ於テハ、曾テ見ル所ナシ。」学問の中心は自然科学、社会科学といふ知的で技術的なものになつて了つてゐる。ところがさういふ専門の學術を運用する人間の心の問題はどうかうなつてゐるか。学問によつて心を見がく、どう生きてゆくかといふ事を真剣に考へることが

学問全体の主本とするところの「修身」の学科である筈だが、その点は全くおろそかにされてゐる。山田先生が講義で仰言った言葉で言へば、至誠を探究する、吉田松陰の言ふまごころをみかくといふ意味での学科、本当の心の持つ正しい姿を見究める学科は全く行はれてゐない、と明治天皇さまは仰言つてゐる。「和漢ノ学科ハ修身ヲ専ラトシ」日本の学問、中国の学問は身を修めるといふ事、至誠を尽くすといふ事をよく学ぶのを専らとするものなのだ。さういふものの一つとして、「古典講習科アリト聞クト雖ドモ」古典講習科があると聞くけれども、「如何ナル所ニ設ケアルヤ」それは一体どこにあるのか、「過日觀ルコトナシ。」全然見なかつた。「抑大学ハ、日本教育高等ノ学校ニシテ、高等ノ人材ヲ成就スベキ所ナリ。」大学は高等の人材を育成すべきところである。「然ルニ今ノ学科ニシテ政事治安ノ道ヲ講習シ得ベキ人材ヲ求メントスルモ決シテ得ベカラズ。」今の学科で国を治め国を正しく進めてゆく、さういふ道を講習することの出来る人材を求めようとしても、とても得ることは出来ない。「故ニ朕今徳大寺侍従長ニ命ジテ渡辺総長ニ問ハシメント欲ス。渡辺亦如何ナル考慮ナルヤ」天皇は東大総長はこのことについてどういふ考へを持ってゐるか、と元田永孚に御下問になつたのです。しかし明治天皇が直接渡辺総長に質問しては事が荒立つといふので元田永孚が中に立って、結局徳大寺侍従長に渡辺総長に対して明治天皇のお考へのあるところを伝へさせた。ところが渡辺総長は、御下問に対して、「支那の易経、印度の仏教の如きは哲学といはれるが、日本には固有の

哲学は無い」旨を奉答したといふのです。

日本に哲学はない”といふ考へ方は、当時の人には相当浸透してゐた考へ方だったので、明治時代の日本の学問に於いて指導的役割を果たした人にバジル・ホール・チェンバレンといふイギリス人の大学者がをります。日本近代の歴史学、国語学・言語学等はこのチェンバレンに教はったのです。彼は明治十二年『古事記』の英訳を完成してゐます。この『古事記』の英訳を諸君いっぺん見てください。十九世紀のイギリス人が非常な力をもつて世界に伸びていったことが解るし、しかもこの連中とどうやって対抗出来るかと思ふ程力のこもつたものです。ともかくこのチェンバレンは明治十八年に東京帝国大学の言語学の教授になり、『日本事物誌』といふ本を書いてをります。その中で「日本人は未だかつて自分自身の哲学をもつたことがない。」と評価を下して了つた。また中江兆民といふ人が、「わが日本古来より今に至るまで哲学なし。」と『一年有半』の中で言った事は有名です。従つて渡辺総長だけが言つた事ではないのです。

これを聞いて諸君は、さうだ、やっぱり哲学の授業では日本人は出て来ないから哲学者は日本にゐないんだ、と考へられるかも知れませんが。しかしいまアメリカから出てゐるエンサイクロペディア・ブリタニカの新版をひきますとさうではないのです。この事典の「ジャパン」の項目をひきますと「ジャパニーズ・フィロソフィー」とはつきり記載されてゐます。そして

「ジャパニーズ・フィロソフィー」の最初の人物は聖徳太子である、日本の哲学的思索は聖徳太子によって開かれたと、書いてあるのです。この事典はもともと世界の学術を指導したイギリスの百科事典エンサイクロペディア・ブリタニカをアメリカが買い取ったものですが、明治年代と現代とでは英米人の考へ方もずいぶん違って来てゐるものだと思います。

先程日本に哲学があるとかないとかと言ひましたが、聖徳太子の十七条憲法を哲学と考へないでなにが哲学なのでせうか。伝教大師とか空海とか菅原道真の学問を欧米で哲学と言つてゐるなら、それを日本の哲学と言つたつちつとも不思議はない。吉田松陰に哲学がないなどといふ事は言へたものではないのです。勿論、哲学といふのは思想もしくは学問といふ意味で考へるわけですけれども。

欧米の文明ならびに思想を導入、模倣、批判、撰取することが、近代日本思想史の中心課題であつたのです。それは、日本人に反省をうながして自覚を深める働きでしたが、大勢は欧米文明の模倣に走つて自分を見失つたのであります。これが今日までの現状であつて、その結果が、日本には哲学がないとか天皇は不必要であるといふやうな思想となつたのです。

学問と和歌——しきしまのみち

日本の学問の中心は和歌である。と私は考へてをります。簡単に言へば、和歌とは自分の心をこぼに表はして、そして自分で自分の心を顧みるといふことです。われわれの心は自分で解らない。こぼに出してみなければ解らない。そこでわれわれは自分の心をありのままにとばに表はして、そして表はし乍ら自分で自分の心を顧みるわけです。顧みることによって自分の心が正しくなり、それだけ誠が深められてゆく。さういふ働きをするのが和歌の道です。あとで説明いたします通り日本の古代から今日までずっと一貫してその道は伝へられてゐるのです。

それでは、和歌だけをやつてゐればいいので、儒学も西洋の学問も仏教も不必要であると考へるとすればそれは全く固陋な考へ方であります。聖徳太子は日本語であれほど優れた歌を残しになる一方、仏教文明を徹底して学ばれて、そこにあるものを日本の国民生活の中に生かす様に努力なされたわけです。明治天皇もドイツ語で本をお読みになることまでなされてヨーロッパの学問をされたのです。しかし、心をみがき高めるといふ点では、歌を——それこそ未曾有の数お作りになられ、そして、それだけ深くその時々心顧みられ、心を確かめられ、進んでゆかれたのです。かういふ意味を持った和歌を学問から分離し、日本の高等教育から排除して了つた事が今日の流行思想であり、根本的な欠陥なのです。

「しきしまのみち」といふ言葉は、趣味としての和歌、文芸としての和歌とは違って、修身

の学問としての和歌、修身といふのもただ自分だけ心を清めるといふよりも、吉田松陰の言ふ至誠をもって天下を動かす、さういふ道としての和歌、これを「しきしまのみち」と考へたらよいでせう。和歌をかういふ意味で仰せられたのは明治天皇さままでございます。

それに就いて三井甲之先生著『明治天皇御集研究』（国文研叢書No.18、昭和五十二年二月刊）が五十年ぶりに再刊されました。三井甲之先生は私どもが黒上先生と並んで道の師として仰いでゐる方でございます。『明治天皇御集研究』を繰り返し読んで今日に来てゐるわけです。従つて私の申し上げることも三井先生からお教へを受けた事なのです。私はこのやうに明治天皇の御製を拝誦して日々の心の行く手を照らすともしびとも仰いでをりますので、ここではその中の数首を拝誦して解説を加へていきたいと思ひます。

明治天皇御製に「道」といふ言葉があります。儒学では「学」、仏教では「教」と言ひますが、明治天皇さまはこれを和歌の上で「道」といふ言葉で表はしてをられるわけです。これは非常に重要なことで、「道」といふ日本語で日本の学問の根本的な性格を示してをられるのでございます。

道

ひろくなり狭くなりつゝ神代よりたえせぬものは敷島の道（明治三十九年）

道は「広くなり」多くの人が行くこともあり、「狭くなり」またごく少数の人しかこの正しい道を踏み行かない場合もあるけれども、神代から絶えないものは敷島の道である。歌を詠み正しい道を行かうとする日本の道は絶えない。かうお詠みになられてゐるわけです。鎌倉時代の歌に、

これのみぞひとの国より伝はらで神代をうけし敷島の道

といふのがあります。これだけがひとの国から伝はらないで神代からそのままずっと一貫してゐるといふ歌であります。神代より絶えせぬといふのは『古事記』『日本書紀』をご覧になるとわかります。日本の歌の最初は素戔嗚尊の有名な、

八雲立つ出雲八重垣つまごみに八重垣つくるその八重垣を

といふ家庭恋愛の歌ですが、素戔嗚尊が作られたといふことで、神代から絶えないものが「しきしまのみち」、日本の道、和歌の道であるといふ事です。

道

いとまあらばふみわけて見よ千早ぶる神代ながらの敷島の道（明治四十年）

「千早ぶる」といふのは神にかかる枕言葉です。威力のあるといふ意味です。いとまがあるならば踏みわけてみよ、少しでも時間があるならば踏みわけてみなさい、とお詠みになつていらつしやるのです。

それから「歌」に就いては、

歌

こともなくしらべあげたる言の葉の花にぞにほふ国のすがたも（明治四十年）

「こともなく」あっさりとありのままに少しもつくろふこともなく「しらべあげたる」——歌はその歌のことばの調子はその人の心の心を現はしますから、そこで歌のことばを綴ることを「しらべあげたる」と仰せられたのでございます。「言の葉の花」といへば、ことばの花であつて「歌」のことばなのです。本當にあっさりとしらべあげて技巧もないことばの花。「にほ

ふ」といふのは、照り映えるといふ事です。一首の歌の中に、日本の国の姿が美しく照り輝いてゐるのだ。例へば、吉田松陰が『留魂録』の最後に詠んだあの歌の中に、日本の国の本当の姿はかがやいてゐるのではないかと、かういふ意味の御歌なのです。一首の歌が解るといふ事は、それだけで国の本当の姿がわかる事です。木内先生の言はれた本当の国の姿といふのは、確かに説明を絶するものではあつても、一首の歌の中にもその輝きを示す事は出来るものです。われわれはさういふ歌を詠んで、本当に現はれ出づべき国の姿を感じ取る道があるのだ、といふ事を強く訴へたいと思ひます。

述懐

ことのはのまことのみちを月花のもてあそびとはおもはざらなむ (明治四十年)

「もてあそび」といふのは、「もてあそぶ」といふ言葉の名詞形ですから、月を見たり花を見たりして、そして宴会をする。さういふ遊びの手段とは「おもはざらなむ」、思つてはならないものであるよ。風流の手段とは思はないやうにしてほしい、といふ意味です。「まこと」といふのは、心と事とことばが一致することなのです。思つてゐる事をありのままに言ふのが「まこと」、自分のした事をそのままに言ふのが「まこと」です。悪い事をして、悪い事を

したといふ事をそのまま言へば「まこと」になるのです。さうすれば間違つた事も正すことが出来るのです。心を、また、した事をありのままに述べる事によつて眞実をみがいてゆく、その道を「月花のもてあそびとは思はざらなむ」と詠まれてゐるのでございます。

それから同じ「まこと」といふ事に就いて

神祇

目に見えぬ神にむかひてはぢざるは人の心のまことなりけり（明治四十年）

目に見えぬ神に向つて恥ぢないのは人の心のまことである。神に向ふその心に人の心のまこととが宿るものとも言へるでせう。

神祇

わがくには神のすゑなり神まつる昔のでぶりわするなよゆめ（明治四十三年）

日本の国は皇祖の神、祖先の神の末である。そこからずっと一貫して今日に至つて来てゐるのである。従つて国のために斃れた人を祭る道をけつして忘れてはならない、祖先の神々を祭る道を忘れるなよ、と繰り返すやうにねんごろに言つてをられる御歌です。古来日本の国は万

葉歌人が歌ったやうに、「すめがみのつくしきくに」、「ことだまのさきはふ国」、——別の言葉で言へば、「神祭る昔のてぶり」、それから「ことのはのまことの道」、この二つが並んで行はれるのが日本の本当の道だと思はれます。

をりにふれたる

教草しげりゆく世にたれしかもあらぬ心の種をまきけむ (明治四十三年)

教育のための教材や教科や書物などが盛んになっていく時代に、「たれしかもあらぬ心の種をまきけむ」だれであらうか、あつてならぬやうな間違つた心の種——思想をまいたのは、さういふ意味のお歌です。明治末年にさきほどお話ししたやうな日本の国の誠を尊ぶ道を否定するやうな思想が現はれた事を深く嘆かせられたお歌と拝察されます。

明治天皇さまのお作りになられた「しきしまのみち」としての和歌は、明治天皇さまのお父さまであられる孝明天皇さまもお作りになり、また御歴代の天皇さま方がお作りになつてをられます。建国創業の時代から今日までずっと一貫して皇室に伝へていらつしやるのでございます。今上天皇さまも今日までに五百二十数首のお歌を国民に示されるほどに、御熱心にこの「しきしまのみち」を踏み歩んで来ていらつしやるのでございます。

名もなき一兵士の遺書

最後に、茶谷武君の遺書を読ませていただきます。茶谷君は、私が大学を出てすぐ府立一中の夜間中学で教へてゐた時の生徒でございました。苦しい生活環境の中で勉強をしてゐた中学生の時に会ひまして、その当時から一緒に勉強をしてゐた人ですが、戦死してしまいました。私どもはごく少し残つてゐる歌を集めて『茶谷武君遺稿』といふのを作つた事があります。戦死して三十年ほど経ちまして、最近、この合宿にも来てゐる香川亮一君（法政大学企画調整室勤務）が茶谷君のご遺族をお訪ねしたところが、その妹さんが持つてをられたのがこの遺書でございます。私はこの遺書が残されてゐることは全く知りませんでした。これを読んで、本当に、有難い



といふか、偉いといふか、感心致しまして、是非みなさんにも一辺読んでいただきたいと思つてここに持つて来たわけです。本人が自筆で戦地から家に送つたものでございます。

遺書

父上
母上様へ

武モタウノ、才役ニ立ツ時ガ参リマシタ。生ヲ稟ケテ二十余年唯ノ一度モオ心ヲ安マセルコトナク過シテ来タコトヲオワビ致シマス。今ノ私ノ気持ハ吉田松陰先生ノ「親思フ心ニ勝ル親心今日ノ訪レ何トキ克蘭」ト歌ハレタ氣持ソノマ、デアリマス。今思ヒマスニ人一倍子ボンノウノ父上ニトツテコレヲヨマレ（ル）ノハドンナデアルカハヨシ全部デナクテモオシハカルコトガ出来マス。デモ此ノ皇国危急ノ秋私達ノ^{トキ}涙ハカクサレネバナリマセン。私ノ肉体ハコ、デ朽ツルトモ私達ノ後ヲ私達ノ屍ヲノリコヘテ私達ヲ礎トシテ立チ上ツテクル第二ノ国民ノコトヲ思ヘバ又之等ノ人々ノ中ニ私達ノ赤キ血潮ガウケツガレテキルト思ヘバ決シテ私達ノ死モナゲクニハアタラナイト思ヒマス。

日本ニ生レタ者ノミニ許サレル永遠ノ生ニ生キルトイフコトガイヘルノデス

之等ノ事ヲ思ヘバ私達ハ涙ヲ流ス前ニ故国ノ勝利ヲ、天壤無窮ヲ祈ラネバナリマセン。ドウゾ私ノコトヲ笑ツテホメテ下サイ。武モ笑ツテ散リマス。デハ父上母上オ身体ヲ大切ニシテ

下サイ

サヨウナラ

武ヨリ

ワガ生ハ下葉ノ露ト消ユルトモ何カ惜マンコノ秋トキニシアレバ
我ガ肉ハヨシ朽ツルトモアガ魂タマハミ空天カケ御国守ラン

征キ〜テ草ムス屍ト果ツルコソ我身ニツキヌ思ヒナリケレ

神州ノ不滅ヲ信ジ吾ハ唯ニマケノマニ〜進ミ行カナム

大君ノマケノマニ〜生キ死ナム時ゾ近ヅキ吾ガ胸ハル、

同胞ハラカラ之働キミテハ日ニ夜ニモダセシ心今ゾハル、モ

アガ家ノ名ヲケガスナトノタマヒシアガ父ノ言コトワスレカネツル

千枝子へ

兄サンハ今死ニツクニ当リオ前ニ一言遺シテオク　ワカラヌ所ガアルカモ知レヌガ来年ハ六

年生ニナルノダカラヨクヨンデミナサイ

兄ナキアト茶谷ノ家ノ血統ヲツグノハオ前一人ダ　兄サンハ御国ノ危急ニ身体ノ心ノ一切ヲ

陛下ニ捧ゲ日本男児トシテノ責任ヲ果ス為ニ今死ニツクノダ　決シテ泣イテハナラヌ　涙ヲ

ヌグッテコノ大イナル戦ノ勝利ヲ祈ラネバナラヌ　オ前ノ兄ハコノ美シキ尊イ御国ヲ護ル責
任ヲ果シタコトヲホコリト思ハネバナラヌ　オ父サンオ母サン先生方ノ言フコトヲヨク守ツ
テ日本ノ婦人トシテハズカシクナイヤウニ一生命勉強シナサイ　モウ少シ大キケレバイフ
コトモ沢山アルガマダイツテモワカラナイダラウカライハヌ　ソレカラ女学校ニデモ入ツタ
ラ歌ヲ作りナサイ　歌ハ決シテ風流ナモノデハアリマセン　自分ノ心ヲイツハラズカザラズ
ソノマ、三十一ノ文字ニ表ハスノデス。

デハ千枝子ヨサヨウナラ

兄ヨリ

もう私の申上げる言葉はございません。私は、ここに、日本の学問といふものが本当に生きてゐると感じてをります。

編者註

夜久先生が御講義の中で紹介された戦没学生・茶谷武さんの遺書は参加者一同に大きな感動を与へた。教へ子の遺書をお読みになる先生の悲しきお声を聞いてみると、祖国のために深く出陣していった青年のまごころが偲ばれて、講義室にはしばし肅然たる空気が流れた。「真実の言葉」の重みに心身を傾け得た貴重なひとときであった。左に茶谷さんの略歴を記させて戴く。

ちやたにたけし
茶谷 武さん

大正十一年四月三十日

昭和十七年三月

神奈川県小田原市に生れる。

東京府立養正中学校（府立一中の夜間部）を卒業。

在学中に夜久先生の教へを受く。

昭和十八年十二月

学徒出陣。陸軍に入隊。

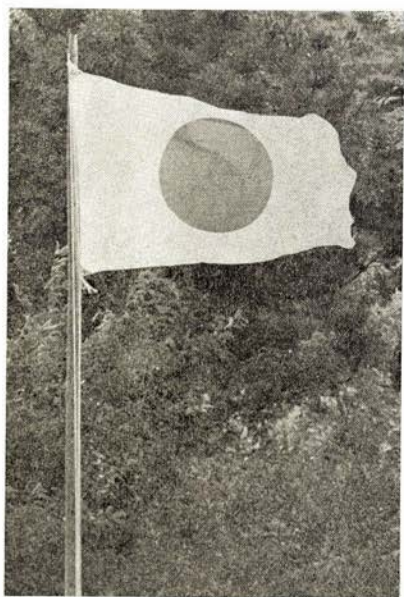
昭和二十年四月二十三日

フィリピンのルソン島ダクボにて戦死。二十四歳。

信ずるといふこと

高崎経済大学教授

高木尚一



合宿地に立つ日の丸

私はただ今御紹介いただきましたやうに、学生時代に半年ほど、皆さまが輪読してをられる「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の著者、黒上正一郎先生に直接教へをうけましたし、三井甲之先生のお話も聞きました。さういふわけで、昨年久しぶりにこの合宿に参加いたしました。が、私自身の「日本への回帰」が始まったやうで、なにか運命的に皆さんとかうやって一緒に研鑽を努める時代が来たやうに思はれ、非常に嬉しく思つてをります。

今日の午前中、夜久先生は「君が代」の話から始められましたが、これは現在非常に大切な問題なので、このことは合宿最初の講義で山田先生が話された「内なる国家」といふことと内面的に関連させながら、体験的に理解していただきたいと思ふのです。理解するといふより、信知する、素直な正しい姿において信じ、知るといふことが必要です。三井先生は「明治天皇御集」を拝誦することを宗教的儀礼と結びつけられて、それを当時第一高等学校に学んでゐる私どもに伝へられました。明治天皇がお亡くなりになったあと全国民は心の支へを失つて、暗黒の中にさ迷つた。これから日本人は何を支柱にして生きて行つたらいいだらうかと模索してゐる時、「明治天皇御集」が出版されて初めて十萬首に近い膨大な御製が残されてゐることを国民は知つたのです。三井先生はここで、日本国民として行くべき道、さらに世界の全人類に向つて、自信をもつて生きてゆく原理、それはここに示されてゐる、かう確信して、「明治天皇御集」の拝誦と研究を始められたのです。さらに黒上先生は、この三井先生がお書きにな

った「明治天皇御集研究」の中に収められてゐる「研究方法論」を、甲府の三井先生のお宅に泊りこんで、幾日も幾日も学ばれた。その間黒上先生は殆んど寝られないので、三井先生が少し横になつたらと言はれても、机の上に寄りかかたまま、夏だったので蚊張を頭からかぶつて二、三時間眠つたらまた勉強を始める、そのやうにして学ばれたさうです。さういふ意味で黒上先生の御本は三井先生の「明治天皇御集研究」のエッセンスを吸収した上で書かれたと言へますし、今後も特にこの二冊を中心にして勉強していただきたいと思ひます。

現在、日本には哲学がない、さらには宗教がないなどといふ非常に浅薄な意見が未だに思想界、教育界を支配してゐるやうです。そのために学校では、日本文化の正しい姿についても殆んど教へられることがないやうですが、このことは日本にとって大変な損失だと思ふ。ところが逆に外国人は日本人のもつ底力に注目してゐます。すなはち日本は戦争で負けたけれども、その後猛烈な勢ひで復興した、その原動力は何かといふことに全世界の人々が深い関心を寄せてゐるのです。だが日本人は、殊にインテリと言はれてゐるやうな人々は日本を蔑み、あるひは日本を否定するやうな学問に惑はされてゐる。かうして一般に過去の日本を蔑視するやうな考へが風靡してゐますが、ではその風潮を打破する道、それは何か、私は、それは御製に示されてゐる、まごころを貫く道、それを信ずる以外にはないと思ふ。それは決してむづかしい、「白雲のあなた」に求める道ではなく、本当に卑近な道なのです。その道を疑はずに踏み行つ

ていくほかはないといふことです。

結局は、夜久先生も言はれましたが「信ずること」、それ以外にはない。三井先生も、黒上先生も、親鸞上人の念仏の世界からはいっていかれたのですが、そのことは非常に大切なことだと思ひます。

私が昭和十四、五年でしたか、甲府の三井先生のお宅を訪れたときに、田圃の中を歩きながら先生は称名念仏といふことについて話されましたが、その時先生は自分はいまは、「天照大神」と唱へることにしてゐると話され、その「大神」といふところに非常に力を入れられました。そのおことは私の耳にいまだにありありと残つてゐます。それ以来私も「天照大神」と唱へますが、しかし、それで迷はなくなるかと言へばそれは嘘です、そのことは山鹿素行も言つてをります。が、「惑ひを去る」といふのは嘘なので、「惑はず」といふのが正しい人生態度なのです。惑はぬために絶え



ず信仰し念仏を唱へるのです。人間の心は常に散乱する、それを統一する、それが念仏です。この一心不乱になって統一することによって、木内先生も言はれたやうに直観力が現はれてくるのです。日本人が戦後めざましい発展をやりとげ、世界における技能競争においても、ゴールドメダリストが続々出てくるといふのも、日本人が無意識的にそのやうな統一力を保持してゐたからだと思ひます。すなはち、日本人の優秀さの基になるもの、それは一口でいへば「信」だと思ふ。「信ずる力」だと思ふのです。この合宿で練り鍛へるのも、この「信」に外ならない。合宿が終ると皆さんは一人一人に分れてゆかれる。その時には何も頼るものがない。さういふ時に三井先生が言はれた「天照大神」を唱へるといふこと、これが一人一人を支へてくれるのです。これは決して難しいことではない。親鸞は称名念仏を易行道と言ひましたが、その易行道によって、その道の信仰を念々に伝えてゆくことが出来ます。キリストも巷において伝道し、そして又折を見ては広野に戻ってはげしい祈りをされた。祈っては又巷に出る、それを交代してゆく。私どももさういふ交代が必要だと思ひます。

○

吉田松陰先生が理想とされたところは「天朝の御学風」、朝廷には神代の時代から伝はつてゐる御学風がある。それをこの世にひろめていくこと、そのために有能な人材を集めて、都に

大学校をおこすことでした。その松陰先生の念願が期せずしてこのやうな形で、不十分ながらもこの合宿教室といふ姿で実現しつつあること、これは本当に不思議といふほかはないと思ひます。

先程も申しましたやうに、日本に哲学がないなどといふ全く出鱈目な議論を排除し、貴重な研究をここから進めてゆく、そして貴重な心の交流をまきひろげてゆく、その拠りどころとしてこの合宿教室を大切にしながら、確信をもって進まなければいけない。私はさう考へてをります。

学
び
方

国民文化研究会理事長・亜細亜大学教授

小田村 寅二郎



合宿地に立つ明治天皇御製の幟

今日は皆様の御手許にお配りした「国民同胞」、これは私どもの研究会で、昭和三十七年以來毎月刊行して、現在一九〇号を算へてをりますが、その最近の号を手にしていただいて、その読み方について御話申し上げたいと思つてをります。

その前にいくつかのお話をさせていたどうかと思ふのですが、第一に申し上げたいことは皆様が生れたときから身につけてゐらっしゃることと、そのあとで外からくつついたものと、その二つを区別して考へていただきたいといふことです。私は開会式の時に、この合宿では世間で言はれるやうな学校の格差とか、学年の差とか、社会的な地位の差とか、年齢の差とか、さういふ自分の外側にくつついてゐるものをはらひのけて、生なまの人間としてお互ひに近づく努力をしていただきたいと申しました。今日はその上にもう一つお願ひがあるのです。それは社会的な格差といふものをとり除いたあとに残つてゐる自分、その中には自分自身に本来そなはつてゐるものと、小学校、中学校、高校、大学と歩んでくる間に自分にくつついたものと、その二つがある、その二つをはっきり区別していただきたいといふことです。皆様は今日迄四日間の合宿を経験されたわけですが、その間になされた多くの御講義の内容が今まで自分が考へてゐたことと全く違つてゐるので頭の中で大きな渦が巻いてゐる、さう思つてをられる方も随分多いと思ふ。だがその場合自分が考へてゐたことといふのは、果して自分自身の本来のものなのか、そのあとにくつついてきたものなのか、それを区別してかからないといけないと思ふの

です。

皆様は紛れもなく御両親から生れ、御両親の庇護のもとで、日本語を覚え、春、夏、秋、冬といふ四季が、はじめ正しく移り変ってゆく大自然のたたずまひ、ピッチの早い気候風土の変化の中で一年一年を送りながら今日を迎へられた。それとともに御家族や近隣の人々からさまざまな影響を受けられ、学校にはいったあとは学校の校風や先生方や学友の方からいろいろなことを学び、影響をうけながら今日に至ってをられます。かうして一人一人のお姿が出来上ってきたのですが、この本来の皆様の後にくっついてきたさまざまなことが、果してそれでよかったのか、そのことをここでもう一度静かに考へていただきたいのです。いつの間にか自分のものになってゐる物事の判断の仕方や、価値判断の基準、それは外からくっついたものが多くを占めてゐると思ひますが、果してそれでいいものか、それで一生過ぎてしまつても後悔しないものかどうか、といふことです。

そのことと関連しますが、先程夜久先生もおっしゃいましたが、皆様がこの合宿で、あるお話を聞きになつて、いい話だと思ふ。その話を信じたいと思ふ。だが一方さう一直線に信じていいものか、あまり信じてしまふのは馬鹿くさく見える。一度は疑つてみようといふ考へが生れてくる。このやうに、信じたい気持と疑つてみる気持がせめぎあふことが多いのですが、そこには明らかに「構へ」があることに気付かなければいけません。聞く方の姿勢に身構

へがあるのですね。自分はかういふものとして存在してゐる。それがフツと別の意見に耳を傾けてしまふとそれ迄つみ重ねてきたものがだめになるのではないか、いはば権威が落ちるのではないか—さういふ身構へなのです。しかし学問を進めていくのにこれほどつまらないことはないと思ふ。

例へばこの合宿では友情を非常に大切なものとして考へる、それはよくわかる、しかしそれが国家とか天皇とかの問題とどう結びついていくのか、それがわからない。さういふ時そのむすびつきがわからないといふ意見が出されて討論が行はれるのなら結構ですが、自分は友情の問題は別として、国家や天皇のことについては余り考へたくはないのだとか、あとでゆっくり考へようと思ふから、ここではとりあげたくな



いのだとかそのやうに身構へてかかるなら、全くつまらないと思ふのです。わからなければ、それをどう考へたらいいか、そのためには、どのやうに勉強し、どのやうな本を読んだらいいか、それを教へてくれ、といふやうに相手の中に飛びこんでいって、はじめてそこに本当の学問が行はれるはずです。しかしそんなことを言へば自分が崩れてゆくやうな気がして、それが恐くて一步ふみとどまり、身構へてしまふ、それでは何の意味もないと思ふのです。さういふかたくなな姿勢をとりつづけてゐると、一日目も二日目も三日目も同じ感想がくり返され、さまざまな講師がすばらしいお話をなさつても、すべてのことを馬耳東風に聞き流してしまふことになるのです。

もう一つ次のやうなうけとめ方をする人もゐる。すなはち自分達は大学でグループをつくつて、この合宿と同じやうな趣旨の活動をしてゐる、だから「ここで話される先生方の御話は全部わかる」といふうけとめ方です。これは一見よささうに見えますが、これにも非常な問題があるのです、この合宿とは違ふ考へをもつたまま合宿に参加して本当に悩んでゐる人に比べるゝと、このやうに何でもわかつたといふやうなうけとめ方をする人は、その精神のレベルからすれば全く問題にならないほど低いのです。

それはなぜかと言へば、国を守るとか、日本の祖先の業績を偲ぶとかいふことは、一刻一刻休まずにわれわれがそれへ向けて心を集中する努力をくりかへしていかなければできないこと

であつて、国家主義とか天皇主義とかいふものをおしひろめてさへ行けばそれでいいといふことは全く違ふのです。そんなことではマルキストがマルキシズムの宣伝に躍起になつてゐると全く同じなので、そのやうなイデオロギーの中にはいつてしまへば、日本国民が具体的に歩んできた道に近づくことは決して出来ないのです。そんな人は聖徳太子も山鹿素行も吉田松陰もみんな立派だと言ふでせう。天皇も大切だといふでせう。しかしただ口先でさう言つてゐるだけであつて、天皇方や先人たちが、生きてをられた時にどんなに苦しんで来られたか、そのおもひを具体的に偲ぶ努力をせずにはただ立派な方々だ、と概念的な評価を下すだけに終つてしまへば、それでは何の意味もなきなのです。先人を知るといふことは、先人の苦しみを偲ぶことではじまり、その心のかすかな動きにも耳を傾ける集中力によつてはじめて可能になることなので、そのやうな努力をせずに、単に同じ考へだなどといつてゐて、事終れりと処理してしまふことは、いかにつまらないことか、そこをおわかりいただきたいと思ふのです。

これに関連して申し上げますが、私たちはいろんな意味で世の人々から「右翼」と言はれることがあります。しかしこの合宿で考へようとしてゐることは、このやうな右翼とか左翼とかいふ分類以前の、イデオロギー以前の問題なのです。イデオロギー、何々主義といふものは、たしかに誰かが、或る時点で考へついた一つの思想でせう。しかし人間の心は時々刻々に変化する、従つて主義と言つても、それは一つの目安にすぎないので、それに命をかけるやうな、

そんな価値のあるものではありません。

それらのことを考へ合せていただければ、自分は、今までもこの合宿教室と同じやうなサークル活動をしてきたから——といふ安易な肯定の態度もまた、どんなにつまらないことか、また、本来のあるべき学問の姿勢から考へてそれがいかに間違つてゐるかがわかりいただけると思ひます。

開会式の折にも申し上げましたやうに、この合宿ではあらゆる年齢の差、社会的な地位の差を越えて、同じ人間として、十八歳の方に対して五十歳の人が心をこめて話しあつてゆく、それは皆さまがこの合宿で直接に体験なさつた場面だと思ふのですが、さういふ風に、お互ひが外側についた金箔も銀箔も捨て去つてつき合ふ間に、天皇と国民が信じあつてきた日本の道がどのやうにして出来てきたのか、といふことや、国民がこぞつて天皇を中心に仰いでこの国を大切に守つてきた足跡についても、少しづつお判りになってくると思ひます。かうした「物の理解・納得」に到達していくことと、ただ単に天皇中心主義などといふイデオロギーに安住してゐる姿とがいかに違ふかわかりいただきたいと思ふのです。

このことと関連してもう一つ申し上げたいことは、現代の思想運動では、集団活動といふものに主力がおかれてゐるといふことです。特に左翼運動においてはその傾向が顕著で、彼らは常にリーダーによつて動かされてゐます。しかもそのリーダーはどこにゐるかわからない。警

察が出てくるとリーダーはいち早く逃げてしまふ。彼らは常にさういふことをくりかへしてゐるのですが、これを一体学生運動などと評することができるといふのが、私の数十年來叫びつづけてきたことなのです。だが残念なことに、天皇や国がらを守らうとする側の運動の中でも、いま申し上げたのと同じ誤ちをくりかへしてゐる場合がままあるのです。このやうにあらゆる思想運動を動かしてゐる所の「集団の力に頼る」といふ風潮は、何としても排除しなければいけないと思ひます。このことは案外見すごされてゐるやうですが、私は大変大切なことだと考へてゐます。「大学をよくしよう」と考へて運動する場合にも勿論同様で、このことを決して忘れないでほしいと思ふのです。

現在の日本の大学は文字通り手もつけられないほど駄目になつてゐる。だからと言って、大学をよくするために、大学の中で集団と集団が勢力のせり合ひなどしたら、これはもう大学ではなくなつていくばかりです。

大学をよくするためには、大学における教学の基本的な精神にたちかへること、学問の内容が正されること、さらに学生がものを学ぶ姿勢が整つていくこと、その三つの要素しかないと思ふのです。それには、皆さんが大学の中で大学をよくするために、集団の力に頼るやうな気持ではどうにもならないので、さうではなしに皆さん一人一人の学生さんの心が強く正しくなつていくことが先決です。その心を堅持しながら、どこに出しても恥かしくないだけの気迫

ができてこなければだめでせう。とにかく、私たちは何々のグループを組んでやってをります」といふやうなことを言つてゐる段階では、とても大学をよくする道は出来て来ないし、日本をよくすることも出来ません。

自分自身のことをお話の中に入れて大変恐縮ですが、私は学生時代に東大から退学処分を受けました。その時のことを少し申し上げますと、私は当時東大の先生方の講義がとんでもないをかしいことに気づきましたが、講義の間に質問を持つていくことのできないような状況でしたので、ある雑誌からの要請に依つて「東大法学部における講義と学生思想生活」といふ題でかなり長文の論文を書いて発表したのです。それは誰にも相談しないで、私一人夏休みに書いた文章でした。それが出たところが、大学は慌てて僕に学生としての本分を逸脱した行動をした、と断じ、「外部と通謀して恩師を誹謗したことが、学生の本分に反する」、ついでにはそれを反省してゐるか、謝れ、と言つてきました。それに対して私は、自分が世間の雑誌に東大の講義内容について書いて発表したといふ行為そのものが、とつた行動が学生の本分に反するといふのなら、謝るに決してやぶさかではない。しかし東大といふのは学問の府ではないか、言論の自由を標榜してゐるところではないか。であれば私が書いたのは全部思想問題であり学問の内容に触れてゐることなのだから、その内容については当然大学側から学問的な批判が用意されるべきでせう。ところがそのことについては一言も言はないで、単に大学批判の文章を雑

誌に発表したといふ、ただそれだけで謝れといふ。「学問の自由」と「言論の自由」を常日頃強調していらつしやる東大ご当局のなさることとしては、おかしくはありませんか。自分に都合の悪い時は、権力的に押へるやり方で、東大らしくないではありませんか、これでは謝るわけにはいかない、と申したのです。

私が書いたその文章の中には、例へば当時東大では帝国憲法が講義されてゐたのですが、ある有名な憲法の先生は、一番大切な第一条から第四条までを一年間にわたって全く講義なさらない、そして、国会法ばかりを講義してそれが憲法の講座だといふことにしてをられた、さういふひどい状況をありのままに指摘して、東大ともあらう所がこれでいいのか、と書いたのです。ところが大学の方ではそのやうな講義内容については全く反省を示さうとはしなかつたのです。かうして最後には退学処分をうけましたが、私は処分をうけた時には、卒業の免状をもらつたやうな気持で何にも悔がなかつたのです。

自分のことを申して申し訳ないけれど、とにかく私は自分一人でこのやうな運動を展開してきましたのです。だからといって僕みたいに皆さまにもいま同じことをやってほしいと言ふのではありませんが、運動といふものは一人でやるものだ。その一人でやるといふ志をもつた者が集つて一緒に検討しあひ、励ましあふのが運動の本筋だと思ふのです。そこに本當にいのちのこもつた運動が展開してゆくのではないでせうか。明治維新を実現した幕末の志士たちもみなさ

うではなかったでせうか。全国各地に散らばってゐた者達一人一人が命をかけて戦ふ決意をかため、その間にすばらしい友情をはぐくんできて、それが明治といふ時代をつくり上げていったと思はれるのです。

大学といふのは、いまやどうにもならないところまできてゐる、その中で一人で大勢の人を相手に戦つていくためには、自分自身の心を鍛へておかなければならない。相手は強烈なとりでを築いてゐる、それに立ちむかつてゆけば、必ずくづをれてしまふやうな経験をするはずで、くづをれて家に帰ってくる、そこで、お互ひ友達同士激励しあひ、一緒に先人の書物をひもどき、自らの心を充実し直し、そして又、立ちむかつてゆく、それが青年の生活であり、学生らしい一途な生き方だと思ふし、さうした中でこそ、本当の学問が培はれてゆくと思ふのです。

もう一つ皆さまとご一緒にここで考へておきたいことに、体制と反体制といふ対立することばがある、そのことについて一言申し上げておきたいと思ひます。体制と反体制といふ場合に、反体制といふ方が人が言はうとしてゐることは比較的よくわかります。いまある世の中を動かしてゐる勢力、自民党があり、財界がある、それらを壊して新しい別の社会の仕組みをつくり上げようといふのですから、その是非は別にしても、ともかく反体制といふ言葉の意味は、一応は理解出来るし、自分たちを反体制派と名乗ることも、それなりにわかることなので

す。

ところが、現在動いてゐる社会秩序を支持してゐる方、それを反体制側の人々は「体制側」といふ言葉で呼んで、自分達に同調しない人は、すべて体制の中で生きてゐるといふ。一方言はれる方も、自分たちは「体制側」だと自認してしまつてその言葉が拡がるのを見送つてしまつてゐる、さういふ状況が見られます。だが、果してそのやうに言はせておいていいものだらうか、といふのが、私の言ひたい所です。反体制を標榜しないすべての人を「体制派」といふ言葉の中に入れてしまつてそれですむものでせうか。

私は、天皇を大變大切な方だと思つてゐる一人です。日本の伝統はすばらしいと思ふ一人です。しかし同時に世界のどの人類も憎んではゐません。全人類と同じやうに生きていきたいと思つてゐます。それは、もともと天皇のお心に通ふことであると思ひますし、私は天皇の大きなお心にはとても及ばないまでも、世界の全人類ともどもに生きていきたいと思つてゐます。皆さんがよく口にされる、平等といふ理想も、世界平和の保持といふ理想も、私もまた同じやうに何とか実現させていきたいと願つてゐる一人です。だがそのためにこそ所謂反体制の人達の考へ方には断じて同調出来かねるのです。もし、日本が反体制の国になれば、平等も平和もすべてが崩れ去つてしまふと思ふからです。だから天皇についても大切に考へたいし、そのやうな運動には当然反対の立場をとります。しかしながら、さうだからといって、私は自分が、

なぜ「体制」の中に生きてゐる男だと自らを表現しなければいけないのか。どうして「体制派」といふレッテルを貼られなければならないのか。彼らが、「自分達は反体制派」だといふのは勝手です。しかし「お前達は体制派だ」と言ふなら、猛烈に反撥するのが人間本来の生き方ではないか。それを憤る心もなく、相手から貼られたレッテルを額につけたまま生きてゐる、さうした自己の主体をあいまいのままに放つて生きてゐる衰弱した生き方の中に、現代を風靡してゐる思想の間違ひの根源がある、私にはさう思はれてなりません。私たちがいま生きてゐるこの世の中の仕組みは、ごく自然に人類が経験に基いて組み立ててゐるものであつて、体制などといふぎこちない言葉で評されるのは、全く心外なことだと思ふのです。

なほ先程、平和とか平等とかいふことにふれましたが、そのことに関連して生命の尊重について一言補足しておきます。人間のいのちは尊いと言ひます。それは当然です。しかしその場合、肉体的ないのちだけではなく、心をもつた人間の命といふものが本当に尊いと私は思つてをります。だから、私が思つてゐる人間のいのちの尊さは、人権尊重などといふ、外にくつたいた権利を平等にしていけばすむといふやうな、上つ面な平等で満足できるやうな考へ方とは全く次元の異つたものなのです。元来日本民族は、そんな薄っぺらな人権尊重などといふより、大昔から、遙かに深い人間平等の理想に燃えて今日まで生きてきたではないか。それが日本人がこれまで培つてきた伝統ではないか。どうして人権などといふ人間の外側にくつた

ものだけを問題にして、人間の中味の、本当の意味での平等を考へようとしなのか、そのことが本当に残念でならないのです。人のいのちを大切にするといふことと人権尊重といふことは本質的に違ふ。その違ひに心をとめなければ、思想を語ることは出来ない、私はさう思ひます。

△編者註、講師はこのあと国民同胞七月号、八月号をとりあげて、文章に接する時の心構へについて説かれたが、この記録では割愛した▽



講

義

「新日本の誕生」とその動因

世界経済調査会理事長 木内信胤



新 日 本 の 誕 生

私の基礎的なものの方

過去一年間の世界と日本の動き

「新路線」における考へ方の転換

△ 質 疑 応 答 ▽

△木内先生は最初に、御講義（八月七日）直前の七月三十日付で産業計画懇談会より発行されたパンフレット「貿易構造の改革——新路線の一環として」を受講者全員に配布され、それについて若干のコメントをされたあと講義にはいっていかれた▽

一、新日本の誕生

△新日本の誕生▽

私はこれまでいつも講義に先立って、過去一年の世界と日本の動向をお話することにしてゐましたが、今日は主題の方からお話いたしませう。

「新しい日本」は必ず近く誕生する、私は確信的にさう思つてゐます。これは「総合的直観」の結果であつて、理屈で言ふのではなく、ぱんといきなりさう思ふわけです。すなはちこれは私の全経験と言ひますか、全生涯をかけての結論なのです。ただし「新しい」といふのは明治以来、敗戦以来の今日迄の日本と著しく違ふから「新しい」といふ感じを受けるのであつて、実は「本来の日本」が顕現するのに過ぎません。すなはち本来の日本が再び顔を出してゐるのです。黒船でびっくりして以来、初めは尊王攘夷だったのが、途中から急に開国となり、欧米を学ぶことになりましたね。その学び方は非常に上手で、たちまち日本は大発展をして列

強の一員となった。列強の真似をしたといふわけではないが、対抗上已むを得ないと考へてや
つたのが韓国の合併であり満州国の建設でした。その行きつく先が蔣介石の中国との戦争とな
り、ドイツとの関係もあつて米英を相手とする第二次世界大戦となる。そしてそれに負けたの
が日本の辿つた道であつた。だがこの明治以来、敗戦までの道は、実は本来の日本の道ではな
く、黒船に驚いたあと心ならずも辿つた道です。言ひ換へれば本来の日本が曲げられてゐたの
が明治以来の日本だと思ひます。

今、例へば憲法問題で、或る人達は明治憲法に返れとおっしゃいますが、私はあの憲法を余
り良いとは思はない。あれはヨーロッパ流を無理に日本が採用したので、本来の日本人は憲法
など作らない。聖徳太子の十七条憲法がありますけれど、あれは明治の憲法とは似ても似つか
ない。一種の人生観といふか人間の心得を書いたものです。しかし明治の憲法はヨーロッパ思
想であり、法律とは権利義務を規定するものと考へてゐる。その権利とは、自己の利益を護
ることが認められてゐるものですが、例へば明治憲法には天皇陛下の大権事項といふのがありま
すが、「大」の字をつけて誤魔化してはゐても、結局は天皇陛下の権利といふことになつてゐ
る。しかし天皇陛下が自己の利益のために何かをなさるはずはないのです。

だから一口に言へば、ヨーロッパの権利思想に基づく旧憲法は日本の国柄には合はないので
す。もっともこのやうに誤魔化してきた明治の日本人は実に利口だった。さうやらなければな



らなかつたし、やったからこそ日本は近代化をし、欧米と同じやうな国となることができたわけで、偉かつたには偉かつたが、本来の日本が曲げられたことは否定出来ません。

その同じことが敗戦以降の三十年間にはもっと酷い形で起つたのです。日本人は戦争中は実によく努力し頑張りましたが、もともと無理な戦ひだったので敗戦に了つた。さうしたら、まことに突然、過去の日本は凡て悪い事にしてしまった。これは占領政策にも関係があつた。今まで抑へられてきた左翼的な連中が急に解放され、むしろ司令部に奨励されたやうなところもあり、急にのさばつて日本の思想界を支配した。要するに過去の日本を否定して、アメリカに追随することになった。なぜなら、アメリカに追随すれば物量が豊かになる、と思つたからだ。敗戦直後の日本人は、アメリカ人の豊かな衣食住の生活をまのあたりに見て、

とにかく欲しいものは物量だと考へ、物量が得られれば、他の望ましきことは自から得られる、自然についてくると考へた。しかし、物量を得ることが望ましいといふだけならまだいいのですが、それさへ得られればあとのものは自然に付いてくるとまで考へたのはまづかった。そこに大きな錯覚があつた。このアメリカ一辺倒でやってきた日本は、ひどく曲げられた日本で、明治以来曲げられてきたものが、一層強く曲げられたわけです。

かうして明治から数へれば百二十年位になります、この曲げられた日本は、今やめでたく卒業の時を迎へてゐるのです。今はアメリカもをかしくなつたが、ヨーロッパに至つては、とても日本の競争相手ではない。ヨーロッパにおいでになれば日本の優れてゐることに驚きます。かうして明治以来、日本人が目ざしてゐたものは予期以上に素晴しく実現したのです。だから私はこれを悪かつたとは申さず、めでたく卒業したと言ふのです。しかしそれが一種曲げられた日本であり、本来の日本でないのは隠れもない事実なので、それをはつきりと自覚したらいと思ふ。卒業したのですから、おのづから本来の日本が出て来るわけなので、それをいまここでは「新日本の誕生」といふのです。新しい日本は明治以後、敗戦以後の日本とはまるで違ふ形、姿として現はれて来るので、全く新しいものが誕生したやうに思へるが、実はそれは本来の日本が再び現はれるに過ぎないのだ、と私は確信的に思つてゐるわけです。ではいつ現はれるかといふと、実は今日既に現はれつつあるのです。ただ皆さんの普通の目には見えな

い。気がついて見てゐればわかるが、気がついてゐないとわからない。しかし、皆さんが気がつくのも、存外早いのではないかといふのが私の考へであり、早くさうあらしめたいと思ふのです。ここ二、三年のうちに全く日本が変る。それを見てヨーロッパ諸国、特にアメリカは、なるほどと気がついて、彼らは彼らなりの新しい道に入るやうになって欲しい。さうならないとちよつと世界は危いやうな気がします。

△本来の日本▽

では「本来の日本」とはどのやうなものを考へる、その心得として、大和民族発祥の時の姿にばかりそれを求めないで欲しいといふことを申し上げておきたい。古事記に表はれた日本、たしかにこれが本来の日本に違ひはないのですが、そこにばかり求めないで、日本の国がいろいろな目に合ひながら、発展してくる、その全体の経過の中に本当の日本を捕へて欲しいと思ふのです。

古事記に表はされた日本は、漢字と共に仏教が渡来してきた時、非常にゆさぶられる。日本は動乱の巷になるが、その時聖徳太子がお出になって、えらい御苦労をなさって日本は助かるのです。それから時代は移り変って、奈良朝のやうに華やかな時代があり、京都に移っては平安時代となる。それがいろいろと変って鎌倉幕府になり、結局応仁の乱、戦国時代、徳川時

代、そして明治となつてくるわけです。仏教はいつの間にか日本らしいものになる。昔の人はものを書く時は漢文で書いた。正式なものは皆漢文だった。そこに漢字仮名交り文が現はれ、明治以降は本当に漢字仮名交り文が定着した。このやうに固定した日本といふのはどこにもないので、休むことなく變つて行くその全体の中に、本来の日本を捕へて欲しいと思ふのです。さきほど、明治以来の曲げられた日本、と私は言ひましたが、平気で自己を滅却し相手に没入してヨーロッパ化をやる、或ひは敗戦後のやうにアメリカ一辺倒になる、その時は非常に駄目な日本となつてゐるやうですが、全体から眺めれば、さればこそうまくいくとも言へるのです、このやうに全く己を捨てたかの如き無茶苦茶なこともやり得る。私はそれが日本人だと思つてゐます。だから今非難したばかりの明治以来の日本、敗戦後の日本を、私は大きな意味でなら肯定します。そこにこそ本来の日本があると私は考へますし、日本といふものを、その発展の全容の中に求めるべきだといふのもこのことなのです。

△本来の日本とは何か▽

では、本来の日本とは何か、といふと、本当のところは、いくら考へたとて、いくら勉強したとて、これは決して解る筈のない題目だ、と知ることが肝要なのです。勉強すれば解ると思つて勉強するのは結構です。しかし世の中の事は、勉強すれば解るといふやうなものではな

い。むしろ本當の事は解らないといふ事が多くの人に解ると、世の中は良くなるのです。だから人々は、解らないながら、より解らうと努力するのがいいのです。

何か固まったものがつかまったやうに思ふこと、それが解ったといふことだと思つてゐる人が多いが、事實はそんなものではないのです。ある所まで解ると本物は先へどんどん逃げて行つてしまふ。だから、解れば解るほど、解らなくなつて来るのです。つまり固定はできないのですが、概ねかうだらう、少くともこの方向だ、とは言へるのです。他の人がいろいろ言つてゐるが、あれはどうも違ふ、多分かうだらうと考へながら進んで行くのが正しい態度だと思ひます。ですから私は、口ではっきりかうだとは言はないのが好きなのです。勿論話す時は何か言ふ必要があるけれども、言つたらそのあとにすぐ、まあ、仮に言へばね」といった条件を付けておくことを忘れないのがいい。言はざるを得ないから一応かうだとは言ひますけれども、それは全て仮に言つてゐるのです。言葉に表はされたもの、それが絶対だとは、思はない。もの事は常に移り変り、先へ先へと進んで行く。その流動的なものの中にしっかりとしたものをつ捉へるには、ちよつと修業が必要なのです。本来の日本なんてものも、誰か偉い人がかうだと言つたことを、それだと決めてしまつたら、そこで死んでしまひます。本来の日本はいはゆる群盲が象を探るやうなものです。皆がこれは象だと思つてゐるが、それは鼻であつたり足であつたりするやうなもので、到底解らない。勿論できるだけ解らうとすることは結構です。但し、

決して固定的に考へない方がいいのです。

「私の心にある本来の日本」について、今日は何か言はうかと思つたけれど、今私が話して来たこととお解りのやうに、余り言はん方がいいらしい。言はないといふ事は知らないと言ふ事ではない。解らない人に説明するために、曲げて言葉にする事もあるけれど、それは私は本来好きでない。これだけ話せば解るでせう。あなた方が既に持つてゐるものでなければいくら説明しても駄目なのです。言葉を覚えて帰ることは出来ます。しかし、その言葉が表はしてゐるものは、自分が既に持つてゐるものがある時に、はじめてああそれだと解るのです。要するに言葉であげつらふ事はつまらない事、せいぜい既に持つてゐるものをはっきりさせるだけの事で、持つてゐないもの迄与へる事は出来ないので。ところが有難い事に、皆持つてゐないつもりでも相当に持つてゐるので、うまく行くとそれが開発されるのです。

△新日本誕生の動因▽

新日本が近く誕生すると私は確信的に思つてゐるが、それはどのやうな「動因」——原動力によつてさうなるのか。その「動因」と目すべきものは「世界の必要」と「日本の必要」の二つです。新しい日本が出て来るのは、誰かが何かをするからではないので、その必要が世界の中に、日本の中に内在してゐるからです。従つて日本はどうしても新しいものになつて現はれ

出る事になるのです。といつても新しい日本が生れ出るのは、本来の日本が再び現はれるだけの話で、何か全く新しいものが生まれるのではない。既に体の中に子供が宿ってしまへば、その子は、自分の力で、生れざるを得ないから生れて来ますね。そのやうに新しい日本も生れざるを得ない運命によつて必ず生れて来るのだと、かう考へてもいいと思ふ。そしてそのための力は、小さく限れば「日本自身」大きく見れば「世界自体」に「内在する力」と見るべきなのです。ものを考へてきてこの見地に到達し、なる程と思へるやうになると、そこに大きな安心感に似たものがある。なぜなら必ず生れて来るのですから。誰が何をして、どこがどうなる、だから生れて来るといふのだと、それらのことがさうならなければ生れて来ない、といふ心配がでて来ますが、内在する力によつて当然に生れて来るのであれば、私自身は眠つてゐても、怠けてゐても、必らず生れて来る。今迄は自分の努力で何をどうしなければならぬと思つて、焦りながら必死にやつて来ました。それはそれで結構であり、よかつたのでありますが、必死になつてやつてゐると、自分がやらうがやるまいがちゃんとかうなるのだと思つてゐるとは大変な違ひですね。ところが、おかしいことに、黙つてゐてもかうなるのだと思つてこそ、本当の努力が出来るのです。有る筈のないものを創り出さうと努力するのではなくて、さうなる筈のものだからさうするのだといふのが本来の努力なのです。一つ言葉を紹介しておきますが、それは「あるが故にあらしめ、良きが故に良からしむ」といふ言葉です。あるからあ

らしめるのだ。良いから良からしめる。日本はいい国だから愈々いい国にしようとするのです。そのあとにつづくのは「あらしむるが故にあり、良からしむるが故に良し」といふ言葉です。この眠つてゐてもさうなるといふは、一種の悟りだと思ひますが、実はおもしろくて眠つはゐられないのです。

この「いいのだから良からしめよう」といふ努力は、ものすごく楽しい努力なのですが、そこには大きな安心感が出て来ることになり、人生といふものもものすごく楽しくなる。生きる喜びといったものを自分の内に感じるやうになる。以上が「新日本の誕生」の全てです。煩雜に言へばいくらでも有りますが、つきつめて言へばこれだけです。必ずしも長くしゃべることはないのです。

二、私の基礎的なもの見方

△重層構造▽

世の中は平ったい一つのものではなく、目に見える世の中の下に、目に見えない世の中が重なって存在してゐるのです。これは目に見えないからマスコミには乗らない。その双方の世の中がまた幾層にも分れてゐますから、今は一番上っ面の層の話をしてゐるのか、ちょっと深い

層の話をしてゐるのか、もっと大いに深いところの話をしてゐるのか、そこをよく心得て話をしないと、話がつれるのです。

世の中は層を重ねたやうになってゐると知った上で、次に大切なことは、表面に見える層、すなはちマスコミに表現される日本国の裏に、目に見えないもう一つの層があるのだと、常に意識してゐることです。その見えない層も幾段階かになってゐるわけですが、これは見えないのですから、その段階をハッキリと区別して考へる事は難かしい。しかしこれはどの層のことかと始終考へてゐると、おぼろげながら解つて来ます。この事に気が付いてゐる人と気が付いてゐない人とは、ものの扱ひが大変に違つて来るのです。

△日本の位置付けは極めて高い▽

この頃のヨーロッパやアメリカに行くとき、何と彼らは遅れた国だらうと思ふ事が多い。アメリカなどは馬鹿に進んだ所があるやうに見えるが、上っ面だけで、頭は実に単純で、重層構造などと言つたら目を回してしまふだらう。第一重層といふ言葉がないらしい。日本人なら、重層構造と聞いただけでぱんと受ける。彼等の言葉にはそんな感触を示す言葉はない。彼らは、頭はいいのですが、平たい。深みがない。日本の位置付けの高い理由は、日本国民のユニーク性にある。このユニーク性を会得したならば、本日の論題である「本来の日本の姿」が出て

来るわけです。ではそのユニーク性とはどういふものか。

最近の外国人の日本研究は大変なものです。アメリカ人やヨーロッパ人の日本研究は猛烈な勢ひではやっております。彼らの頭は日本人とタイプが違ひますから、彼らのやるのを見て日本人が日本のユニーク性を悟ることもあって、それは大変結構なものです。例へば彼らは個人を中心に考へてゐて、社会は個人の集合だと思つてゐる。だが日本人は自分の中の一部、常に全体の中の自分といふ自覚がある。だからいつも挙国一致であり、「株式会社日本」をつくりあげる。

日本人のユニーク性を知るには、日本語と外国語とを比較するといひ。日本語の研究も今実に盛んですが、私から見れば、日本語ほど便利の上もない言葉はない。思ふことは実に良く表現できる。ところが終戦直後はこの日本語を、不便でダメな言葉と考へ、特に漢字を廃止しようとしたのが、日本の国語政策でした。今年の一月二十一日付で国語審議会から「新漢字表」といふ案が出て、いま世の中のリアクションを聞いてゐる最中ですが、これで漢字を制限することはやめる、といふことだけはやつと決つた。何はともあれ、漢字仮名交り文といふ日本語の表記法はすばらしい。日本の経済発展の早さの原因もそこにある。日本人の実にニュアンスの細かい頭の使ひ方も、かういふ国語を使つてゐるからかういふ頭があるので、その二つ

は一体不可分のものです。だから日本人を知りたければ、外国語との比較に於て国語の勉強をすればいい。しかしその前に日本人のユニーク性を直感してゐなければ駄目です。ともかくこの日本人のユニーク性が素晴らしいから日本の位置づけはむやみに高くなって、今や全世界の注目の的になつてゐるのです。

△世界の變局——「科学技術文明」の次の文明への地歩の移譲▽

今の世界は大變化を起してゐます。それにはいろいろな理由付けがある。アメリカのリーダーシップが衰へ、或は東西陣営がそれぞれの中でごたごたして来たからかうなつたのだ。これはいはゆる「多極化現象」といふことです。それからまた地球の「資源有限時代」になつたから、といふことも言はれてゐる。資源は探せば無限にあると思つてゐたのが、気がついてみたら有限だつた。一番大事なエネルギー源である原油は今の調子で使つていったらあと二十年はもたないといふ觀察です。ここから、地球資源有限時代の登場が世界の變局の理由だといふ見方がでてくるわけです。それから南北問題で後進国が次々と独立した。彼らは団結する方法を覚えてきたので国際會議は何をやっても皆うまくいかない。こわされてしまふ。国連は今、期待外れの悩み深き存在になつてゐます。このやうに後進国の数が増えて急に偉くなつてしまつた。又、後進国間にも格差が出て来た。それからもう一つ大きいのは「人口問題」です。今の

調子でいったら三十年で地球の人口は倍になる。六十年で四倍になる。現在は四十億ですから六十年したら百六十億になるのです。これだけの人数に対しては、石油ばかりか食糧もまかなへない。これでは大変化が起らざるを得ない。

以上のやうにたくさん問題が一度に今出てきたから世界は大変局なのです。しかしこれらはいづれも末端的な捉へ方です。さうではなく、もっと基本的な問題としては、ヨーロッパやアメリカを中心に栄えてきた「科学技術文明」と称する現代の文明が行き詰りに達したといふよりむしろ、その使命を完了して次の文明に地歩を譲らうとしてゐるところから起る変化だ、といふ見方がある。私はそこ迄深く掘り下げて捉へるべきだと思ひます。では次の新しい文明とは何かと言つたら、それは「東西両文明の融合文明」でせう。さう考へればそのチャンピオンは日本といふ事になる。これが新日本が誕生せざるを得ない世界的な理由です。かうして日本は世界の必要から、今迄のヨーロッパ追随を卒業して本当の日本らしくなり、東西両文明の融合文明の体現者として登場して来ることになるのです。世界の必要と私が先に申したのもかういふことです。

△「経済学」は病気である▽

今は全世界、「社会科学」と呼ばれる学問、特にその中でも「経済学」が病気であることを知

らねばならない。昨年私は、「脱ケインズ経済学の建設」といふ論文を書き、ここでもそのことをお話しました。今その建設は始つてゐます。マスコミの表面にはまだ現はれませんが、少しづつは出て来てゐる。たとへばマクロ・アプローチは駄目だといふ言葉がかなりはやつて来た。或は計量経済学で威張る人もなくなつて来た。だから今経済学は病氣だといふ認識は、少くとも日本では、半分ぐらゐ浸透したと言へませう。（編注・この項、昨年の合宿教室記録「日本の回帰」第十二集を参照）

△将来の予想▽

将来の予想をたてながらものを見るのは良いことで、私は三十年先と三年先との二本立てで考へてゐる。この、予測をたてる、或は予想をするといふ事は、ものを考へる以上は是非ともやらねばならないことなのです。評論家はもちろん、学者も社会科学をやる人なら三年先にはかうだ、三十年先にはかうだと言ひながら進まないためなのです。但しそれが当る当らないで争はないこと。当るにしろ当らないにしろ、その理由付けをはつきり言っておきますと、その理由付けの当否が判明して来る。理由付けは九割正しかつたが、一割誤つた為に答は逆になつたといふなら、その予想した人は非常に高い点になるわけです。だから当る当らないではない。わけがちゃんと言へればそれでいいのです。ミルトン・クリードマンといふ有名な経済学

者は、経済学者には予言をさせろと言った。学者同士の議論は三年でも五年でも続いてしまふ。議論では勝負がつかない。予想に含まれた事実の展開といふもので、どっちが良かったかを言はなければだめだと言ふのでせう。

では私はどういふ予想をたてるかといふと、大体三十年先を考へようとしてゐるのですが、それ一本ではおもしろくないので、三年先も考へるわけです。三十年といふのは非常にいい期間です。戦後は三十年ですから、多くの人がこの時の長さを実感的に知つてゐる。長いと言へば長い、実はあつといふ間に経つたとも言へる。のみならず三十年といふ期限は人口が倍になると思はれてゐる期限です。六十年経つと人口は今の四倍になるわけですが、食糧から考へてそんなことはあり得ない。食糧は今の二倍がやつとですから、次の三十年はもうだめだといふことになります。だから今から十五年もしたら人口問題、食糧問題について議論が沸騰する筈です。議論は十五年先ぐらゐる先からせうが、三十年先には、今とはまるで違ふ世の中になつてゐるだらう、と考へていいわけです。

三年先はどうかと言へば三年先の世界は概ね今と同じでせう。概ね同じとは言つても、世の中はうんと變つてゐるのです。毛沢東ばかりでなく共産政權はもうないかもしれない。金日成政權もないかも知れない。共産党といふ党は日本ではなくなつてゐるかも知れない。社会党は分裂したあと双方駄目になり、これもなくなつてゐるかもしれない。かういふ変化はうんとある

が、世界を全体的視野で見るとなれば、今と同じやうな思想的混迷が続いてゐて、三年先なら今と変るまい、といふのが私の予想です。その論拠は、現在病氣になつてゐる経済学が治らなければ駄目だ、世界はよくならないからです。社会科学がその在るべき姿になるまでは駄目です。ヨーロッパもアメリカも理屈の社会ですから、議論はやたらに多いが、同じやうな混迷を続けてゐることと思ひます。ところが日本は新しく誕生しようとしてゐる。早ければ日本は二年先には新しい経済学を持つてゐるでせう。その日本は、現代の悩みや問題をほぼ解決してゐますから、それをわかるやうに説明してやれば、向うの人はそれを用ひて考へ始める。三年先はまだ考へ始めだから、世界はまだ混沌としてゐる。四年先になつたらずつと變つてくるかも知れません。

△総合的直観▽

私の立場は「総合的直観の立場」です。常に全体を見てゐるのではなくれば部分の事も解らなから、「総合的」な立場を採るのですが、凡そものが解るといふ事は、全て直観力の仕事だと考へます。この立場は社会科学を立て直す基礎です。「総合」といふ事はどうして出来るのか。人間は一つ事を考へる時にはそれしか考へられなくと思つてゐる。

しかし人間は、ある一つを見てゐるやうでも全体の事が背後にあって、これを見てゐるので

す。かうして総合が可能になるのです。

次に「直観力」はどうしたら養へるか。昨年もこれについてお話しましたが「まず第一に、己を虚しくする」事です。虚心にならなければ直観力は出て来ません。お金を儲けたいと思つてゐる人は、儲けに関する限り直観力は出るでせうが、日本国は、世界は、どうなるのだといった問題は、到底その人には解らないでせう。朝は会社の事を考へてゐるが、晩には全くそれを忘れて虚心になれば、それは素晴らしい人で、さういふ人なら解るでせう。この第二は、強烈な念願を持つゝ事です。どうしてもこの問題を解決したいといふ強い念願、志を持つゝ事です。さうすると自分の全知識、全経験といふものが総合されてある日突然パーンと答が出てくる。私はさういふ経験を何回もしてゐるから言ふのですが、その念願は世の中を良くしたいといふ善事でないのだめだといふことにも、心をとめていただきたいと思います。つまりいい人におなりなさいといふ事です。

△哲学的、宗教的世界観▽

以上は「世の中の事を考へる場合の基礎」として、私が持つてゐる考へ方の「一つのセット」です。これらは全部絡み合つてゐる。ところがこの他に「哲学的なセット」もあるし「宗教的な世界観・人生観」といったもののセットも考へられます。これは相当高度な話になる。

例へば「現在」といふものは一体あるのでせうか。一瞬が過ぎたら、それはもう過去のものです。一瞬先は未来です。だから過去は消えてなくなつて、現在だけがやうに思つてゐるのはおかしい。むしろ現在が、実はないに等しいのです。過去は確実に実在してゐる。またそれと同じ確実さをもつて、未来は実在してゐる、と考へる事が出来る、かうなれたら相当なものでせう。かういった一連の考へ方が、哲学的なセットです。時間的空間的に展開されてゐるものは、瞬間に消えてゆくわけです。死ねばもちろんなくなりませんが、人間は必ずしも死ぬ時に死ぬのではない。瞬間／＼が別れであり、瞬間／＼が死といふものなのです。このやうに考へますと、実在してゐると思つてゐるのは仮のもので、本当の実在とは、もしも時間空間の制限の中でそれを展開せしめてゐる本来の自分を考へることが出来るなら、それが真の実在だといふ事になつてくるでせう。これは仏教的な考へ方ですが、日本人には仏教が染みついているので、日本にゐる世の中をじつと見詰めてゐれば、かういふ事に気がついてくるのです。

「宗教的な考へ方のセット」としては、昨年お話ししたインドの事がさうです。彼らの生活はものすごく貧しいから、多くの人はこれをヨーロッパ化すればいいやうに思つてゐるけれども、インドを知つてみれば、到底ヨーロッパ化できないわけがある。一方の欧米では、特にアメリカでは、これが文明かと思ふほど、いろいろの事が乱れて来た。それには、彼らがキリスト教を信じなくなつた等々の原因もあります。信じなくなつたから乱れたのではなく、信じ

なくなる原因があるから乱れたのでせう。これは文明の退廃です。かうなるとインドとアメリカのどちらが一体いいのか。私には解けない謎として心に蟠つてゐる、と昨年はお話した。その解答を私は昨年の秋に出た『南アジアの研究』といふ本の中の「現代インド所見」といふところで、少し出してをります。

(以上の一と二は、本日 of 主題に関することです。以下の三と四は、いつもお話してきた「世界と日本の動き」に関することです)

三、過去一年間の世界と日本の動き

△日本の動き▽

過去一年の世界と日本の動きですが、日本では「三木政権の終焉」と「福田政権の誕生」、世界では「カーター政権の誕生」が中心的事件で、このほかには「毛沢東の死をきっかけとする中国の大変化」がありました。最後に「日本の位置付けの急上昇」を加へておく方がいいと思ひます。昨年ここでお話ししてゐる時には、日本の位置付けがこんなに急上昇するとは思つてゐなかつた。私が前から申してをりました日本の高い位置、それに世界が気がついて、さつき申したやうに猛烈に日本の研究が始まったのがここ一年です。これらの事は先ほど出て来ま

した「世界の変局」といふ事にピタリと当嵌まるので、過去一年の動きは私の見方からすればさうなる筈でさうなつてゐる訳です。

ちよつと話が飛びますが、昨年はこちらで、不況は既に忘れて来たとお話ししました。昨年中に不況はなくなると思つてゐたのですが、それがつまづいた一つの理由は三木さんの総理だった時のあの行動ですね。私の観察が足りなかつたといふ面もありますが。八月には三木おろしが盛になり九月には挙党協なるものが出来て、三分の二以上の多数で三木はやめるといふ決議をしかねまじき勢ひであつた。ただ彼らは不徹底であつた。三木が党を出たら自民党は二つに割れて、過半数を割り政治ができなくなるのではないかといふ彼らの躊躇があつたから、そこまでは行かなかつたのですが、本当に少数でもいいといふ事でやれば良かった。福田さんが本当のリーダーならできてゐたはずです。私は自民党の連中が党を割る決心をしてやればよいと思つてゐた。実際には十月末に党大会をやり三木さんが辞め福田さんが総裁になって選挙に臨んだが、結局三木派を追ひ出す事なく不徹底なものに終つた。残念ではあつたが、一方から考へれば、これは実に日本人らしいやり方でもあつた。日本の位置づけが高いとか、日本は新文明を代表するなどと言ひましたけれど、現実を眺めて見るとまことにだらしがないので、それなのにどうしてそんなに日本を高く見るのかとおっしゃれば、一応その通りなのです。私は不思議な事を言つてゐるわけですが、世の中は不思議に出来てゐるのですから、やっぱりそれが正し

い見方なのです。とにかく表層の日本といふのは実にだらしが無い。あのわけの解らない挙党一致の選挙をしてよく過半数を割らなかつた、実に不思議です。しかし丁度これが良かったのですね。過半数すれすれだったから自民党は威張れないし、野党も今度は真面目になつて来た。意外にもこの間の国会は、いつになく真面目な国会で、法案もたくさん通つた。二百海里に関する海洋二法は与野党一致だった。私のいふやうに三木を追ひ出してゐたら、波瀾万丈の世の中になつた。私はその方がよかつたと今でも思つてゐますが、事實は私の言ふやうな事をやらないでやつて来て、かへつて良くなつたとも言へるのです。今年の参議院選挙ではマスコミによれば「保革逆転」する事に決まつてゐた。ところが新自由クラブや民社党は、革新陣営かどうか解らないので、保革の革といふ字が怪しくなつて、新聞はいつのまにか「与野党逆転」といふ言葉に入れ替へた。この時新聞は謝つてくれればいいのだが、謝らないですり替へるからいけないのです。ところがその与野党逆転もなかつたのが参議院選挙でした。これも又、一種の神秘的なところを持つ事柄です。そして今は、社会党陣営、共産党陣営が惨胆たることになった。日本の政治改革の必要条件が、今はひとつひとつ成就しつつあるわけです。

私の考へからすれば、社会主義は悪いものではなかつた。元来は素晴らしいねらひを持つたものでしたが、そのねらひが概ね成就して今は「もぬけの殻」が残つてゐるのです。だから社会主義を標榜してゐる社会党、共産党はどうしてもうまくいかない。では今後の経過としてはどう

なるか、おそらく社会党も共産党も段々しぼんでいつて消えてなくなる。その挙句保守陣營が真二つに割れて体制内の二大政党になる、と多くの人が思っているし私もさう思はんでもない。しかし一体二大政党が本当にいいのですか。ただ英米が二大政党でやって来て、立派な民主主義らしく見えてゐたからさう思ふだけです。それどころか政党そのものは本当に必要なのですか。何らかの政治集団は必要でせうが、今のやうな政党はまるで変る必要があると思ふ。その前にもうひとつ、一体議會制民主主義といふ制度がいいのかどうか、といふ問題があります。とにかく今日の日本の政治は、腑甲斐なき福田さんの態度にも拘らず、総選挙は丁度良い結果になったし、国会の経過も良く、参議院選は負けないで、ほどよい勝ち方をした、といふやうに妙な事になってゐるのです。

ではその中で何が起つてゐるかといふと、日本の位置付けが高くなつて日本は新しい道に入らざるを得なくなつた。いま皆さまにお渡しした「貿易構造の改革」といふパンフレットの中に、私はその新しい道とは何かを明らかにしてゐます。「貿易構造の改革」といふ題にはなつてゐますが、副題は「新路線の一環として」となつてゐて、「新路線」を説明するのがこのパンフレットの目的なのです。

さて、昨年は不況は忘れたやうになるだらうとここで私は話したのですが、それが逆転して、不況はいま深刻化してどうにもならなくなつた。今年の新しい事件として政府はこの三月

三日に「中期財政収支試算」を出した。それは昭和五十五年の財政収支を、若干の仮定を設けモデル計算をしてゐるのですが、それによると、税収を今の二倍にしてもなほ六兆八千億の国債発行が必要だといふのです。赤字公債は免れるがそれだけ国債を出さねばならぬ。しかも出したうちの七割は利払ひに食はれ、正味三割しか使ふ金はない。この発表以来、私はものを書く度にその事を言つて来たが、世の中はいまだにそれに対して十分な注目をしない。実に勘が悪いです。大蔵省の人は、カネが足りないのだから税収を二倍にしなくてはならない、と本当に思つてゐるらしい。スウェーデンなどは、GNPの五十%以上を国家が使つてゐる。日本はまだ二十%そこそこです。だから今の倍になつても構はないと言ふ。税収が二倍になるとしても、その間GNPも伸びますから、率で言へば今の二倍になるわけではなく、実際は三十%でまだまだ低いといふ理屈も立ちます。だから大蔵省の人は、ヨーロッパの例を見て、そこまで行くのは当然で差し支へない筈だと思つてゐる。それは彼らにはまだ、ヨーロッパが行き詰つてゐるといふ認識がないからです。ヨーロッパに比べてと言ふけれど、向うは既に参つてゐるのだから、それと比べたつてだめだと私は思ふが、大蔵省は熱心に真面目に増税を考へてゐる。私の考へだったら、その増税案は通りっこない。そんな増税をやつたら、恐慌的な大不況になるでせう。今はすでにそのはしりが来てゐるのです。増税を論ずるだけで不況は深刻化してゐる。福田総理は九月末頃新しい不況対策を出すやうですが、それはやってもいいが実際に

は効かない。それよりも「この増税案は、よくよく考へてみると不可能な事だから、増税を考へることは一切やめた」と彼が宣言しないと不況は直らない。その宣言をするやうなら、「産計懇」の提言に書いてある事を、全面的に採用するやうになるだらう。かういふ前例の絶対ない奇妙な事になって来たのが、いまの日本の状況です。

△世界の動き▽

次は世界です。カーターが当選しました。この人はなかなかおもしろく、真正直で宗教的なのですが、どうも少しおかしい。不安を人に与へる。私はいままで、彼は心配だといふ見方と、いやさうでもないらしいといふ見方との間を往来してきたのですが、最近の私の評価は、急転直下です。最後の断定はまだ下さないが、心配が非常な勢ひで増へてゐる。ごく表層的な意味でこれは大変な事になるだらうと思つてゐる。その理由は要するに彼はだめなのです。世の中を処理するほどの十分な見識がない。もっともこれは、望むのが無理でもある。なぜなら彼を取り巻いてゐる社会学と経済学とが病氣だからです。アメリカ社会が学問的に病氣にかかつてゐる中で、大統領が一人健全だといふ事はあり得ない。だから彼がどんなにいい人でも、力量と見識とに於ても不十分、といふことになるので、これは大変な事になるだらうと思ふのです。大統領は四年間辞職がないのですが、アメリカは三権分立ですから、国会がしっか

りしてゐれば、そんなに悪くはならないかもしれない。

次は中国です。天安門事件といふのが昨年四月にあった。周恩来の百日の喪が済んだらすぐ、広場の碑の前に持つて来てあつたたくさんの花輪を、政府が撤去してしまつた。それを怒つた民衆が、いつの間にか大群集となり大騒ぎになつたのですが、結局民兵を使って弾圧した。その後解つてきたことは、大変大勢の人を殺した事です。この天安門事件を、あつといふまに鄧小平が悪いといふ事にしてしまつて彼を退けた。九月になつて毛沢東が死んだ。そしてたら華国鋒は、いはゆる四人組をいきなり逮捕してしまひ、自分は毛沢東に、あなたがやってくれば安心だと言はれたとかで、彼がトップになつた。そしてたら鄧小平がまた出て来た。かういふわけの解らない事をやってゐる。ところが日本の新聞は、財界人、政界人の訪中に際して、華国鋒体制は治まつてゐる、葉劍英、鄧小平の三人トリオでちゃんとやって行くだらうなどと、まるでうまくいくみたいな事を言つてゐるが、どう致しまして、内部はめちゃくちゃなのです。私はかねがね毛沢東レジームはあと三年ないし五年でなくなると言つて来ましたが、言ひ出したのが一昨年でしたから、あと一年か三年持つかどうか、それが怪しいのが中国の状態です。それを少しもそのやうに書かないのが日本の新聞です。

韓国については新聞は金大中ばかり書いてゐる。朴正熙は確かに言論の自由を圧迫してゐる。しかしなぜ毛沢東、華国鋒、金日成が、どんなにひどく言論の自由を圧迫してゐるかを、

どうして平等に論じないのですか。金日成の北鮮に至っては笑止千万といふ状況で、あれは共産中国が瓦解するより早く瓦解するかもしれません。人間社会は嘘で固めるわけにはいかないのです。中国の嘘の固めっぷりを見て下さい。華国鋒といふ人はいまだに、どこで生れて、何歳の男で、過去の経歴はどうだったのか、全然国民に知らせない。彼は毛沢東の子供だといふニュースもある。さういへば顔は似てゐるといふ。このやうな事を一切明らかにしないのに、彼等の国は民主主義だと日本の新聞はいふのです。鄧小平が復活したのはいいけれども、それでは天安門事件の時に鄧小平を悪く言ったのは間違ひであつたのか、それとも彼が反省をし、自己批判をしたから許したのか、どちらでもいいがはつきりして欲しい。

今は世界的な悩める時代ですから、さういふ奇妙な国があつても別に驚く事はないが、ただ日本の新聞はそれを公正に扱はないのがいけない。国民が間違ひます。政治改革の最初のステップは、マスコミが真面目になる事です。政治制度よりも、マスコミがこれではいけないと気がついて、真面目な言論をするのが先決です。いづれさうなるでせうが、まだまだ道は遠いやうです。

共産国で大事なものはソ連ですが、ブレジネフは今度、憲法草案を出した。えらく民主的ださうでこの秋にオフィシャルライズするさうです。彼は今全部トップの席を占めた。やはり彼の個人的野心は相当なものです。ああいふ人達の心理状態は解りませんが、ソ連は要するにブレ

ジネフの独裁になりつつある。しかしこれでソ連がうまく行くとは限らない。反体制派は相当力を持って来た。東ヨーロッパ諸国のソ連に対する背反も相当強い。更に新しいのがユーロコミュニズム、**「白い共産主義」**といふ言葉でイタリー、フランス、スペイン等の共産党はもうモスクワの言ふ事を聞かない。まるでばらばらになって来た。つまり**「共産主義の末路」**です。これはもうどうにもならない。共産主義といふ名の政党は残るかもしれませんが、しかしそれはマルクスでもレーニンでもない、スターリンでも毛沢東でもない、魂の抜けた訳の解らないものを共産主義と呼んで、独裁主義を行う。さういふ国は多いでせうが、それに大して意味はない。つまり共産主義が荒れ狂った時代は、静かに消えつつあるのが、現代だと思ひます。

四、「新路線」における考へ方の転換

最後にお渡ししたパンフレットの要点についてお話しておきたいと思ひます。この文章は苦心の作ですから熟読含味して戴きたい。さっと見て、ああ解ったといふやうな顔をするやうでは何事も解らない。一字一字味はって欲しいと思ひます。

石油ショック以来三年半が経過しましたが現在はどういふ状況になつてゐるのか。 ショック

クはどうにか凌いだ、新しい努力をどの方面に傾注したら良いのかそれが解らないから、ただ漫然と元の道を、ゆっくり歩いてゐるのが現状だ」といつてゐる。その現在を低成長時代、或は言葉を「安定成長」に置き換へて、さもそれが立派な事であるかのやうに言ふ人がゐる。しかし逐次判明してきた事はこの儘では不況は永久化する、漫然と歩くといふ事では不況脱却が出来ないからです。不況が永久化したら、いづれ脱落者が頻出する事になりますから、日本経済は一大事に立ち至る。今は超一流の大企業まで危ないといふルーマーが出て来てゐます。政府はいろいろやった。その内容は悪くはなかったが、しかし「新路線」に入らなければ駄目なのです。「新路線」とは従来の「高度路線」がインフレを起し、公害を発生し、資源の過大消費に陥り、他の国に迷惑をかけたのとは違つて、仮にその路線を相当のスピードで走つたとしても、今の四つの弊害は少しも発生しないといふものです。旧路線は四つの弊害を避ける事ができなかつたが、新路線ならそれが出来る。考へ方の大転換がなければこのやうな結構な路線に思ひ当る筈はない。四つの弊害は何としても避けねばならないもの、従つてそれを避ける道は必ずある筈のもの、それを明確に把握するなら相当のスピードで走つても差し支へないといふ事になるので、その間の論理には格別の不思議も飛躍もないのです。本当に必要な感ずるならば、それがちゃんとした社会であるならば、打開の道がない筈がない、といつてゐるのは、そこにもものすごく大事な社会哲学が入つてゐるのです。

では我々の場合の考へ方の転換とは何か。三つありますが、その第一は、戦後の日本は物量の拡大を第一目標と考へ、それさへあれば他の一切の望ましきものはそれについて来る、と考へて来た。この物量第一主義の考へ方は捨てなければいけない。もっともその観念は、財界や政界は別として、世の中はすでに概ね捨てつつあるらしい。

第二は、世界の中における日本の在り方について、新しい思想を持つ事ですが、それは高い次元における諸外国との調和を得るやうにする事です。例へばイギリスに自動車をやみやみに輸出するとイギリスが困るが、それに対して、いいものを安く売るのでから、向うの国民は喜ぶ筈で、結構な事ではないか、それが自由貿易だ、と言って来たが、その考へ方を一段次元を高くすることです。日本はすでに鉄鋼、造船、石油化学といふ「三つの過大産業」を抱へてゐる、それにいま自動車産業、テレビ産業が、イギリスの自動車産業をつぶし、アメリカのテレビ産業をつぶす勢ひで伸びつつある。向うは自国の対応産業がつぶされるのが困るが、日本も輸出が過大になると、その結果としてどうしても「円高」となり、それが不況を深刻化させる事になる。そこで良く考へてみると、お前が困る事は日本も困る事になるのだから、日本は喜んで輸出を制限しませう、といふのが高い次元における調和です。

このやうに、相手にいい事はそのままこちらにもいい、という関係に立ち得る国は、世界にまだあったためしがないのですが、日本国はいまその分際に達して来た。これは世界の各国は



（左から衛藤，木内両先生，小田村理事長）

「平等ではない」といふ思想に通じることですが、現在のやうな平等思想がはびこつてゐたら、世界は決して良くならない。平等といふのは不平等の裏にはあるが、現実でないことに気付かなければいけないので

す。
第三は学問的な事ですが、ケインズ経済学と俗称される現代経済学に対して、相当強度な造反を起さない限り駄目だといふ事です。現代経済学の第一の欠陥は、経済社会を一般社会から、従つて政治からも切り離して考へてゐる事です。

その結果として、経済問題の処理は全世界的に行き詰つてしまつた。第二の欠陥は「計量経済学」なるものに頭を下げすぎてゐるといふこと。第三はケインズが導入したと言はれるマクロ・アプローチに偏してゐる事、例へば不況対策と言へば財政措置と金融措置とによつて経済成長率を高める事以外にはないと勝手に

決めてゐる事がそれです。私はこれらを発想の轉換で打ち破らなければだめだと言つてゐるのです。

かういふ事を言ふに至つたのは、日本がある段階に來た事を意味します。またこれは、日本ならではの事と思ひます。私がこれからやらうとしてゐることは、個々の問題に対する具体策の展開ですが、このパンフレットにある内容は、少なくとも半年間、国民各階層の間で揉み揉んで欲しい。經濟問題といふのはごく低次元の問題ですが、そこで揉みに揉んで出て來るのが、「新日本の誕生」なのです。私に言はせれば、新日本の誕生とは、どこか高次元のところに新しい哲学が出て、そこから來るものではない。これが特に日本的なのですが、ごく末端のつまらない事を言つてるやうだが、背後には十分な哲学があるといふ形で、新日本は生れて來る。どうかこのパンフレットはゆっくりとお読みください。お読みになる途中で気がついて欲しいと思ひますが、この文章は全て旧仮名を使つてゐます。旧仮名で書いてみると、なんとなく文章に味はひがついて風格が上る。戦後の國語政策は、いよいよ轉換期に來たのですが、こんなところに本来の日本が顔を出して來る、それが大きなプロセスの一つとなるわけです。

△質疑応答▽

(問) 今年一月に國語審議會から發表された「新漢字表」には削減された漢字もあり、このや

うな政策自体に問題があるやうに思ふのですが。

（答）新漢字表は、まだ試案の段階ですが、今迄の考へ方すなはち漢字は制限して、廃止の方向へ持つて行く、とする考へ方をやめたといふ点に於て非常に意味が大きいです。この九月から審議会で新漢字表の扱ひを決めるのですが、私は削ったものは全部復活したらいいと思つてゐます。しかしそれは末節で、あの表は何の為かといえますと「一般の人が社会生活をする上の目安」といふものなのです。つまり知らないと不便な字があげてある。知つてゐて当り前、といふものです。だが我々の生活は、俗生活だけではなく精神生活がありますから、それに必要な字といへば、約三千五百字ぐらゐでせう。それを集めた表を別に出すべきだ、といふのが私の意見です。すなはち複数の漢字表を作らうといふ事です。「人名漢字表」のみならず地名用のもの、歴史を読む為のものも必要です。文字とは、過去との付き合ひの為に必要なもので、本当は歴史を読む為のものなのです。古来、日本で普通に使つてきた字は、多いやうでも六千字ださうです。そのうち特に大事な精神生活の分が三千五百字ぐらゐ、六千字といふと中型の漢和辞典に出てゐるものです。

その他に私は、漢字のシステムを理解する為のもの、を創りたいと思ひます。漢字がどのやうな変遷を経て現在の楷書に固まったのか。漢字には四つのカテゴリーがあるので。象形文字は誰でも知つてゐますが、他に二つの字を組合せて作った文字、その組合せ方に二種類あり

ますが、これらの「四つの作り方」を知ってゐるのと知らないのとでは、大変な違ひが出る。漢字はそのやうなシステムとして理解するのがいいので、漢字の教育方法も変つて来る筈です。漢字を子供に教へる時に注意しなければならないのは具体的なものを先に教へて抽象性のある漢字は後にすることです。例へば「鳩」といふ字。「鳩」は「九」と「鳥」から出来てゐますが、子供には「鳥」や「九」よりも「鳩」の方が遙かに覚え易い。「雀」や「鳥」も解り易いが、「鳥」といふ觀念は、抽象ですから、幼児にはむづかしいのです。「九」といふのは数字ですから三才児、四才児には無理です。このやうな着眼に基いて漢字の教へ方を考へて行くのが、これからの表です。「学年配当」をやつてゐるいまのべらぼうな教へ方は、是非とも打破したいと思ひます。

(問) 「目に見えない層」についてももう少し説明下さい。

(答) 例へば最近の日本は、少し良くなったやうにあなた方もお感じになつてゐるかと思ひますが、これが五年前だったら、本当に嫌な日本で、新聞も嫌な記事で一杯でした。これが表層の日本です。ただそれを見て、多くの日本人が嘆いてゐる。それが深層日本です。世の中全体としても表層と深層とに分れてゐますが、深層の日本は一人の中にもある。嫌な行動をしてゐる人でも、その心のどこかではすごく悩んでゐるでせう。自分で行動をしてない、ただ見てゐるだけの人も、ものすごく悩んでゐるでせう。その悩んでゐる自分と悩んでゐない自分とは、別

ではない、共に自分なのです。東洋的道德の大事な柱の一つは「克己」といふ事ですが、克つ自分と敗ける自分とがあつて、敗ける方の自分は、表面に出てる嫌な自分ですが、そのほかに克つ方の、本当の自分がどこかにゐる。自分の中に二人の人間がある事になる。悪い方の自分がいつも目に見えて、本当に悩んでゐる方の中にかくれてゐる事になるのですが、このやうな事を社会全体、日本国、世界にも見よう、といふのです。今の日本ですと見えない日本が悩む、その日本が十分に悩むと、直さうといふ努力がいつか表面に出て来て、世の中は良くなつてくるのです。表面のごちゃごちゃした悪い事よりも、それを受けて誰が、どこで、どのやうに悩んでゐるかの方が、本当に意味ある動きです。正しく悩みを悩む事によって、いつかは必ず表面にそれが出て来て直つて行くと考へるのです。

一方、世の中を見てゐると、本来の日本が、ひよつと顔を出す事がある。私が実感的にそれを見たのは、フォード大統領が来日した時です。新宮殿の豊明殿といふお部屋で宴会があり、テレビ放送となつた。国民はあのやうな情景がテレビ放送になるとは思つてゐなかつたので、びつくりしたのですが、あの宴会の時陛下は、真面目そのものの態度で、フォード大統領に接してをられた。この情景を見た京都のタクシーの運転手が、あとで私に、「この間の放送をご覧になりましたか。陛下は格が違ひますね」といった。かういふのが、深層の日本がさらりと顔を見せた瞬間だと思ひます。だから今、天皇制について多くの人がいろいろ言ひますが、今

ほど天皇制が定着し、国民のものになったことはないと思ひます。

(問) 最近は自分の権利を当り前のやうに主張する風潮が蔓延して来てをります。私達はこれにどう対処していったら良いのでせうか。

(答) 近頃は皆さん権利を主張する。訴訟にまで持ち込む。これでは、裁判官はいくらも足りなくなる。世の中は全く憂慮すべき状態です。しかし私が、にも拘はらず余り心配してゐないのは、国乱れて忠臣出づで、結論が良いところへ行くならば、途中はいくら乱れても平気だといふのが、私の心境だからです。それではかういふ風潮はどうすれば直るのか。それにはその弊害を皆が自覚するところへ持つて行き、深層日本の反応を引き起す事です。これはいけないと皆が思ひ、それが積み重きなつていかなければうまくいかない。どこに解決があるかと言へば、これも「新路線」を歩む事です。新しい日本はヨーロッパの真似ではなく、別なものになるのだといふ事。さうなれば、権利なんてものは、本当はないもので、ただ仮に与へられるだけのものだ、となるのです。かういふ事が解る為にも、新しい日本が生れなければ駄目です。私はいつとも極端な楽観論を主張するのですが、この楽観論は、新しい日本は確かに生れて来るといふ絶対的な確信をもつて、常日頃奮進してゐなければ生れてこないものです。いつまでも考へてゐたのではだめ。良くしようと思はず努力してゐれば、自然とさうなります。今、日本国は新しい進路を発見して本来の日本に立ち帰りつつある。それはヨーロッパ追随をやめた

といふ事です。一口に言へば卒業したのです。もう日本はこれだけ豊かな世の中になったので、こんな物量はいららないのです。物よりはむしろ、いつ何が起っても平気だといふ「安心感」を得ることの方が貴い。物をたくさん持つてゐるといふ事はそんなに大事ではなくなりました。

世界の中の日本人

東京大学教授
衛藤 藩
吉



人の交流・物の交流

日本の歩むべき道

ポランテイア

二本の足（東洋と西洋）

人の交流・物の交流

今日は国際社会の中で日本がどういふ立場にあるのか、これから、どういふ日本人が国際社会の中では望ましいのか、といふお話をさせていただきます。

わが国はこれまで、島国根性だとか、閉鎖社会とか云はれてをりましたが、現在、国際社会における状況は、すっかり変ってしまひました。お手許にございます「人の交流」といふ表を見て下さい。

朝鮮戦争の終りました昭和二十八年（一九五三年）は、まだ日本は占領が解けた直後で、外国へ出て行く日本人は年に一万七千人程度でした。だから、その頃は外国へ行くといふと大変で、「祝」と書いたのほりまで立てて、見送りに来るやうな状況でした。それが今では、一九七五年で一三〇万人。しかも、このうち生産的な意味で、つまり働くために海外に行くのは、だいたい二〇万くらゐ、あとの一一〇万人は観光なのです。それほど外国行きが盛んになりました。

他方、外国人が日本に来る数字、これを査証（ビザ）の発給数で見ますと、実は実際に日本に入国した人数と同じではない。といふのは、日本は西ヨーロッパの国々などいくつかの友好

(1) 人の交流

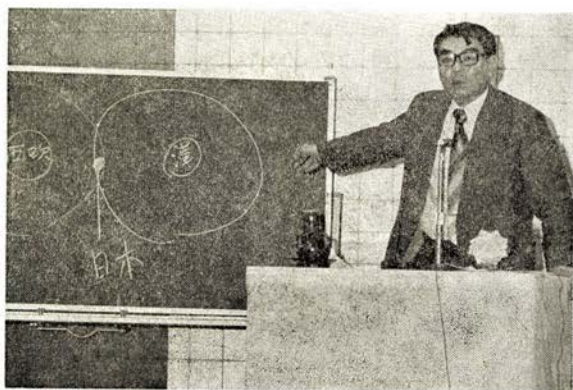
第 1 表

	邦人渡航者数	査証発給数
1953	17,401	
1960	57,154	109,565
1970	655,732	469,685
1975	1,323,717	446,009

外務省『わが外交の近況』より

国と、ビザを出さなくても自由に出入りできるといふ条約を結んでをります。だから、さういふ国から入って来る人たちは、この査証発給数の中にはいってをりませんので、実際は、一昨年（一九七五年）で六〇万くらゐの外国人が日本に入って来たと考えられて結構です。これほど人の交流が大きくなってくると、世界中どこへ行っても日本人だらけといふ状況がでてきます。特にソウル、台湾、マニラなどは、たいへんな日本人ブームです。このやうな現状ですから、もう島国だからとか、日本人どうしだけで附き合つてゐればよいとか言へなくなつてきてゐるのです。

次に、物の交流になるともっと激しい。第二表は、われわれが主要な資源でどれだけ海外に依存しなければならぬか、あるひは、依存するやうになつてしまつたか、といふことを説明した表です。これを見ると、大豆、石炭、木材など、戦前たいへん自給度が高



かったものが、いまは、外国からの輸入を前提にしな
ければ成り立たなくなってしまうのがわかりま
す。ついでに申しますと、このうち小麦とか大豆と
か、われわれの生活にとって欠くべからざるものの大
部分が、アメリカ合衆国から来てゐます。したがっ
て、日本人といふのは、アメリカの農民にとっては、
たいへん大事なお得意さんです。アーカンソーやルイ
ジアナ州などの農業地帯を、私もしばしば旅行する機
会がありますが、年々日本人に対する関心が強くなっ
てゐて、そこで農民に聞くと、「日本人のおかげで、
自分たちはかうしてやってゆける。」といふことをし
きりに言ふわけです。

それから、海の資源について言へば、もともと水産
国日本は、公海自由の原則に基づいて自由な経済活動
をしてきました。戦前は、鰯とかチリメンダコと
か、さういふものを主に食べてゐましたが、戦後だん

(2) 物の交流

(a) 主要資源の海外依存度

第 2 表

(単位：%)

	日 本		アメリカ		西ドイツ	
	65年	75年	65年	75年	65年	75年
小麦	73.9	95.9	0.0	0.0	26.4	8.2
とうもろこし	97.9	99.9	0.0	0.0	95.1	84.1
大豆	88.9	96.4	0.0	0.0	100.0	100.0
木材	24.1	62.4	6.9	4.5	35.7	33.4
鉄 鉱 石	88.2	99.4	36.0	37.6	82.2	93.1
鋼	74.9	89.7	33.5	8.3	99.8	99.7
鉛	62.7	73.5	63.7	30.7	81.8	85.6
石 炭	20.5	75.8	0.0	0.0	0.0	0.0
原油	98.9	99.7	13.9	28.5	87.1	94.4
天然ガス	0.0	64.1	2.8	4.1	0.4	52.7
エネルギー	65.7	92.5	7.3	16.7	28.0	53.5

通商産業省『通商白書』1977年版より

だん収入が豊かになってくるにつれて、マグロなども日常的に食べるやうになり、値段の高い魚の需要が国内で増えてきました。そこで現在では、近海のみならずアジアの海でも獲り尽して、マグロなどは南太平洋、インド洋さらには大西洋にまで出漁するやうになったわけです。さういふ状況を第三表は示してゐます。

さて、以上で私は、世界の中で人の交流や物の交流がたいへん盛んになってきた、といふことを申し上げたつもりですが、実は、これほど国際社会との関

(b) 漁獲物の海外依存度

第 3 表

(単位：%)

		他国の200海里水域でとった割合 (1976)	
ス	ケ	8	5
カ	ニ	6	9
ニ	シ	6	7
カ	ツ	4	7
マ	グ	4	4
イ	カ	3	8
タ	コ	3	6

『朝日新聞』昭和52年1月1日より

係が緊密になったにもかかわらず、わが国の輸出入依存度は非常に低いのです。第四表をご覧下さい。西ヨーロッパでは、西ドイツのやうに国内市場が非常に大きくて資源も豊かだと思はれる国でも、輸出依存度が二三・六%、輸入依存度は一八・三%といふ状況です。イタリア、ベルギー、ルクセンブルグなどは、全くさういふ意味では、外国との貿易で立ってゐる国であると言へます。それに比べて日本の数字をみると、輸出依存度一二・二%、輸入依存度一三・六%となつてをり、非常に国内市場が大きいといふことがわかりになるでせう。つまり、われわれ日本人が消費する量が大いといふことです。だから、日本は貿易立国とかいひながら、実は貿易面での国際社会への露出の度合といふのは、この程度のものだとも言へるのです。

(c) 各国の輸出入依存度

第 4 表

(単位：%)

	輸出(輸出総額) 国内総生産)		輸入(輸入総額) 国内総生産)	
	1965	1974	1965	1974
オーストラリア	12.7	12.7	14.4	13.1
ベルギー・ルクセンブルグ	37.5	53.0	38.1	55.9
フランス	10.1	17.2	10.3	19.9
西ドイツ	15.8	23.6	15.5	18.3
イタリア	12.2	20.2	12.5	27.3
日本	9.6	12.2	9.3	13.6
韓国	5.9	26.5	15.6	40.6
オランダ	33.3	47.4	38.8	47.2
スイス	21.3	26.5	26.6	32.2
アメリカ	3.9	6.9	3.1	7.6

通商産業省『通商白書』1977年版より

同じことは、日本の大学の例をみても言へます。たとへば東京大学の例をとりますと、学部 of 学生のうち、一〇〇人に九九人までが日本人、ないしは日本の教育を受けてゐます。しかも、それが当然のことであるかの如くしてゐる。ところが西ヨーロッパの大学では、外国人が学びに来るといふのは、ごく当然だと考へられてゐるのです。たとへば第一次大戦の前後、本格的に中国語や日本語を教へてゐたライデン大学には、全ヨーロッパ、さらにはアメリカからも学びに来てゐたのであります。

それから、われわれ日本人は日本人だけで付き合ひたがって、外国人と附

き合ふのをたいへん億劫がる。大きなレセプションでもあると、すぐ一角に日本人だけ集まってしまう。結局、現在国際的にも日本人が活躍しなければならぬやうな状況になつてゐるにもかかはらず、まだ半面ではたいへん同質的な、自分達だけのグループを作りたがつたり、大学でも、外国人を受け入れないで、日本人だけの大学にしたがつたりするやうな傾向が、かなり強い。こんな点をみても、まだまだ日本は、国際社会への露出度が小さいといふことを示してゐるのです。しかしながら、これから国際社会で活躍する日本人はますます増えていくでせうし、また増えなければ日本は衰へるだらうと思ふのです。そしてこれからは、国際社会の中で活躍し得るやうな日本人が出てこなければいけないし、特に大学の卒業生の中から、どんどん出てこなければいけません。

日本の歩むべき道

さて、それでは、このやうな現状を踏まへて、これまでの日本と、これからの日本が歩むべき道について、どのやうに考へたらよいかを少し考へて見ませう。まづ、第二次世界大戦前の日本は、軍事力を頼りにしてをりました。国際社会の中に武威を張るといふことが、一つの国家目標であつたわけです。だから、明治四十年代から帝国海軍は常にアメリカを第一の仮想

敵国としてゐましたし、陸軍は世界第一の陸軍国ロシアを、終始第一の仮想敵国としてきたわけです。事実、戦前の国際社会では、軍事力がないといふことはみじめでした。歴史をかへりみても、たとへばスペインが衰へたのはその無敵艦隊がイギリスの艦隊によって破られ、制海権を奪はれたからであります。海を軍事力で押さへるといふことが、戦前においては、世界的に活動するために絶対必要な条件だったわけです。ところが、戦後、日本は軍事力なしにもすごい国際的な活躍をするやうになり、アジア全体を併せた生産額と同じ位の額を、日本は一国で作りに出してをります。さういふ活動が、なぜ海軍力なしで可能になったか。それは、実は現在の国際社会自身がさういふシステムになったからなのです。これは人間の歴史が始まって以来のことです。しかし、それがこれから先続くだらうかといふことになると、これは保障がない。そこで、さういふシステムを保つてゆくために、日本がとるべき方法として、私は次の二つの考へ方があると思ふのです。

一つは、もう一回大海軍を作つて、全世界の海に覇を唱へるといふことです。これは一つの考へ方だとは思ひますが、現在の日本では言ふべくして行ひ得ないことです。何故なら海軍といふのは、たとへば駆逐艦一隻と国会議事堂との値段がほぼ同じといはれる位、非常に経費がかかるもので、ひとたび壊滅した海軍は再び復興することができないといはれてゐるほどです。それにも拘らず、現在ソ連はたいへんな無理をして海軍の拡張をやり、この三年ほどその

成果が上ってきてをります。もはや、アジアの水域において最大の海軍を持つてゐるのはアメリカではありません。アメリカの第七艦隊が六〇万トン、ソ連のウラジオを中心とするところの太平洋艦隊は一二〇万トンを越してゐるのです。このやうに、ソ連はたいへんな無理をして海軍拡張に成功しましたけれども、それだけ生活程度はちつとも上つてゐません。ソ連では今でもうまい肉を買ふのに、仕事をほったらかして列を作らなければならぬ。それほどに、国内の消費を抑へて海軍やミサイル・システムを作つてゐるのです。そのやうなわけで、われわれが無理をして、もう一回世界に冠たる海軍を作ることには内乱でも覚悟しない限り、殆んどできないことなのです。

そこで、日本に残されたもう一つの道といふのは何か。それは日本が、色々な国との友好関係や人間関係を密接にすることによって物や人間の流通がなるべく円滑にいくやうな状況を、非軍事的に作り上げていくといふことであります。現在の日本を取り巻いてゐる状況を考へてみますと、日本を真中にして、米、ソ、中、その他ASEAN諸国との関係が、クモの巣みたいに複雑に絡まって出来上つてゐる。さういふ関係が円滑に動くか動かないかで、われわれの衣食の道が決つてくるといふわけです。そこで何が必要かといふことになる、確かに、国際社会全体としての自由貿易体制を確立すること、それから、日本の商品が国際競争力を持つといふこと、などがあげられるかもしれせん。しかし、同時に私がここで強調したいのは、そ

れぞれの国との関係で、日本が高い信用を得るやうにつとめなければいけないといふことです。信用がないといざといふときに、冷酷に経済関係をぶち切られてしまふこともあるのです。もっともソ連のやうに圧倒的に軍事力が強くて、信用なんかなくたって国際社会は結局は軍事力がものを言ふのだ、といふ確信を持つてゐる国は、それはそれで一つの生き方もしれません。しかし、わが国の場合にはやはりさういふ威しではなくて、日本と取引きした方がよい、日本人と付き合った方が当てになるといふ、さういふイメージを外国に定着させていくことが、クモの巣のやうな国際社会の関係を保つていくのに、大変役に立つのではないかと思ふのです。

さういふ観点からすると、現代の日本人の行動様式は必ずしも国際社会に出かけて行って、高い信用を獲得するのに向いてゐない。どちらかといふと、先程申し上げましたやうに、今までの教育を受けてきた日本人は、日本人だけでまとまりたがるし、大学を出て就職するときにも、寄らば大樹の陰で割に安定した所へ行きたがる。第五表に「国連事務局における日本人」といふ統計がありますが、これを見ると、日本人がいかに人的な面で国際的な割当を満してゐないか、といふことがおわかりになると思ひます。

そこで、私はやはり、そのやうな問題は若い世代の中に、敢へて權威に頼らず困難に取り組まうとか、Challengingな職業に出ていかうといふ気持を持った人が、どんどん増えていかな

世界の中の日本人（衛藤）

(1) 国連事務局における日本人

第 5 表

	分担金順位	現職員数	望ましい職員数
アメリカ	1	504	396~569
ソ連	2	177	208~294
日本	3	70	117~162
西ドイツ	4	67	116~161
フランス	5	139	97~134
インド	15	51	24~28
フィリピン	46	33	5~9
スイス	0	31	0

Annual Report of the Secretary General of the U.N., 1975より

ければ解決しないだらうと思つてゐます。このやうに国と国との関係が密接になつてくると確かに政治家、官僚、経営者などの交流はどんどんふえませうが、本当は底辺で、庶民の間での付き合いが深くなって、そこでの日本人の信用が定着しないと、国際社会の中の日本人の役割といふのは貫徹しないのではないか。これは、私の長年の外国との付き合いの中から生れた一つの哲学です。さういふ庶民間の付き合いが、われわれ日本人には非常に少ない。にも拘らず最近、ぼつんぼつんと面白い現象が起つてきてゐるのです。たとへば、若い青年男女の中に、日本の豊かな生活の中での生ぬるさに堪へきれなくて、もっと熾烈な生活を求めてボランティアとして外国へ出て行く人が、だんだん増えてきまし

た。われわれはアフリカやアジアの色々な国で、さういふ若者に少しづつ会ひ出したのです。

ボランティア

まづ、第一の例を申し上げます。

ケニアの首府ナイロビから西へ四〇〇キロ位行くと、エルドレット (Eldoret) といふかなり大きな町があります。それから更に西の方へ行った、ウガンダとの国境近くの灌木林の中の部落に、それこそ生徒数二〇〇人の小さな学校があります。先生の数も四人くらゐ。そこに長崎大学を卒業した日本人の女性が行つてゐまして、数学や理科など自然科学関係の授業を全部教へてゐるのです。ここでは、ケニア人で数学が出来る者は、ナイロビなどの大都会でいい職業に就いてしまつて、子供に数学を教へようといふやうな人は殆んどゐないのです。だから、さういふ所へ行くと、すぐ学校や村の宝のやうな存在になつてしまふ。例へば雨が何故降るかたちまち説明できる。或は向ふのウガンダの町に電灯がついてゐる、あの電灯がどういふ理屈で成り立つてゐるかを説明できる、それだけでもたいへんなことなのです。彼女は、十畳敷位しかないやうな、土で作つた小さな家を一軒もらつて住んでゐました。そこで、その家に入つて部屋のドアを開けると、すぐその壁に大きな張り紙があつて、英語で「もし何か危急な

時があったら、ここに電話して下さい。」と書いてありました。実は、それはナイロビの日本大使館の電話番号だったのです。彼女の周囲には全く日本人はゐるのです。さういふ所に行った彼女にとってみれば、婚期を逃がす等いろいろな困難を覚悟してやって来たにしろ、たいへんチャレンジングなことだった筈です。そして、ケニアのその村にとっても、彼女がやって来たことは、おそらく村の歴史に残るやうな事件だったでせう。さういふ日本人が出て来ました。

次に、インドの病院で働らいてゐる日本人の看護婦さんの例をお話ししませう。

ニューデリーの空港から砂漠の中を西へ行った小さな町の病院に、三人の看護婦さんが来てゐました。さっきの例と違って三人一緒ですから、何かといふと三人集って色々話をしたりして、さういふ面では恵まれてゐましたが、実は彼女達にはまた別の苦勞があつたのです。それは、インドにはカスト制度があるでせう。インドのカストでは看護婦といふのはたいへんいい商売ですから、上流階級の人になる。ところが、彼女達は小さい時から、汚物の処理などはみんな下層階級の人々にさせてゐますから、絶対に患者さんの汚物をいぢらないわけです。インド、ネパールではだいたいさうです。一方、さういふインド人の看護婦の中にあつて、日本から来た看護婦さんはそんなことを気にしない。患者さんが仮りに賤しい身分の人であつても、親身に世話をしたり汚物も平気で処理する。さうすると賤民の汚物を扱つたといふことで、軽

蔑されて相手にされないわけです。だから、外科の手術でも、日本人の看護婦の方がずっと能力が上であるのに、ドアの所にぼつんと立たされて手術に参加できない、といふやうなことがしばしばあった。インドに日本人の看護婦がボランティアとして行きだしたのは、一九六二、三年頃からなのですが、つい五、六年前まではそのやうに、下層階級の人達と一緒に取扱はれたりして疎外されてゐたのです。だからたいへんつらかった。しかし、患者さんの方から言へば彼女達は天使です。さういふ努力が実つてか、一昨年、私が再びインドに行ったときは、その看護婦さんたちのカスト制度がくづれ出してゐた。インド人の看護婦でも汚物をいぢる人たちが出てきてゐました。これは完全に日本人の影響です。随分つらい思ひをしたけれども、彼女達がとうとうカストをつぶし始めたのであります。

私は、日本の人口からみればごく少数でせうが、今お話したやうなボランティアたちが、外交官や財界の人達、一流の技術者達とは別個の面で、庶民との間に緊密な人間関係を作りつつある、これが、これからの国際関係の基礎になると思ふのです。われと思はむ者はさういふ道で青春のエネルギーを燃焼させてみたらどうか。私は、多くの日本人がさういふ時期を青少年時代のどこかで送るといふこと、これが日本全体を変へる力になると考へてゐます。

さて、国際社会全体をみても、ボランティアの必要性は非常に高くなつてきてゐるにも拘らず、青年海外協力隊やオイスカなど政府や民間のボランティア機関から派遣される青年の数は

わづかです。では、その原因はどこにあるのか。

卒直に言つて、千年来日本は、漢文化圏の端の方に位置してゐたわけですから、漢土を憧れること甚だ激しいものがあつたし、古くからの伝統がある中国に対しては、たいへんなコンプレックスを抱いてきた。文化の周辺に位置する日本人から見ると、漢文化圏の中心は、さぞいい所に見えたのだらうと思ひます。だから今でも多くの日本人、特にマスコミは中華人民共和国に対しては頭があらがない。

同様に、現在の日本のインテリは、どちらかといふと西ヨーロッパ的な教育を受けてきてゐますから、西洋が中心だといふ意識がたいへん強い。私の同僚の教師仲間にも、パリと聞いただけで心ときめいてそわそわする人がゐますし、マルクス主義者で反米主義者の大学教授が、アメリカの大財閥のお金を貰つたり、米政府の援助を受けてでも欧米には行きたいのです。さういったやりかたで留学してゐる人が沢山ゐます。

ところが他方では、「日本はアジアの孤児になるな」とか、「日本はアジアの一部であることを忘れるな」といふことを各種の雑誌に書く大先生に、「ニューデリーに半年講義に行かないか」と言ふと、「暑くてねえ」と言つて行かうとしないし、「ニュージーランドの学会に出ないか」と言ふと、「え？ あんな所で」とか答へる。このやうなことは外務省だって同じです。英独仏語をあやつる外交官は日本には沢山ゐますが、韓国語とかタガログ語とか自由に話せる外

交官は殆んどが通訳生あがりです。私は、このやうなところに、アジア、アフリカの諸国との親密な付き合いが広く行なはれにくい原因の一端があると思ふのです。しかし、われわれ日本人は多かれ少なかれこのやうなメンタリテイを持ってゐるし、私自身もさういふ偏見がないと言へば嘘になる。さういふことを考へますと、われわれは今述べたやうな、二つの文化圏へのコンプレックスからまだ完全に自由になつてゐないといへるでせう。

二本の足（東洋と西洋）

それではいつたい、国際社会で活躍できる日本人といふのはどういふ日本人であろうか。最近は、『国際人のパスポート』とか、『新西洋事情』など色んな本が出てその方面での関心も高まつてゐますが、私は経験的に一番大切なことは、「二本足」で歩む日本人になることだらうと思つてゐます。私は、「アメリカの学者たちの中で、一番尊敬されてゐる日本人は誰だらうか」と問はれたら躊躇することなく、皆さんの殆んどが御存知ないと思はれる角田柳作といふ人の名前をあげます。角田柳作といふ人は群馬県の出身で、大正の初めに無名の一青年としてアメリカに渡つて、コロンビア大学で日本語の助手になり、一九六〇年までそこで日本語を教へられた方です。学位はなく、最後まで講師でした。しかし、ドナルド・キーンとか、川端康



（左から衛藤先生、小田村理事長、木内先生）

成の翻訳で有名なサイデンステッカーなど、日本の文学を外国に紹介することに貢献してゐる人達とか、日本の政治分析で業績をあげてゐるジェイムズ・モーレイなど一流の学者を育て上げたのは、実は角田柳作なのです。

ところで、私は一九五八年に初めて角田先生にお会いしました。その後、いろんな研究会とかレセプションでしばしばお会いする機会があつたのですが、じつと観察してをりますと、角田先生の言動は実に日本的なのです。まづ、先生の英語の会話は義理にも流暢とは言へないのですが、その英語がたいへん丁寧な英語なのです。例へば、英語を生かじりに勉強した者がよく使ふ、「OK, OK」とか、「Yah, Yah」など妙にアメリカナイズした、くだけた俗語は使はず、「allright」と必ずおっしゃる。ものを問ふときども、「May I ~?」とか、「Would you ~?」とか、実に丁寧な言葉

を使はれるのです。しかも先生は、晩年に至るまで自分の教へ子にさへ、このやうな言葉を使つてをられた。

それから角田先生は、たいへん謙遜。日本人といふのは、外国へ行くと一般に無口だと言はれてゐます。しかし、一旦言葉を発すると内容のあることを話すといはれてゐます。角田先生が正にさうなのです。カクテルパーティなどのとき、おしゃべりなアメリカ人の中で、角田先生は黙つてグラスを持つて聞いてをられる。ところが、言ふべき時が来るとゆっくりとした英語ですけれども、非常に正確に意思を表現なさる。だから、角田先生がものを言ひ出すと聞き手が静かになるのです。何か意味のあることを言ふに違ひないと思つてゐるから、みんな注意して聞くのです。

このやうに、角田先生は典型的な明治の日本人であると同時に、己れの身についてゐる持味をアメリカの文化と interface (すり合はせる) することに見事に成功してをられる。それが私の言ふ「二本足」といふ意味であります。日本の文化的な背景をきちつと背負つてゐながら、しかも相手側の文化も理解してゐて、そこでうまく「すり合はせ」に成功してゐる。角田先生は、もし学者としての業績だけを問ふならば、一日本語の教師であつたといふことだけです。しかし、先生が人々に与へた人間的な感化は、たいへんなものであつたと私は思つてゐます。

さういふ日本人が、国際社会の中で望ましい日本人だと私は思ふ。このやうなことを考へてゐたときに、たまたま森鷗外のものを読んで、同じやうなことを鷗外が言つてゐるのに気が付きました。田口鼎軒（田口卯吉）を葬ふ文章の中で、鷗外は次のやうに言つてゐます。

「新しい日本は東洋の文化と西洋の文化とが落ち合つて渦を巻いてゐる国である。そこで東洋の文化に立脚してゐる学者もある。西洋の文化に立脚してゐる学者もある。どちらも一本足で立ってゐる。一本足で立ってゐても、深く根を降した大木のやうにその足に十分力が入つてゐて、押されても倒れないやうな人もある。さう云ふ人も、国学者や漢学者のやうな東洋学者であらうが西洋学者であらうが、有用の材であるには相違ない。

併しさう云ふ一本足の学者の意見は偏頗である。偏頗であるから、これを実際に施すとなると差支を生ずる。……現にある許多の学問上の葛藤や衝突は此二要素が争つてゐるのである。

そこで時代は別に二本足の学者を要する。東西両洋の文化を、一本づつの足で踏まへて立つてゐる学者を要求する。……さう云ふ人は現代に必要な調和的要素である。然るにさういふ人は最も得難い」

これは学者について述べた文章であります。私はこれから世界の中で活躍する日本人は、まさにさういふタイプでなければならぬと思ひます。日本人の中には、たとへば、フランス

に行けばフランス人と同じやうになるのがいいと思つてゐる人がゐますが、それは間違つてゐると思ひます。私達はフランスに行つて、フランス人と同じやうには到底なれません。あきらめた方がいいのです。ぺちゃんこの鼻を高くするのがむづかしいのと同じであります。それよりも、日本人であるといふことと相手側の文化を理解することと、その二本足で立つことを考へた方がよい。われわれは、日本の文化や伝統を背負つて歩いてゆくより他ないし、さういふ宿命を負つてゐるのです。そしてそれを自覚することが、国際社会で尊敬される日本人となる第一歩であると思ふのです。先に述べたやうに、現在のやうに複雑に絡つた国際社会においては、もはや経済力だけで国家間の關係を保つことは出来ません。今日日本に要請されてゐるのは、日本人に対する人間的な信頼や、日本に対するいいイメージが基礎にあつて、その上に経済的、或は政府間のつながりが自然に出来てくる、さういふ状況をシステムとして定着させることです。このことは、多角的な安全保障の面から言つても重要なことです。

そのためには、どうしても世界の中で活躍する日本人が、しかも底辺で活躍するやうな日本人が大量に出て来ることが必要であるし、特に、若い人々のもの考へ方を変へていかなければならない。チャレンジングでスリリングな世界に入つていく行動様式を開発して行かなければならない。みんながエスカレーターに乗るやうに、楽な道を歩まうといふ人ばかりでは、新しい国際社会の中で日本は取り残されてしまひます。

最後に、念のために一言申し添へてをきますが、私は皆さんに、「国粹主義者になれ」といふことを言つてゐるものではありません。相手側の文化を理解するといふことは、決して自分の持つてゐる価値尺度だけで評価するといふことではない。東西両洋の文明が離ればなれに存在してゐるのではなくて、「両文明を「すり合はせる」ところに新しいものが出て来るといふ確信の上で、相手の文化を十分に評価するだけの心の広さが必要であらうと思ひます。角田先生の場合でも、アメリカ人の行動様式や文化を理解するだけの心の広さがあったからこそ、多くの外国人の尊敬を集めたのだと思ふのです。

口で言ふのは簡単ですが、実行してみるとなかなかうまく行きません。しかし、皆さん方みたいに頭脳が柔軟なときに、先程御紹介した若い人達のやうな経験を少しでも増やして行くことが、次代の日本のためには必要なのです。御清聴感謝いたします。

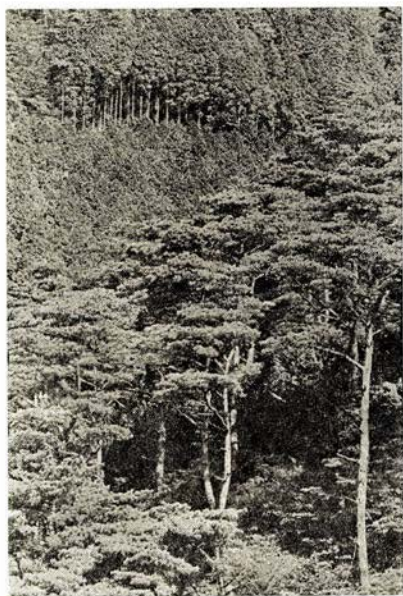


青年研究発表

教壇に立って松陰先生を思ふ

熊本県立松島商業高校教諭

中 園 俊 郎



雲仙の杉木立

只今、御紹介戴きました中園です。私は現在熊本県の松島商業高校に勤務致してをります。教職に就いて今年で四年目になります。まだ経験も浅く、皆様方にお話し出来るやうな勉強も致してをりませんが、今日は皆様方よりも早く、この合宿教室に参加させて戴きました者として、この合宿教室を契機に学び得ました事を中心にお話しさせて戴きたいと思ひます。

私は、大学三年の時この合宿教室に参加させて戴きました。合宿に参加しました当時の私は大学へ通ふ意欲を失ひ、ほとんど無気力な気持で大学生活を送ってをりました。と申しますのは、入学した当時の私の期待とは違つて、開講されている講義には専門的に詳しい知識を得る喜びはありましたが、人の真情に触れて、自分の生き方を見直し、あるひは見出して行けるやうなものに出合ふ事がなかつたからであります。しかも私にとりまして最も張り合ひがなかつたのは、力を合はせてやうに行けるやうな友人がいなかつた事でありました。当時私には様々な問題を話し合へる友人は多くゐたのでありますが、そこでの話といふものがその場限りのものになつてしまつてゐた感じで、いつも物足りなさを感じた儘、付き合つてゐたのであります。クラスメートの中には部活動に、又はサークル活動に熱中する事によつて、自分の道を見出して居た人もありましたが、そのやうな中で私はどうする事も出来ず、只、これではいけない、これでは何も得ない儘、四年間が終はつてしまふと言ふ焦りだけを感じてゐたのであります。

そのやうな時に、大学は違つてゐましたが、高校の時の友人にこの合宿教室の事を紹介されたのであります。私はその友人が合宿の勧誘に来てくれたその日、私に言つて呉れた言葉を今も忘れる事が出来ません。それは、話が友情の問題に触れ、彼が今の私の友達付き合ひの事を聞きました時に、私は「徹夜までして語り合つて呉れる友達が居る」と自信ありげに言つたのであります。これに対して彼は、私の日頃の生活態度を知つてゐたのでせう。「君は、徹夜までして語り合ふと言ふが、語り合つた後、明日からの君の生活が少しでも変はつた事があるのか、君は、友達のやうな振りをして議論を楽しんでゐるのではないのか」と言つて呉れたのであります。

私にとってこの友人の言葉は痛烈なものであります。しかし、何か眼が開かれたやうな気がしたのであります。今迄の友達付き合ひの中で私はこのやうな指摘を受けた事がなかつた丈に、この友人が勧める合宿であれば何か掴めるのではなからうかと思つて参加致しました。

初めて参加致しました合宿教室は、私にとりまして何もかもが新鮮なものであります。一人一人に訴へ掛けるやうにお話し下さる先生方の御講義をお聞きし、又、熱心に耳を傾けて下さる班員の方々に接して、自分が大学で求めてゐたものがここにあつたと思ひました。

多くの先生方のご講義の中で、特に、小柳陽太郎先生の「吉田松陰と久坂玄瑞の往復書簡」の御講義には、既に、私が教師にならうと思つてゐました丈に大きな感銘を受けたのであります。

す。そして、その時の御講義で、私は初めて吉田松陰といふ人物の生き方に触れる事が出来ました。小柳先生が御講義でとりあげられました幕末長州の志士吉田松陰と久坂玄瑞の往復書簡と申しますのは、高杉晋作と並んで松陰門下の逸材と謳はれた当時十七歳の玄瑞が、日頃から慕ってゐた松陰に初めて手紙を出し教へを乞ふたもので、これは玄瑞が松陰の許に入門する契機となったものであります。吉田松陰については、今年NHKの大河ドラマ「花神」にも登場してをりますし、皆様既に御存知かと思ひますが、三〇歳で安政の大獄で処刑された方で、又、松下村塾といふ私塾で多くの幕末、維新の英傑を育てた方でもあります。玄瑞から手紙を貰った当時は、二十七歳でペリーの軍艦で渡米を企て失敗し囚はれの身でありました。丁度国内は開国・和親に伴って国論が沸騰してゐた時でありますから、玄瑞は手紙の中で国内の人心の乱れを嘆い



て、この際、我が国がとるべき手段は外国との妥協でなく断乎たる決断である、即ち、元寇の時、時宗が元の使を斬つて国威を示したやうに我々も又アメリカの使であるハリスを斬るべきであると論じてゐるのであります。

これに対して松陰は一切の社交辞令を省いた実に敵しい批評の返書を与へてをります。書き出しだけ紹介しますと「議論浮泛にして思慮粗浅、至誠中よりするの言に非ず。世の慷慨を装ひ、気節を扮ひて、以て名利を要むる者と何ぞ異ならん。僕深く此の種の文を惡み、最も此の種の人を惡む。僕請ふ粗ぼ之を言はん。兄幸に精思せよ。」

つまり、「君の議論といふのは実に根のないうはついたもので、しかも考へも浅く、とても君の真心から出た言葉だとは思へぬ。世の中にはいかにも自分だけは正しいやうな事を言つて、世の中の乱れを嘆く者がゐるが、君はそのやうな者と全く変はらないではないか、私はそのやうな事を言つたりする人を最も惡む。どうかこれから私が言ふ事を良く考へてくれ」と言つてゐるのです。そして、その後で「君はハリスを斬ると言ふが、ペリーが浦賀に來た時ならいざ知らず、日米和親条約も締結された今となつてはもう遅いではないか、今、君にとつて最も必要なものは、口先の議論でなく着実な生き方である」と言つてゐます。着実な生き方と言ふのは「但だ事を論ずるには当に己れの地、己れの身より見を起すべし。乃ち着実となす。」といふことです。つまり物事を論じる場合、自分が今立つてゐる立場、そのものから考へて行きなさいと

言つてゐるのです。そして、最後に、印象深い言葉であります。「多言を費すことなく、積誠之れを蓄へよ。」と言つてをります。

これに対して玄瑞は直ちに……「辱なくも尊報を賜はり、読了して憤激、一言座下に白すことあらんとす。」との書き出しで激しい反駁の文を書き送つてをります。

この後も手紙の遣り取りは何回か行はれてゐますが、依然としてハリスを斬る以外に今我々が行ふべき事はないと主張して譲らない玄瑞に、松陰はこれ以上論ずことの無駄を知つて、最後に、「それでは君の言つてゐる通りやりなさい」と言つて突き放してをります。

私は、小柳先生の御講義をお聞きしまして、十七歳の玄瑞の気魄に驚くと同時に、二十七歳の松陰が一面識もない少年に対して全力を尽くした手紙を与へてゐる事に心を揺振られたのであります。私はこの時、年齢の差を超えて本気で腹を立てて論じてゐる松陰と、それに全くひるむ事なく所信を披瀝してゐる玄瑞の姿に、何かしら形骸化されてゐない師弟の本当の姿を見る思ひがしたのであります。

そして、今迄自分で描いてゐた教師像といふものが実に甘いものに見え、教師といふ仕事はやり甲斐があるからといったやうな、漠然とした安易な気持ではとてもやれるものではないと、その時痛感いたしました。

私は合宿後も合宿で繋がりが出来た友と、この往復書簡を読む機会を得たのでありますが、

その時私には何故松陰が自分の魂をぶつ付けて行くやうな、あれほどの激しい手紙を遣らねばならなかったのか、その事が心に懸かって仕方がありませんでした。その後、松陰の書き残した物を、友と一緒に、あるいは一人でつとめて読んで参りましたが、ある時、松陰が牢獄の中で囚人達に講義をした記録であります。『講孟余話』といふ書物の中に次のやうな言葉を見付けたのであります。それは、……「妄りに人の師となるべからず。又妄りに人を師とすべからず。必ず真に教ふべき事ありて師となり、真に学ぶべき事ありて師とすべし。」

私はこの言葉に接すると、今も襟を正される思ひがあるのであります。この激しい言葉に出合つた時、松陰が全身から迸るやうな言葉でもって論さねばならなかったものが何であつたか判かつたやうな気がしました。それは、国を憂ふる余り渡米を企て失敗した松陰が、『積誠之を蓄へよ』と玄瑞に書き送つたとき、その心の中では、人を動かし大事を成すには真心を蓄へて行く以外に無いのだといふ事、その事が痛切に思はれてゐたのだと思へたからであります。教職に就いてをります私にとって、いつも心の支へとなつてきた言葉は松陰のこの『積誠之を蓄へよ』の言葉でありました。この言葉は毎日、目の前の移り変はつて行くものばかりに氣をとられ、心を勞しがちになる中で、私に着実な生き方をして行く事の大切さを教へて呉れました。

とはいへ教職に就きました最初の頃は、松陰の『積誠』といふ言葉を自分の戒めとしてをり

ながらも、毎日生徒に接してゐまして、眼の前の生徒に果たしてどれだけのものを伝へて行く事が出来るのだらうか、自分の遣り方はこれで良いのだらうかと、不安や焦りを感じ自信を失ふ事も屢々ありました。しかし私は、二年前この合宿で繋がりが出来た先輩方と韓国を旅行したことがありましたが、その帰りのフェリー上で、対馬付近に浮かぶいか釣り船の何千何万といふ漁火を眼の前にした時、そのやうな気持は氷解したのであります。それは、大海原の無数の漁火の美事な美しさの中に、何かしら国を支へてゐる力を感じると同時に、フェリーの通過には目もくれず黙々と操業されてゐる漁師の姿に、一生懸命に生きてゐる人の力、といふやうなものを感じたからであります。そして、その時松陰の言ふ誠を積み重ねて行くことの意味がしみじみと思はれて来て、地道に精一杯努力して行く以外に無いのだと思へました。

職場にあっていつも思ひます事は、教育の問題にしても、又国事に関する問題にしても、問題を見付け、それを指摘する人は非常に多いのでありますが、真実なものに触れ、あるひは人の心に触れて共感して行く人が如何に少ないかと言ふ事であります。それは、自分の受け入れることの出来る範囲であれば協力したり共感したりするのでありますが、その範囲を越えたら心を閉ざしてしまふからであります。そのやうな中において、毎日人と心を通して行くことの難かしさを痛感するのでありますが、私は、合宿を契機に学ばせて戴いた、友情の喜びや勝れた古典に接する喜び、あるひは勝れた先人の心を偲び、それに繋がって行く喜びは、生徒

にだけは確実に伝えて行きたいと思ふのであります。そのやうな気持が伝はれば、必ずや豊かな心を持って、いか釣り船の漁師の姿に見たやうに、どのやうな所にあつても、自分に受け持たされた場で一所懸命に働いて行ける逞しい生徒が育つてくれると信じるからであります。

どうも、ご清聴有難うございました。(昭和四十八年 熊本商科大学卒)

ありのままのところで感じることに

福岡県大刀洗町立本郷小学校学園分校教諭

味
酒
景
子



島原の港

只今、御紹介いただきました味酒でございます。昨年、福岡教育大学を卒業いたしました現在教職二年目を迎へてをります。

私の職場は精神薄弱児施設の子どもたちを対象とした特殊学級だけでできてゐる学校です。赴任したばかりの頃はたいへんはりきつてをりました私も、日が経つにつれてそれぞれに動きの異なる子ども達を前に、何をどのやうにすればよいのかわからず、おろおろする事が多くなりました。毎日が先生方に励まされる事ばかりですが、心の奥底でしつかりと私を支へてゐたものは、学生時代に参加させていただいたこの合宿教室での体験や、サークルでの輪読、短歌の勉強の折の先生方や友達の言葉でした。

私は大学一年の頃、サークルでのレポート発表の後、お互ひに話しあふやうな時には、よく箇条書きに整理するやうな話し方をしてゐました。「日本は国全体が一つの家で、天皇を父親のやうに慕ってきた。……私達は祖先の考へを大切にしなければならぬ。……だから、私達も天皇を慕はねばならない。……うん、わかった。わかった。」といふ様な調子でした。ところが、ある時、そんな私に一人の先輩が、「それは理屈でわかった事だ。さういふわかり方ではだめだ」と厳しい口調で注意されました。私はその指摘に対して、その時は「理論なしで何が信じられるものか」と反発の気もちで一杯でしたが、年が経つにつれてこの御言葉が大切な事のやうに思はれてきました。理屈でわかるのではなく、自分のありのままの心で感じなければ

ばならない”さう思ふやうになりました。たしかにありのままの心で感じるといふ事は難しい事ですが、今日は、その事について二つの体験を通して考へていきたいと思ひます。

一つは現在担任してをります泉ちゃんといふ女の子の事です。泉ちゃんは現在五年生ですが、昨年担任した折は、些細な事にも感情を爆発させ、椅子を投げては体も裂けんばかりの声で泣き叫ぶ子でした。泉ちゃんが生まれてすぐに、両親が離婚し、二年前まで母方のおばあさんのもとでお母さんと共に暮してをりましたが、そのおばあさんが急死され母親も養育態度に欠ける、本人自身精神薄弱といふことで親元を離れ施設に入つてゐるのです。泉ちゃんのいふところは、このやうな家庭的な不幸からきてゐるやうにも思へました。普通の子ならば全身で両親の愛情を受けられるのに何故この子だけがこのやうなめに合ふのだらう”とかわいさうに思ひますが、その反対に、他の子ども達に危害を加へさうになつたり、ありつただけの悪口を叫んだりする時には私の方が感情のままに叱りつけて、泉ちゃんを腹立たしく思ふ事も多かつたのです。

ところが、翌年の三月、皆で講堂に集つて遊んでゐたとき、ひなまつりの時皆でお供へして食べようと思つて、私が買つて置いたお菓子を泉ちゃんが「お菓子く」と言つてもつてきた事がありました。得意気に先生方にも見せて今にも講堂中にお菓子をばらまきさうです。いくら指導上必要だといへ学校で菓子を与へる事は望ましくないといふ事もあつて、咄嗟に私は

恥しい思ひがいっぱいになって「いかんく」と大声で制止してしまひました。その時は幸ひに泉ちゃんも怒らずにお菓子を持ってかへったやうでした。ところが少し時間経って教室でクラスの子ども達と遊んでゐる時、泉ちゃんが後ろの方から、オルガンの上に体をかがめるやうにして、恥しさうに「さっき、ご・め・ん・ね」と言ふのです。思はず聞きかへす私に「さっき、ご・め・ん・ね」と泉ちゃんは言葉を重ねて言ひました。私はびっくりして「どうしたあ」と聞きました。「あそこで・あけて・ごめんね」と泉ちゃんは一音一音切るやうに言うのです。私は全身がじーんとして、咄嗟にほめてやる事も忘れてゐました。あの子がこんなやさしい言葉を持つていたんだ」と思ひました。そのあとで棚の方を見てみると菓子箱はあわてて投げ入れたらしく棚の中に斜めにちよんとのつてゐました。あつ、いけない——と思つて走つてもどしにきたのだらうか。その菓子箱を見なが



ら泉ちゃんの顔や言葉を思ひ出しました。「泉ちゃん、怒ってばかりゐてごめんね。」と心の底から突き上げてくるものがありました。

その日はちょうど国文研と一緒に勉強してゐる女子学生の輪読会の日で、友達が女子合宿で意見発表をする、そのリハーサルの日でした。私達は皆でその友達の話を聞きそのことばをめぐっていろいろと語り合ひました。私はその話しあひの中で、友達がどのやうに輪読会での勉強を大切に思つてゐるかを知り共に学ぶ喜びのやうなものをひし／＼と感じました。帰りのバスの中では、まるで心の波がふるへるやうにその日一日の出来事が浮んできました。泉ちゃんのこと、輪読会のこと、さうしてゐるうちに以前には気にもとめなかつた子どもたちの言葉が思ひ出されてきました。特にあの泉ちゃんとの距離が急に近くなつたやうで、言葉では表はせないけれども、全身にあの子の思ひが伝はつてくるやうな気がしました。『せいっぱいお父さんやお母さんにかわいがつてもらいたい、甘えたいんだ』、『難しいからしたくないと思つてゐる勉強を私が押しつけるから怒るんだ』私はさう思ひました。

このやうな事を通して泉ちゃんをよく見ると実にやさしい心を持つてゐます。友達が休むと、「○○ちゃんが来とらんけ、さびしかー」と言ひ、時にはワンワン泣きます。おひなさまを作つて「着物を着せようね」と言ふと、「寒か／＼て言やらっしゃるね（おひなさまは、寒い／＼と言つてらっしゃるの）の意」……。やさしい言葉がホロツと出てくるのです。その度

に私は、「ほんたうはこんなによさしい子なんだ」と自分に言ひきかせるやうになりました。

もう一つの体験は滋賀県にあります精神薄弱児施設「近江学園」を創設された糸賀一雄先生の文章を読んだ時の体験です。先生は講演をなさってゐる壇上で「この子らを世の光に……」と絶句して倒れられるまで五十四年の御生涯を精神薄弱児のために捧げられた方です。自伝「この子らを世の光に」、講話集「愛と共感の教育」の二冊の御本の中にはいろ／＼感銘深いお話が記されてゐますが特に私の心をうったのは昭和二十六年十一月十五日、今上陛下が戦災地御巡幸の一環として近江学園においでになった折の事でした。糸賀先生は行幸の前日になって、学園の子どもたちの中の重い精神薄弱の忠ちゃん達に楽団をつくって演奏させたい、その演奏で陛下をお迎へさせたいと思ひつかれます。かうして早速その思ひつきは実現するのですが、当日陛下がおみえになって中庭までおでましになった時、得意になって楽団の指揮をしてゐた忠ちゃんが、突然楽団をストップさせ、陛下の方を向いて「デーイ（礼）」と号令をかけたのださうです。この時の様子を先生の御講話の記録である「愛と共感の教育」の中からそのまま引用させていただきます。

「そしたら、突然、忠ちゃんがストップさせたのです。みんなの楽団にね。白痴楽団というわけです。（笑）。それから陛下の方、私たちの方をスツと向きまして、そして非常に大きなは

りのある声で『デーイ！』って号令かけたのです。ラリルレロのラ行がダメなので、ダ行になって『デーイ！』といって大きな声で号令をかけたのです。七〇人くらいいた報道の人たちみんながびっくりいたしましたして、そのところで全員いっせいに最敬礼をしましたのです。おじいさん、おばあさんたちはもう手を合わせて拝んじゃってるわけなんです。私もリハーサルにないもんですから、(笑) びっくりしまして、どういうことになるんだろうと思ったのです。そうしたら、陛下が窓ぎわまで体をのり出すようになさいまして、みんなに答礼をなさってました。それからもう一度マイクのところまでお帰りになったのです。『なおいれ』がかからないからね。(笑) このままではどうなるかしらんとって、私はちよつと内心ハラハラしてました。ところが忠ちゃんもまた楽団の方に向けて手をあげたのです。タクトをね。それから最初からまた始まった。もう何ともいえないものが中庭いっぱいにあふれたムードがありました。ものすごいさわやかな、新鮮なね。ほんとうに天皇陛下をお迎えしているというような気分がその中にサッと流れてきました。それで、私が陛下の方を向いて、何かいってもらわないと困るものですから—NHKの人から頼まれたものですから—何か説明してご下問をいただくかと思って『ここにおります子どもたちはみんな、落穂寮におります白痴の子どもたちなんぞでございます』と申しあげたのです。そしてふつと陛下の方をふり向きますと、陛下は上を向いておしまいになってね。度のきついメガネをおかけになっていらっしやるのですが、目をパ

チパチなさっている。そこであふれてくるようなものをいっしょうけんめいでご辛抱なさっていらっしやるようなんです。私が申しあげても、こうやって首をふりながら、目をしばたいていらっしやる。私はそれを見ました瞬間に、このお方には白痴がどうの、精薄がどうのなんていうことを説明を申しあげる必要のないお方だなあと思いました。ほんとうに純粋なものを、ほんとうに純粋なお方が純粋に受けとめてくださったんだなあと感じました。『これが教育のコツだぞ』と思いました。もう言葉を必要としない世界なんです。あの白痴の忠ちゃんと天皇様の間に、あの白痴楽団と天皇様との間に通っているものがある。そのまま全然お言葉がないのです。私も説明をやめましたし、陛下も黙ってつつ立って、あおむいておられまして、楽団だけがその中にメロディーといっしょにリズムを流しているのです。しばらくは立っていました。』

この文章を読んで私の心の中に、陛下は子どもたちの外見や能力といふやうなものをすべて包み込んで大切な心と心で子どもたちに触れていらっしやるのだといふ事が少しづつ、そしてしっかりと伝はってくるやうな気がいたしました。

この二つの体験を通して感じました事は、このやうに素直に自分の心で物事を感じる事のすばらしさです。考へてみますと泉ちゃんの「ごめんね」といふ言葉に触れて感動した時は泉ち

やんが精薄児であるとか、知能指数がどれだけだとか、情緒不安定で……といふやうな診断も消えてゐます。泉ちゃんといふ子どもと私といふ人間のかかわりといふ事だけです。このやうな子ども達を専門用語で整理するやうな話をしたり、子ども達の障害を冗談のやうに口にしては笑ふやうな会話をよく耳にしますが、そのやうな理屈を並べていくらこの子どもたちの事を「わかった〜」と思つてゐてもほんとうの子どもたちの心とさういふ人達の心とはかけ離れてゐるやうに思ひます。陛下が近江学園で感じられたやうに、ふるへるやうに相手と心を通はす事……そのやうな心の迫り方こそ、今私が学ばなければならぬ事のやうな気がいたします。障害児の問題を社会制度や体制の問題のみに押しつける前に、それに関はつてゐる自分達の心の至らなさ、接する態度の無神経さを常に反省しなければならぬと思ひます。自分の勉強不足や心の至らなさを棚に上げて子どもを叱る事の多い私ですが、言葉に表はせないでゐる子ども達の気もちを少しでも感じたいと願つてをります。

最後に大変拙いものですが、泉ちゃんのやさしい言葉に触れた時よみました歌を御紹介させていただきます。

買ひ置きし六角の菓子箱とりいだし「お菓子〜」と皆に見せきぬ

「あけていいね」と言ひかけたるに恥かしく「いかん〜」と大声でしかりぬ

子どもらと話してをれば泉ちゃんは小さき声で話しかける
体まげ「あそこであけてごめんね」といどすなほに子はかたりかく
泉ちゃんはかくまでやさしきことのはを心のなかにもちてをりたり
我にむかひ悪口をいひむづかりし子はかくまでにやさしかりしか
子のことは思ひ出しました思ひ出して目のあつくなるこちするなり

御清聴ありがたうございました。（昭和五十一年 福岡教育大学卒）

今上陛下と歴代天皇方のお心

建設省・建築研究所研究員

大岡

弘



島原・眉山

私は、十年前の大学三年の時、初めてこの合宿教室に参加しました。そして、御講義の中で天皇に関するお話をお聴きしました。しかし、その時は別にこれといった感動を覚えませんでした。大学四年の時にも参加したのですが、今から振り返りますと、その時も同様であったやうな気がいたします。

その後、いはゆる大学紛争が東京工大にも起こりまして、それが鎮まった翌々年だったと思ひます。大学院の三年の時に、奥富君といふ友人に誘はれて、三年ぶりに合宿教室に参加いたしました。その時、御講義の中で天皇方のお作りになられた御歌をお聴きし、感動いたしました。今から申し上げます二首の御歌を教へていただいたことが、「天皇のお心」について勉強を開始する契機となったやうに思ひます。

まづ、伏見天皇の御歌です。

いたづらにやすきわが身ぞ恥かしき苦しむ民の心おもへば

伏見天皇は、鎌倉時代の中期に、御年二十三歳で天皇の位に即かれた方です。今で言へば、大学を卒業したばかりの社会人といった御年齢です。伏見天皇が即位をされてからの七、八年の間には、京都、鎌倉、さらに全国各地で大洪水や大地震があひ次ぎ、特に、御即位後の七年

目には、京都の町で大火災が起きてゐます。苦しむ民とは、おそらく、大火災や大洪水、さらに大地震等によって、路頭を彷徨さまよふことになった多くの国民のことを指してゐるのではないでせうか。伏見天皇は、かういふ光景を直接にご覧になられてか、それとも側近の者からの御報告をお聞きになられてか、怠りがちな自らをみつめながら、国民一人ひとりの苦しい生活に思ひを馳せつつ、そのお心を率直に御歌に詠んでをられます。

いま一つは、孝明天皇の御歌でした。

神ごころいかにあらむと位山くらみやまおろかなる身の居をるもくるしき

孝明天皇は、明治天皇の御父様に当られる方で、幕末の激動期に二十年間、天皇の位についてをられた方です。御歌の中の「神ごころ」とは歴代天皇方のお心といふ意味ですし、位山とは天皇といふ位を意味します。この御歌は御年二十八歳の時の御歌で、不平等条約としてその後の日本を苦しめることになる日米通商条約が締結された直後に作られた御歌です。幕府は外国の威圧に屈し、勅許、すなはち朝廷の許可を得ずに、勝手に条約を締結してしまひました。その時、孝明天皇は、歴代天皇方のお心を偲ぶにつけても、また、天皇といふ位にゐるだけでも自分は苦しいと、悲痛な、やるせない思ひを、率直に御歌に詠んでをられるのです。

私は、その後合宿を終へて東京に帰つて来てから、奥富君に導かれるやうな思ひで、天皇方



のお心について、一緒に少しづつ勉強するやうになりました。しかし、何かしら釈然としないまま時を過ぎてくるたやうに思ひます。

さうかうしてゐるうちに、国民文化研究会の先生方が、「新輯日本思想の系譜」といふ部厚い御本をお作りになられ、それが時事通信社から出版されることになりました。大変立派な資料集でしたので、私も奮発して上・下一巻づつを早速買ひ求めました。その中には、神武天皇から始まり、吉田松陰や久坂玄瑞、高杉晋作、それから西郷隆盛といった、さまざまな人物の短歌や文章が時代順に載つてをり、一体どの頁から勉強しようかなと迷ひましたが、結局、歴史上の大きな転換期に御位に即くことになられた明治天皇の、御即位に際しての御姿勢について調べてみようかと考へました。そして、たまたまその資料集に載つてをりました「明治維新の宸翰」といふ文章を読んでみて、大変に感動したのです。

明治天皇は、踐祚されてから一年二ヶ月後に、五箇条の御誓文を天地神明に誓はれました。このことは皆さんもよく御存じのところですが、同じ日に明治天皇は、手紙の形で国民にお気持をお述べになつてをられます。それが、『明治維新の宸翰』と呼ばれるものです。それは、かういふ言葉で始まります。

朕、幼弱を以て、猝に大統を紹ぎ、爾來何を以て萬國に對立し、列祖に事へ奉らんやと、朝夕恐懼に堪ざる也。……………

私は、この文章を読んだ時に、「列祖に事へ奉る」といふ言葉に目がとまりました。すなはち、歴代天皇方のお心を心とされ、そのお心に沿ふことが出来るやうにお仕へする、といふ御姿勢に目がとまったのです。そして、これは凄いなあと思ひました。もうこの世にはをられない天皇方、肉眼では見ることの出来ない天皇方の、そのお心に仕へ奉るといふ言葉は、強い使命感に裏打ちされた、何と心のこもった御姿勢を示す言葉でせうか。私は、歴代天皇方のお心に仕へ奉るといふこの御姿勢こそ、天皇方が代々継承されて来られた大切な根本姿勢の一つであると、現在は考へるやうになりました。

次に、少しあとに出て来る文章を紹介させていただきます。

……今般、朝政一新の時に膺り、天下億兆、一人も其處を得ざる時は、皆朕が罪なれば、今日の事、朕自身骨を勞し、心志を苦め、艱難の先に立、古、列祖の盡させ給ひし蹤を履み、治蹟を勤めてこそ、始て、天職を奉じて億兆の君たる所に背かざるべし。……

私は、この文章を初めて読んだ時、大変驚きました。特に、「天下億兆、一人も其處を得ざる時は、皆朕が罪なれば」といふ文章に驚いたのです。天皇として、何と深い御自覚なのであらうか。そして、咄嗟に、終戦の折の、天皇陛下の毅然とした御態度を思ひ浮べました。そして、この時やっと、私は、歴史を貫く天皇の姿、天皇の御本質とでもいふべき姿について、確信が持てたやうな思ひがいたしました。

御決意や御自覚がいかに立派であらうとも、肝心要の時に、その精神が発揮されないやうでは、それは、伝統精神とは言へません。逆に言へば、肝心要の時に発揮される精神こそ、本物の伝統精神と呼ぶにふさはしい精神であります。歴代天皇方のお心に仕へ奉りつつ、国民一人ひとりの生活に思ひを寄せてゆくといふ、天皇方の伝統精神が、実に美事に発揮されたのが、今からたった三十二年前の、日本が歴史上最大の危機に直面した、あの終戦の時だったので

なかつたでせうか。終戦を決定した御前会議での陛下の御決断と、その後の、国民を思はれる一貫した御行動こそ、この精神の美事な発露であつたやうな気がいたします。

その時、陛下は、次のやうな御歌を作つてをられます。

爆撃にたふれゆく民のうへをおもひいくさとめけり身はいかならむとも

身はいかにもいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

國がらをただ守らんといばら道すすみゆくともいくさとめけり

陛下は、空襲のたびに炎上する東京の街を、どんな思ひで御覧になつてをられたのでせうか。爆撃によつて次々と命を落としてゆく国民、燃え上がる東京の街中を逃げまどふ国民、それら国民一人ひとりの姿に心を馳せられる時、陛下の思ひは、おそらく、胸も張り裂けんばかりのものではなかつたでせうか。そして、国民の破滅を救はうとして終戦の御決心をなさつた時、それは捨身そのものの御姿でした。陛下が国民を守るために捨身の御行動をとられたところ、歴代天皇方が継承して来られた伝統精神の美事な顕現でありましたし、國がらを守る”ことの、具体的証しだったのでせうか。

陛下は、終戦直後、マッカーサー元帥に会いに行かれました。それから十年後の昭和三十年に、お二人だけの秘密とされてゐた会見内容が、マッカーサー元帥の口を通して公表されま

した。陛下は、その時、かう言つてをられたのです。

私は、日本の戦争遂行に伴ふいかなることにも、また事件にも全責任をとります。また、私は、日本の名においてなされた、すべての軍事指揮官、軍人および政治家の行為に対しても、直接に責任を負ひます。自身の運命について貴下の判断が如何様のものであらうとも、それには自分には問題でない。私は全責任を負ひます。

これを聞いたマッカーサー元帥は、興奮の余り、陛下にキスをしたいといふ思ひに駆られたことを告白してをります。そして、続けて次のやうに述べてをります。

もし、国の罪を贖あがなふことが出来れば、進んで絞首台のぼに上ると申し出られた日本の元首、天皇陛下に対し、占領軍司令官として私が寄せる尊敬の念は、その後、ますます高まるばかりでした。

このやうな事実を知るにつけ、また、神奈川県御巡幸を皮切りに、次々と全国津々浦々まで御巡幸になられ、国民生活窮乏さなかの最中、敗戦でうちひしがれた国民を励まして歩かれたこと等

を思ひ浮べるにつけ、国民のことをまっ先にお考へになられる、無私の御精神、献身的自己犠牲の御精神、殉教者的御精神が、強く仰がれる思ひがいたします。最悪の事態に、最高のお心を發揮されたお方、それが、日本国民統合の中心であられる、天皇陛下だったのでなかつたでせうか。そして、それは、歴代天皇方のお心に深くお仕へして来られたが故に、初めてとることのできた御態度ではなかつたらうか。私には、さう思へてなりません。

御静聴ありがとうございました。（昭和四十四年 東京工業大学卒）



祖国と慰霊

△合宿三日目の夜は祖国のためにいのちをささげられた祖先の御霊をお迎へして、慰霊祭が厳粛に執り行はれる。その詳細については「合宿教室のあらまし」の中に記されているが、ここに掲げるのはその慰霊祭に先立って行はれた三人の講師による所感発表の記録である▽

慰靈と天皇陛下

福岡県立嘉穂高校教諭

小野吉宣



小浜の夕日 1

慰霊のお話にはいりません前にまづ天皇陛下がご訪米されたとき、アメリカ人が、非公式の場と公式の場とわけて、陛下をどのやうに見てゐたかといふことを話してみたいと思ひます。

最初の非公式の場に於て、ニューヨークのシスタジアムにフットボールの試合をご観覧に行かれたときに、アメリカの人達がどのやうに陛下をお迎へしたであらうか。ニューヨークタイムズの昭和五十年(一九七五年)十月六日号をみると、大観衆がみまもる中、両陛下がフットボール場にお着きになった。陛下が帽子を振つて会釈なされた。さうすると天皇陛下を拝見した観衆の中の一人が次のやうに言ひます。

You got a lot of guts coming here after everything that's happened. Hat's off // 「あらゆることが起つたのちに」すなわち、いろんなことを乗り越えたのちに、「ここアメリカに來られてゐるとは、なんとガッツのある方なんでしょう。」アメリカ人の心の中にフロンティア・スピリットとか、パイオニア・スピリットといふのがありますけれども、ガッツといふのは、そのやうなものの根底をなす精神です。それで氣骨とか根性といふやうに訳します。そのやうな「氣骨・根性のある方だな」と大声で一人の観衆が叫んでお迎へした。そして「ハツツ・オフ!」—脱帽!—と言つた。それに呼応して観衆全部がわあ!と歓呼の声を上げて立ち上つて脱帽のうへ、天皇陛下をお迎へした。陛下は再度手をふつてお答へになつた。心の解き放たれた非公式の場で、陛下をどのやうにお迎へしたか。彼等は「ガッツのある方であるが

故に脱帽!!」といってお迎へしたのです。

次に公式の場に於て、彼等は陛下をどのやうにお迎へしたかであります。皆様御存知のやうに陛下はアーリントン墓地におまゐりになりましたが、そこには、日本軍と戦つて倒れた兵士の御霊がまつられてゐます。その墓地に陛下がご参拝になったとき、アメリカ側がどのやうにしてお迎へするのか、私はその点に最大の関心をよせました。アメリカ軍は何発の礼砲を打つて陛下をお迎へしたでありますか。十九発であつた場合は総理大臣クラスであり、二十一発は元首を迎へる礼法であります。何発鳴るかによつて、彼等が天皇がいかなる地位にあると考へてゐるか、一番大切なポイントですから注意を引くところです。日本に於ては憲法第一条に、天皇は日本国の象徴である、と唱はれてをりますが、象徴といふものが対外的にどのやうに受け止められてゐるかここで判定されるわけです。ところがアメリカは、厳肅な慰霊の場に於て、二十一発の号砲を打ち鳴らし、元首として迎へたのでした。陸、海、空軍が並んでゐる。儀礼隊がささげ銃をする。ドラムが鳴り哀調を帯びたラッパが鎮魂譜を奏する中に、天皇は元首として心をこめてアメリカ軍兵士の霊を慰められたのです。かうして宣戦布告をした、かつての大元帥が三十年を経て、元首として迎へられ、敵国兵士の霊を慰めるといふ世界史上類のない崇高な場面が現出してゐたのです。

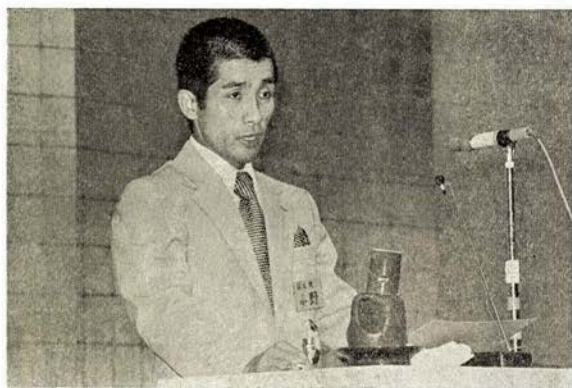
片や日本の方で、日本のために尽した人に対しては、どのやうな慰霊がなされてゐるかとい

ふことについて考へてみたいと思ひます。

昭和五十年十一月二十一日、御訪米から帰られて一カ月後ですが、天皇陛下が靖国神社におまゐりされることになりました。すると、いつものやうに、反対派―新旧キリスト教団とか、日教組、総評、社会党、共産党―が反対の声明を出した。マスコミは、ここぞとばかり大々的に報道する。ところが一方反対派の声明を受けて宮内庁のはうは、次のやうな声明を出したのです。

「今春、神社側から参拝の要請があつた陛下の私的行為である。」

これは公的な行為でなくて私的な行為であるから反対するのはどうか止めてくれといつて反対派をなだめてゐるにすぎません。大多数の日本人は、陛下が靖国神社に参られるのに、反対してゐないはずですが、宮内庁は、陛下がどのやうなお気持でご参拝なされるの



かといふことを伝えるのではなく、反対派の鋒先をかはすために私的行為であるとのみ言った。それに対し社会党は、「この参拝は、天皇の私的・行為の名のもとに行なはれるとしても最近の一連の政治の反動化の動きからみて、わが党はこれを見逃すことは出来ない。」と言ふ。

ここでもう一度思ひ起してほしいのは、これよりひと月前には、アメリカは、二十一発の礼砲を打ち、天皇を元首としてお迎へし、陛下はアメリカのために戦った人の霊を慰められたといふことです。

社会党とか新旧キリスト教団はあたかも戦死者の慰霊は人道に反してゐるやうに言ふ。もしさうなら、どうして、陛下が元首としてアメリカ軍兵士の霊を慰められることに、反対声明を出さなかつたのか。日本での慰霊は許されない。外国人に対する慰霊は許されるとでもいふのか、そんな筋の通らないことではいけないと思ふのです。ともあれ国のために戦った人をおまつりするといふのは、いづこの国に於ても大切になされてゐることだといふことを銘記しなければなりません。

○

天皇とは大統領や首相と違ひ、即位されて以来、日本の国の運命を自分の運命として念じ続けてをられる方なのです。その天皇が戦死者をどのやうな気持ちでお偲びになり、どのやうに深く念じつけてをられるか、以下陛下がお詠みになつた御歌を通してお偲び申し上げたいと思

ひます。

靖国神社九十年祭（昭和三十四年）

このそのちへたる宮居の神々の国にささげしいさををぞ思ふ

「このそのちへたる」すなはち靖国神社が創建されて九十年を経た。「宮居の神々の」その神社にまつられてゐる神々、陛下は、そこにまつられてゐる人を今日も神々と見てをられる。その人たちが「国にささげしいさををぞ思ふ」、「いさを」とは、日本国が一筋の命を保ち続けるために、自分の尊い命を捧げてきた人たちの崇高な行為である。そのやうな方々のいさをといふのが作者の眼前にありありと甦へてゐる。「いさを」をたてた方々と陛下が直接に対話をかはしてをられるやうなおもひにさそはれます。

八月十五日那須にて（昭和三十年）

夢さめて旅寝の床に十とせてふ昔思へば胸せまりくる

「夢さめて旅寝の床に」この御言葉から拝されるのは陛下は、公務から離れてをられる時も四六時中、日本国のことに思ひ致してをられるのだといふことです。そして「十とせてふ昔」といふのは昭和三十年から十年昔ですから終戦の年です。自分の身はどのやうになつてもいいからいくさを止めるんだといふ捨身のおもひからいくさをお止めになった。あの時のことを思

ふと自分の胸は迫ってくる。あふれる涙を留めること知らぬが如く胸迫ってくるよんでをられます。

「胸せまりくる」といふおことばを、ぼくの体験からお偲びしてみますと、昨年昭和五十一年の六月十九日に僕のクラスの生徒の小平洋司君が喘息で突然亡くなりました。お葬式にクラスの生徒と共に参列したわけですが、棺ひつぎに入った小平君が、霊柩車に入れられて家の前を出る時、雨が降って来ました。一人息子を亡くされたお母さんが「洋司」と言って足袋はだしのままで霊柩車の方にすがりつくやうに走り出されたのを覚えてゐます。その後毎朝教室で出席をとりますけれども、「小平」と呼びかけても小平君は返事をしないのだと思ひ胸がつまるやうな思ひをしつつ過してきました。三月一日、卒業式の日、クラスの生徒が小平君の遺影をだいて卒業式にのぞみました。式後、小平家に遺影をお返しに行きましたら、お父さんとお母さんが迎へられ、「今日は洋司のために卒業式をして下さりありがとうございます」と、と本当に我子が生きてゐるやうに言はれました。そして「今日は洋司の卒業式を先生や皆さんにしてくださいましたので、私は洋司に鯛を買って赤飯をあげて卒業式をお祝ひしたい。」といはれましたが、僕はその時、一人息子を亡くされたお母さんの悲しみが自分の悲しみのやうに思へ胸せまる思ひが致しました。他者の運命が自分の運命そのものとしてせまってくる時に「胸せまりくる」と言ふ思ひがする。そのことを自分の体験からひし／＼と感じました。

陛下は「胸せまりくる」といふ御歌を他にも詠んでをられます。

千鳥ヶ淵戦没者墓苑（昭和三十四年）

国のためいのちささげしひとびとのことを思へば胸せまりくる

稚内の公園にて（昭和四十三年）

樺太に命をすてしたをやめの心を思へば胸せまりくる

「たをやめ」といふのはうら若い乙女のことです。終戦後樺太にソ連軍が攻めてきた。艦砲射撃を受けてる中、「たをやめ」は真岡電話局で最後までキーを打ち続けて自分の職場を守り、死んでいったのです。その人たちのことを陛下は胸せまりくる思ひで偲んでをられたのです。

天皇陛下は国にいのちをささげてきた方々の悲しきいのちを我いのちそのものとして「胸せまりくる」ほどに深くはげしく受けとめてをられます。いまから慰霊祭が始まりますが、慰霊の庭べにおりてこられる御霊を、大御心をしをりとし、おまつりさせていただきたく念じてをります。（昭和四十五年 西南学院大学卒）

世界各国の戦死者をまつる聖地

高千穂商科大学助教授

名

越

一荒之助



小浜の夕日 2

韓国の聖地——国立墓地

私は昭和四十二年に、国民文化研究会から派遣せられて、学生諸君と韓国の各大学や中高校を訪問しました。この合宿教室で運営委員長をやつてゐる片岡君や、副委員長の志賀君などが一緒でした。その時ソウルの郊外にある国立墓地に参拝しました。韓国にとって最も神聖な場所は国立墓地で、陸海空三軍が交替で衛兵に立ち、独立以来尊い命を祖国のために捧げた人々約五万人を合祀してゐます。

日本人として最高の礼を表すためには、やはり日の丸を掲げて参拝すべきだと思つて、当時九大四年生の片岡君が日章旗を掲げて先頭を歩きました。ところがちよつとしたトラブルが起りました。衛兵からストップをかけられたのです。司令が近づいてきて、団長の私にかう言ひます。「韓国の聖地に日本の旗を掲げて行進するとは何事か。韓国動乱の時、日本は協力せず、金もうけをしただけではないか」その頃は日本と韓国との間に国交が結ばれた直後であり、韓国では反日感情がまだ根強く残つてゐました。そこで私は通訳を通じて、祖国のために尊い命を捧げた方々に対して、日本人として最高の礼をつくしたいのだと話しました。司令と私の間ですこしやりとりがありました。彼は了解して日の丸を掲げること認めてくれました。

国立墓地の中央には顕忠塔といふ高さ五十メートルぐらゐの塔があり、その背後に墓標が約

五万並んで、スロープ一帯が清浄な雰囲気をかもし出し出してゐます。右側奥には李承晩元大統領の墓地があり、最近では朴成熙大統領夫人の墓も建立せられ、韓国動乱の戦死者たちの墓と共に、国民的聖地として仰がれてゐます。

韓国の全羅北道に全州といふ所があつて、その完山のふもとに「忠魂不滅の塔」があります。そこには戦死者数百の墓地が山麓一帯にあつて、中央の塔に「忠魂不滅」と漢字で刻んであります。その横に碑文がありますが、これはハングル文字で書かれてゐます。私とこの合宿教室で同室になつた順天堂大学の鈴木先生の翻訳の文を紹介しますと、「ここは民族の靈魂がたちこめた場所である。祖国と共に永遠に歩むそれらの靈よ。日と月と共に故国を守護されんことを」と書かれてゐるのです。

この碑文の中にある「たちこめる」といふ言葉は、霧がたちこめるといふ用語をそのまま使つてゐます。韓国人の靈魂に対する受け止め方は、霧のやうに立ちこめるものと思はれるといふのが、翻訳者鈴木先生のコメントであります。

ソ連の場合

そのほか私は昭和四十九年に文部省から派遣せられ、各国の教育事情視察のために、世界を

一周してきました。タイといふ国は外交がうまくて、今まで戦争にまき込まれずに独立を維持した国ですから、戦死者をまつる聖地はありませんが、ソ連にはどこに行っても聖地を見かけます。モスコの無名戦士の墓は、クレムリンのほとりにあります。クレムリンが余りにも壮大な規模であるために、無名戦士の墓は見落され勝ちです。わずか三坪ばかりの大理石が敷かれ、その中央に永遠の灯が燃えてゐます。そこにも碑文が刻まれてゐて、「無名戦士よ、あなたたちの偉業は不滅である」と読めます。

そのほかレニングラードなどは、独ソ戦中最大の激戦地で、英雄都市の称号を持つてゐます。この街は至る所に無名戦士の記念碑があり、どれにも碑文が刻まれてゐます。どれも大同小異ですがその一つ。「あなたたちは戦争といふ恐ろしい日々を美しく生き、輝かしく死んでいった。この碑の下には犠牲者でなく、英



雄が眠つてゐる、貴下らの祖国への献身は子孫に感謝され、貴下らへの回想は今後悲しみでなく、羨望を生み出すであらう」

ソ連は私の見た限り、世界で最も祖国主義の徹底した国の一つですから、戦死した人々を讃へるばかりでなく、戦死者の後に続くことを教へ、戦死者を羨望さへする国であります。「教へ子を再び戦場へ送るな」といふスローガンを掲げた日教組の先生方は、「軍国路線を歩む」ソ連の教育を見て何と説明するでせうか。

そのうへソ連の無名戦士の墓には、ピオニール（少年共産同盟員、十一歳から十六歳まで）の少年たちが、交代で衛兵に立ってをります。彼らは通称マンドリンといふ六十連発銃を持って、それには実弾をこめて、不動の姿勢で墓を守つてゐます。「なぜ実弾をこめてゐるのか」と聞けば、「その方が緊張感が出てくる」と答へます。

タシケントのピオニール宮殿を訪ねた時にも、驚きました。その廊下に沢山の写真が飾つてあるのです。それはピオニール出身の戦死者たちで、その写真の下には「我々は戦争をいとはない、死をも恐れない」と書いてあります。

このソ連で大変ほほえましいと思つたことがあります。各地の無名戦士の墓の上にはいつも花束がたくさん供へてあります。それは結婚した新郎新婦が連れだつて、式後必ず無名戦士の墓におまゐりするしきたりが、いつの間にかできたからであります。「私たちがこのやうに結

婚することができたのは、戦死された方々のお蔭である」といふのが、結婚したソ連の若者たちの言葉でありました。

イートン校の場合

その他、イギリス、フランス、スペイン、アメリカ等の实例も紹介したいのですが、時間がありません。詳しくは拙著「新世紀の宝庫・日本」（日本教文社刊）の最終章を読んで頂くとして、一つだけイギリスの名門イートン校の場合を、レジメにも書いてありますので、紹介します。この古い校舎の学校には、二つの額が廊下に掲げられています。一つは第一次大戦のもの、一つは第二次大戦のもので、どちらもイートン出身の戦死者の名前が、金箔で書かれています。その名前の上には戦死者に捧げる敬虔な祈りが詩文となって記されてあります。

「ここには涙も怯懦も軽蔑も非難もない。ただ高貴なる死によって示された公明正大な精神と生き方が、我々の魂を鎮めるのみである」（拙訳）

日本の精神的支柱は何か

この合宿では、最初に講義を頂いた山田先生によって祖国とは何か、学問とは何かがとりあ

げられ、その後班別討論においても天皇問題が中心になったやうであります。日の丸を毎朝掲揚し、君が代を吹奏し、昨夜行われた今林君の古典講義では、松陰の生き方の主題とも言ふべき至誠に肉迫されました。このやうに日本人の精神的支柱に触れる課題が次々と提示されてきてゐます。これらはいずれも現代の日本の教育で避けて通っている事柄ばかりであります。これから更に慰霊祭が取り行はれますので、各国は祖国のために「地球よりも重い命」を捧げた人々をどのやうにまつり、教育の対象にしてゐるかの例をあげて、現代の日本と対比してみようと思ふのであります。

ただ今小野君も紹介しましたやうに、陛下はアメリカに行かれると、アーリントン墓地に公式参拝されますが、日本では戦死者をまつる靖国神社に公式参拝されることができなくなつてをります。靖国神社は小・中・高校の教科書に登場せず、戦死者を讃へるやうな言葉は一行として出てきません。靖国神社に外国の海軍（西ドイツ、ブラジル、アルゼンチン、フランス等）は集団で参拝し、花輪を捧げ、時に自国の国歌と君が代を吹奏します。しかし日本の自衛隊は集団で公式の参拝はできません。そのため靖国の神々は、外国の軍隊の演奏する君が代は聞いたことはあるが、日本の軍隊の吹奏する君が代は聞かれたことはないのであります。

戦後教育を受けた皆さん方の中で、「人民の人民による人民のための政治」といふ言葉を知らない人はをりますまい。これはリンカーンがゲティスバーグで演説した最後の一節といふこともご存知であります。だがそのリンカーンが、ゲティスバーグ演説で強調したことは何か。演説の結びに四ヶ条をあげてゐます。第一に戦死者が、身を捧げた偉大な精神に対して、献身を呼びかけてゐます。第二に戦死者の死を無駄に終らしめないやうに決心しようと訴へ、第三に神のもとにアメリカ精神の再生を期待してゐます。そして、最後に「人民の人民による人民のための政治」を述べてゐるのであります。（岩波文庫「リンカーン演説集より」）リンカーンが強調しなかつたことは、最後の言葉よりも、むしろ、第一から第三までに述べた内容ではないか。この三つが確立されてはじめて、「人民の人民による人民のために」といふアメリカン・デモクラシーは、うまく運営せられるといふやうに理解するのが自然であるやうに思はれません。

もしリンカーンが現代の日本に生きてゐたら、祖国のために尊い身命を捧げた戦死者の偉大な精神を忘却した日本を、何と批判するでせうか。祖国の精神的伝統を形成してきた先人たちの業績と、日本の心の探求を忘れた現状を何と指摘するでせうか。現代の教育はリンカーンが最も訴へたかつた重要な問題については触れることをせず、「人民の人民による人民のための政治」といふ語呂合せだけをもて遊んでゐるやうに思はれてなりません。

慰霊祭と遺稿集

これから慰霊祭がとり行はれ、その意義については宝辺さんからも語られると思ひますが、私が指摘したいことは、他の独立国にあつては、祖国のために献身した戦死者に対して、どの国も最高の礼を尽しておまつりし、その意義を次代を背負う青年たちに教へてゐることであり、それはリンカーンの有名なゲティスバーグ演説からも指摘できるのであります。これからは行はれる慰霊祭に、心をこめて臨みたいと思ひますし、この合宿教室は慰霊祭と共にあつたことも附け加へておきたいのであります。

そして慰霊といふことは「祭」だけに終らせてはなりません。亡くなった先人たちは、どのやうに考へ、どのやうに行動したのか。書き残した文章を通じて、その魂を偲びたいのであります。私たちの会につながる先輩たちの遺稿集完成の議題が、昨年夏の合宿教室（佐世保）の深夜の集ひで決定を見て、この一年間有志の間で編集が進められました。いまここにお見えの加藤敏治さん、香川亮一さん、宝辺正久さん、関正臣さん、そしていま青森にをられる長内俊平さん、そして私、この六人が中心になって取り組んでまゐりました。昭和五十三年の三月頃には、「国文研叢書」として発行の運びになると思ひます。慰霊祭を通して祖国のために献身された諸先輩の魂に参入する経験をされると共に、遺稿集をひもといて先人の心のひだに直接わ

世界各国の戦死者をまつる聖地（名越）

けいって頂きたいのであります。

亡き友を思ふ

寶
邊
正
久



小浜の夕日 3

まもなく慰霊祭が始まりますが、慰霊祭に臨む私の心持ちを申し上げてみたいと思ひます。合宿開会式の「黙禱のことば」にありましたやうに、戦時平時を問はず、祖国日本の為に尊い生命をささげられたすべての祖先のみたまをお祭りするのが、これから始まる慰霊祭ですが、私にとって忘れがたい御祭神は戦時中にいのちを捧げた友人達であります。

この方々の遺稿集編纂のことが漸く進んでゐることについては先程名越さんからお話がありました。その編集委員の一人、青森の長内俊平さんが今年はどうしてもこの合宿に行かれないといつて、歌を二首書きおくってくれました。

本州最北端大間おほまのみ崎にわれ立ちて友らの上を思ひやるかな
友ら住むくにのきしべを洗ひこし対馬暖流川なし流る

長内君は津軽海峡を前にして、九州から流れてくる暖流を見てゐるのであって、「友らの上を思ひやる」彼の心が波打つてゐます。このやうな歌をよみますと、「友よ、友らよ」と呼びかけてゐた戦時中の私達の学生生活が思ひ出されてならないのです。昭和十五年から十八年にかけての頃ですが、丁度皆さん方と同じ年頃に、ここにいらつしやる小田村先生、夜久先生、高木先生達からこの合宿と同じやうな合宿で御指導をいただいたわけです。

当時のわが国の事情は一口ではとても申し上げられませんが、思想戦といふほかにはない支那事変の行き詰まりになやみながら、やがて米英に対する開戦を迎えます。日本の青年の多くがさうであつたやうに、私達は全身を捧げてこの国を守らうと努めました。しかし国全体が大戦に臨む情況においては、積年の思想的禍根が事毎に表面にあらはれてきた感じでありまして、公（^{オホヤケ}国家全体）に尽すといふ政治的大義名分にかくれて私（^{ワタシ}やむにやまれぬ私の心）を理屈の上で否定してしまふといふ風潮が世を蔽つてゐました。乏しい経済的やりくり心血をそぐことよりも、経済体制の改革を呼号することの方が先行し、歴代天皇の国家保全と東洋平和にかけられた御心におこたへしようとはせず、私議を以て殊更に戦争目的を紛糾させるやうな論調が当時の綜合雑誌誌上を麗々しく賑はせたものです。しかもこのやうな言論は大学内の思想的状況と緊密な関係があり、これは戦争遂行政策のための根源の力を涸渇せしめるものであると実感してゐたので、日本全体はまさに吹き払ふべき重い暗雲の只中であつたわけです。私達は国文研の前身で「日本学生協会」といふ全国的学生運動につながつて、日本の歴史的無窮生命に帰依没入した多くの先人達の心情を学んでをりましたが、当時はまだ国土こそ戦場にはなつてゐなかつたものの、未曾有の危局の中で、一方は表面に国家至上の思想と政策が氾濫し、内実は歴史的祖国感覚が崩壊しようとしつつあり、私達はお互ひの胸中に祖国防護の決意と憶念の心を確かめ励まし合つて、「友よ、友らよ」とよびかはし合つたのであります。



実はこの合宿に私は親子で参加させていただけをります。つまり私とあなた方は年齢的には丁度親子の開きがあるわけですが、この合宿で祖国日本の無窮のいのちを共に学び、同時代に生きてゐるこの時代を共に感じ、さうして共に手を取り合つて日本の文化伝統を守つてゆかうとするわけですから、かうして壇上から皆さんに向ふと、同じ国を思ふ「友だ」といふ実感がふつふつと湧いてまゐります。年齢の開きを超えて、日本の運命に等しく責任を負つてゆかうとする実感がここにある。これから「みたま」の前に、この実感を心にとめ共に心を一つにして額ぬかづくことが、慰霊祭に臨む心構への一つであらうかと思ひます。

それからさきほど小野君が、戦死した人達を悼まれた今上陛下の「胸せまりくる」といふ切々たるおことばでお詠みになられたお歌を拝誦されましたが、明治天皇にも戦死者を詠まれた数多くの御製がございます。日露戦

争の終った翌年、明治三十九年には

国の為いのちをすてしますらをのたま祭るべき時ちかづきぬ

といふ御製がございます。明治天皇は「ますらをの魂」は今もなほ国を守るであらうとも歌はれ、秋の空をながめるにつけ、またはからずも夜をふかしては戦歿者の上に思ひを寄せてをられますが、この御製は靖国の祭の近づいてくる、それを待たれる緊張のお心持ちをお詠みになったもので、天皇のこの溢るるばかりの御心と御緊迫のしらべは、私達にまっすぐに、切々と伝はってまゐります。慰霊祭を迎へる時にいつも思ひ出される御製であります。

さて、今日の慰霊祭の御祭神の一人として私が心に念ずる故松吉正資君のことを少し申し上げます。松吉君と私は旧制山口高校以来、東大を経て出陣入団から部隊編成で別れるまでの約四年間を一緒に学び行動を共にした仲でありましたが、彼は昭和二十年五月、特攻出撃して沖繩海上に戦死しました。松吉君の遺した歌の中から「友に」と題する連作を読んでみます。

(短歌のすすめ“二四九頁参照)

友に

なつかしきふるさとの浦船出してみたとゆく日近づきにけり

たづね来る友もなければひとり居てその日を待たむさびしけれども

また会ふと知られぬ友のみなさけをしみじみおもふこの時にして

数ならぬわれを上げます友どちのなさけにこたへいさみてゆかむ

大君の大みめぐみと友の恩おもへばこの身惜しからめやも

昭和十八年の秋、神宮外苑で学徒出陣式が挙行されましたが、彼はこれには参加せずまっすぐ故郷に帰ったと思ふ。この合宿に松吉基順君が毎年参加してゐますが、これは松吉君の弟でこの二人の故郷といふのは、山口県の大島といふ瀬戸内海の島です。秋は、南に向いた山の斜面には密柑の熟れてゐる暖い島で、ここで十二月の入団までの一ヶ月位を過ごしたわけです。丁度、満で二十才の頃ではなかったでせうか。

「なつかしきふるさとの浦」と歌ひ出されて、二首目に「その日を待たむさびしけれども」と続きますが、この「さびしけれども」は、友とも親とも弟妹とも別れて、ひとり行くその日を思つて、そこに思ひが集中して、いのちの沁みゆくやうな淋しさであると同時に、「戦死の覚悟」と別のものではない感情が漲つてゐるやうに思はれます。ここから次々に「友のみなさけをしみじみおもふ」とか、「数ならぬわれを上げます友どち」と歌ひついで「大君の大みめ

ぐみと友の思おもへばこの身惜しからめやも」と歌ひ終つてをります。最後の歌の「大君の大みめぐみ」といふことばには、実に痛切な、あたたかい情感と、日本の国柄の中心に天皇に対する極めて厳しい帰依没入の心持が籠つてゐて、松吉君がいのちをこめて歌つてゐるやうに思はれます。これは概念的道義の理解に発するものではない。彼の「友」に向つていただく恩の思ひと「ふるさと」に寄せる懐しさと、この「大君の大みめぐみ」の実感とが連続してゐることが私達にもよくわかるではありませんか。

この時から三十数年が経つて、日本の運命もたいへんな変化を見て今日に至つてをります。小野君がいったやうに、不死鳥新生日本が蘇つたのは確かに天皇陛下のおかげであるとしたか私にも思へません。大きく時代は変つた。だが松吉君のやうな、このやうな歌が歌へる青年は今のないのかと言へば決してさうではないと思ふ。戦争で亡くなつた人と言へば、あなた方にとつては何だか遠い人のやうに思ふかもしれないが、この歌を読めば、この松吉君が一人ふるさとのわが家に身を寄せて出陣前の数日を、かうして自分の生涯と訣別してゆかうとしてをる。このひとり居の淋しさと、決死の覚悟から漲り溢れる暖い心は、あなた方青年の胸に同じやうに伝はつてくる、ちつとも變つてゐない心だと私は思ふ。

今から慰霊祭に臨むわけですが、私にとりましては何といつても共に学び、共に戦場に立つて亡くなつた友だちのことが、しかも残されたその暖い心が忘れられませぬ。戦死した友らの

名前は次々に何人も思ひ出されます。江頭、百武……。その戦死した土地も、ビルマ、フィリピン、沖繩、東シナ海……。亜細亜の海陸の全域にわたる各地で、われわれの友が、諸君からいへばお父さんか叔父さんといった方々が、国のために命を捨ててをられる。太平洋の全域にわたる広い海から戦死者の霊が、八潮路の波のうねりの如く帰って来て、その八百会やほあひの真中に日本が立ってゐる、さういふ感じが致してまゐります。

第二十二回「合宿教室」のあらまし

(附) 一年の歩み

東京大学法学部 四年 小 柳 志乃夫
九州大学工学部 三年 廣 木 寧



「合宿教室」までの一年の歩み

国際関係は年々緊張の度を加へ、外国でおこった出来事は直接、わが国の政治、経済、文化の全般に亘って関つて来る。とりわけ米韓の防衛問題、中東問題、中国の国内紛争、中ソ関係等によつて、世界は多極化し、いよゝゝ緊迫した様相を見せてゐる。国内では、昭和五十一年には今上陛下御在位五十年といふ国民にとってこの上もない喜ばしい年を迎へたが、その前後からまことに憂ふべきことに、わが国の歴史生命と切り離すことが出来ない元号を抹殺しようとする動きが起つた。この元号無用、西暦一本化を頑なに主張するマスコミや進歩的文化人の、日本の文化伝統に対する浅薄な、或ひは、否定的思考をみるにつけ、わが国の思想混迷の深さを思ひ知るのである。

全国各地の大学では一時喧噪を極めた過激な学生運動が下火になり静かにはなつたが、多くの学生は生気をなくし、共に考へるべき対象を喪失して個々がばらばらになつてしまつてゐる。

世界の人類はいかなる人でも必ず或る特定の国家に属し、個人の生命はその国家生命によつて守られ持続されてゐることは疑ふことなき事実である。だが戦後の日本では国家のことを考へるのがタブーになつてしまつた。国家のためにといふ戦前のあの昂揚したおもひは、戦後は

人類のために、平和のためにといふスローガンに書きかへられてしまった。この結果青年達は現実を見ようとはせず、心の中に実感を伴はない観念を横行させ、思考は概念化し、ものごとを自分で考へようとはしない脆弱な風潮が一般化してしまった。

私達の学んでゐる「合宿教室」の標題は「祖国、人生、学問を語らう」であるが、祖国、人生と直結した学問の道を進まぬ限り、すべては概念化され、将来の日本を背負ふべき青年学生
の精神の空白は如何とも為難いのである。このまま放置してゆけば、日本の文化伝統を否定せんとする風潮は青年学生の魂を無残にもふみにじってしまうであらう。私達はかかる風潮と戦ひ、力強い思想運動を展開して行かねばならない。

ここで、昭和五十二年八月、雲仙で行なはれた「第二十二回合宿教室」のあらましを述べる前に、合宿に至るまでの一年間の、各地区の学生の活動の概略を簡単に記しておきたい。

昭和五十一年八月、佐世保での合宿教室後、各地区でそれ〴〵研鑽が始まった。輪読と短歌創作が中心であった。輪読とは私達の生き方を先人の文章に求め、確かめることであり、短歌創作とは言葉の鍛練を通して私達の情意を正すことである。例会は月に数回開かれ、初めて合宿教室に参加した友も加はって、展開して行った。さういった例会での研鑽をうけて各地区で地方合宿がもたれた。先生方の御講義もあり、日々忙しくて来て戴けぬ先輩も参加され、充実

した時をもった。それは、各地区から出された合宿記録として残されてゐて、それに詳しい。

東京地区―「東京地区富浦合宿記録」、大阪地区―「国のまほろば」、福岡地区―「大信海」、
熊本地区―「秋期合宿感想文集」、鹿児島地区―「鹿児島地区加治木合宿記録集」

(地方合宿)

主 催	年 月 日	場 所	参 加 大 学
福岡教育大学 教育問題研究会	昭和1751年 10月17日～19日	福岡研修センター	福教大
熊 本 信 和 会	10月30日 ～11月1日	人吉観蓮寺	熊大・熊商大・九大・鹿大
東 京 信 和 会	11月20日～22日	千葉県安房郡富浦町	東大・亜大・早大・中央大 東工大・法大
大 阪 信 和 会	11月20日～22日	大阪北郊持経寺	大阪大・大阪芸大・京産大・ 広大
鹿 児 島 信 和 会	11月20日～23日	始良郡加治木荘	鹿大・熊大
福 岡 信 和 会	11月21日～23日	太宰府戒壇院	九大・西南大・福大・熊大
亜 大 日 文 研	12月4日～5日	亜大セミナーハウス	亜大
東工大歴生会	12月7・8日	渋谷青少年研修会館	東工大・慶大

早大積誠会	12月11日～13日	正大寮	早大・東大・亜大
亜大日文研	昭和52年 2月3・4日	正大寮	亜大
福岡信和会	5月14・15日	福岡市郊外油山椿荘	九大・西南大・福大
女子信和会	3月5日～7日	熊本ユースホステル	鹿大・長大・福教大・尚綱大 大妻女子短大・広大・福女大 平安女学院短大・山大

昭和五十二年三月、今夏、雲仙において行はれる予定の大合宿に全国の大学生をどのやうに
 結集して行くべきか、その覚悟を新たにすべく、前年の佐世保以来研鑽を積んで来た学生を中
 心に合宿をもつことになった。合宿地は福岡市北郊の宮地嶽神社、西に玄海灘が望まれる風光
 にめぐまれた厳肅な神域であった。

合宿参加者の内訳は次の通りである。

△東日本▽亜細亜大・早大各3 東京大・東工大・中央大・富山大各1

△西日本▽熊本大7 九州大・鹿児島大各6 西南学院大3 大阪大・福岡大各2

大阪芸術大・京産大・広大・熊本商科大各1

計四十一名

△国民文化研究会▽ 十一名

総計 五十二名

例年春合宿参加者は事前に「問題提起文」を書くことになってゐた。それは、今、各自が最も切実なものを書く。併し、この度の春合宿では、現代に生きる学生ならば、当然とりくまなくてはならない、「天皇」「国家」「共産主義」に就いて書くことになった。

合宿では、問題提起文で取り上げた「天皇」「国家」に私達が如何にして取り組めば良いかが中心問題となった。かういふ学生の問いに対して、二日目に講義をされた今林賢郁先生（昭和四十三年早大卒・新日鉄働勤務）は、吉田松陰の「講孟余話」の「初一念」の箇所を引用されて、私達の学問に対する基本的な姿勢をもう一度振り返るべきことを訴へられた。続いて、午



(宮地嶽合宿)

3月27日(日) 第三日	3月28日(月) 第四日
(起 床) 朝 の つ ど ひ 朝 朝 食	(起 床) 朝 の つ ど ひ 朝 朝 食
班 別 輪 読	決 意 発 表
副島先生御講話	勸 誘 の 検 討 会 作 業 分 担
昼 食	昼 食
副島先生黒田節の舞ひ披露	
班 別 輪 読	感 想 文 執 筆 和 歌 創 作 式
相 撲 大 会	閉 会 式 後 片 付
夕 食 ・ 入 浴	
小柳先生御講義補足	
班 別 討 論	
班 別 懇 談	
夜 の つ ど ひ	

後の講義では、小柳陽太郎先生は、明治、大正、昭和の三代を生き、卓抜した思想家三井甲之先生の御言葉を引用されながら、『国家』といふ抽象的な言葉で国を考へるのではなく、先人の生きて来た歴史をもった国、つまり具体的な日本そのものを心にかべて考へるべきこと、『天皇』に対しても単なる統治者としてではなく、日本の文化伝統の体現者としての天皇のお姿にふれるやうに努力しなければならない。」と話され、さらに、「私達一人々々が正岡子

「合宿教室」のあらまし（小柳・広木）

		3月25日(金) 第一日	3月26日(土) 第二日	
		春季合宿日程表	7:00	
8:00	朝食			
9:00	班別討論 (同前)			
10:00				
11:00				
12:00				
13:00	昼食			
14:00	今林先輩御講義			
15:00	質疑応答			
16:00	開会式		班別討論 (同前)	
17:00	所感発表		夕食・入浴	
18:00	夕食・入浴			
19:00			リーダー学生発表	
20:00	班別討論 (問題提起文を中心に)			
21:00				
22:00	就寝	就寝		
23:00				

規、三井甲之先生、黒上正一郎先生といふ学問の道統につながつてゐる事を自覚してほしい。」と覚悟を促された。

三日目に登壇された副島羊吉郎先生（元佐賀大教授）は、日々私達が学んでゐる『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の著者、黒上先生に就いて、黒上先生と親友であられた梅木紹男さんについてのお話も交へながら思ひ出深く話され、さらに、先生の生涯の親友であられた桑原暁一先生のことにも就いても触れられた。先生のお話によつて、われ／＼は師や友をもつことのすばらしさをしみ／＼と実感することが出来た。（先生の御講義は国民同胞17号に掲載されてゐるの
で是非およみいただきたいと思ふ。）

三泊四日の合宿で、友と語り、先生方の御講義を聞き、四月からの勧誘活動に対する思ひは深まった。

なほ三月には熊本の新ースホステルで九州を中心とした第五回女子合宿が行はれたが、一日目には川井修治先生（鹿児島大学教授）が「風雲急の東亜情勢」と題して、主に中共の状況とこれからの展望について話され、二日目には小柳陽太郎先生が、三井先生の「明治天皇御集研究」の中の明治天皇の御製、昭憲皇太后の御歌を中心に日本の国柄の基本にふれて話をすすめられた。短歌導入講義には終始女子学生の御指導をいただいてゐる青砥宏一先生（島根県玉造

温泉旅館主が、先生御自身の体験や御友人の歌を引用されて話され、思ひ出深い合宿となった。さらに福岡女子信和会が中心となって、その後「短歌通信」が月に一度作られて、各地の女子学生の手もとにとどけられて今日に及んでゐることを記しておきたい。

四月に入ると、私達の学問の場をさらに広げるべく新入生を対象とする勧誘が始まった。五月から六月にかけて、九州を中心に講演会がひらかれ、多くの新しい友を知る機会となった。祖国・人生・学問を語り合ふ合宿教室の場にひとりでも多くの学生が参加することが、大学の学風を正すことと信じ、各地区、大学の中で活潑な活動が続けられた。

（講演会）

主 催	年 月 日	場 所	講 師 ・ 演 題
鹿児島大学信和会 鹿児島大学教問研	昭和52年 4月23日	鹿大大学会館 四階	川井修治先生（鹿大教授） 「新しく大学生活を送る諸君へ」
熊本大学信和会	5月14日	熊大教養部 D-13	小柳陽太郎先生（修猷館高校教諭） 「学問—いのちに至る道」
熊本商大信和会	5月26日	熊商大 71番教室	山口宗之先生（九州大学教授） 「維新史をめぐる人物像」

鹿児島大学信和会 鹿児島大学教問研	6月4日	鹿大教養部 101番教室	北島照明先生（藤園中学教諭「日本文化を見直さう」国家・学問・友情」
九州大学信和会	6月8日	九大教養部 37番教室	小柳陽太郎先生 「歴史を見る目」
西南大学信和会	6月22日	西南会館 二階 一号会議室	山田輝彦先生（福教大教授） 「転換期の思想」
福岡教育大学 教育問題研究会	6月25日	福教大 特一番教室	小柳陽太郎先生 「歴史を見る目」吉田松陰を中心に

○ ○
 かうした一年間の勉強と勧誘活動を経て、昭和五十二年八月、第二十二回「合宿教室」の日を迎へたのである。

△以上、廣木 寧記▽

開会式まで

第二十二回学生青年合宿教室は、昭和五十二年八月六日より十日までの四泊五日間、長崎県の雲仙国立公園で開催された。会場は、雲仙岳の麓にある雲仙ファミリーホテル。温泉街から少

し奥まった所にあるこのホテルは、杉林に囲まれ、夕べには蟬の音が美しく響いてきて、われわれの学問の場所としてはまさに格好の会場であった。

合宿開会の三日前には、合宿教室の参加勧誘活動に携ってきた男女学生四十名及び国文研の若手会員数名が、事前合宿と合宿開会準備の為、現地に集合した。事前合宿は、合宿教室での学生班をリードする幹部学生が、お互ひの合宿教室に臨む意志を確認してゆく場である。わづか一泊二日の合宿ではあったが、国文研会員及び学生自身の所見発表、それに続く班別での討論、輪読の中に、お互ひの心の姿勢は正され、合宿に向ふ気持ちは高められていった。二日目の午後には、昭和十五年信州・菅平高原に開催された全日本学生合同合宿の記録映画「文化の戦士」が上映された。開戦前の緊迫した時代下に正しい学問のあり方を求



め、同信の友を求めて展開された先達の厳しい合宿修練の有様がまざまざと画面に映し出されていった。合宿報告の大演説会で獅子吼する先輩方の姿に、雲仙合宿を前にした学生の思ひは奮ひ立たされ、高められていった。映画終了後の全体決意発表の時間は、各自迷ひをのこすことなく思ひを定めて合宿に臨まうと、夜遅くまで討論が続けられた。

翌日は終日、合宿教室に集ふ友らを迎へる準備に費された。室内では、仮名簿の作成、講義室の整備、班別一覧表、班室表示等の作業、屋外では、玄関前に「友よ／＼と呼ばば友は来たりぬ」の横断幕が掲げられた。夕刻近く作業は完了した。明日の正午には続々とやって来る友らを待つのみとなった。

参加者の内訳は次の通りである。

(学生班 五一大学) (洋数字は参加学生数)

東京大 4	東京工大 1	京成大 1	大阪大 2	富山大 1	岡山大 4	広島大 1
山口大 1	九州大 24	福岡教育大 12	長崎大 26	宮崎大 1	熊本大 24	
鹿児島大 19	防衛大 2	亜細亜大 17	早稲田大 6	高千穂商大 5	中央大 4	
日本大 3	高崎経済大 3	慶応大 2	玉川大 2	日本経済短大 2		
駒沢大 1	東洋大 1	東海大 1	独協大 1	神奈川大 1	松本歯大 1	

名古屋工大 2	国立名古屋病院附属看護学校 1	皇学館大 1	京都産業大 1
大阪芸大 1	岡山商大 2	岡山理大 1	作陽音大 1
中村学園大 3	九州共立大 2	九州産業大 2	福岡大 9
大分工大 1	九州女学院短大 2	熊本商大 3	福岡歯大 1
			西南学院大 9
			熊本女子大 2
			熊本短大 1
計 二二三名 (うち女子四〇名)			

(社会人・教員班)

会社員、小・中・高教員、大学職員、団体職員など 計 一九名

(招聘講師) 二名 (大学教官有志協議会) 三名 (国民文化研究会) 六八名

(見学参加者) 五名 (参観者) 二名 (事務局) 一名

総合計 三三二名

以上の参加者は、アンケート用紙をもとに八名乃至九名づつで一班を構成し、各班に事前合宿参加学生及び国文研の若手会員が班長として割り当てられた。男子学生班は二十四箇班、女子学生班は五箇班、社会人班が三箇班作られ、例年通り数箇班を一単位として六つのブロックに分けられた。合宿運営はブロック及び各班を単位として行はれる。また本年は、国文研会員の相互研鑽の為に国文研班が特設された。

明けて八月六日、暑い日射しの中を全国より続々と友は集ってきた。

8月8日(月) (第3日)	8月9日(火) (第4日)	8月10日(水) (第5日)
(起 床) 朝 の 集 ひ 朝 の 集 ひ 食	(起 床) 朝 の 集 ひ 朝 の 集 ひ 食	(起 床) 朝 の 集 ひ 朝 の 集 ひ 食
記 念 撮 影	(講義) 「現代流行思想とその 批判—『しぎしま のみち』の使命」 夜久正雄先生 (質 疑 応 答)	片岡健運営委員長所感発表
(講義) 「世界の中の日本人」 衛藤藩吉先生 (質 疑 応 答)		全 体 意 見 発 表
		「合宿をかへりみて」小田村寅二郎先生
	班 別 討 論	班 別 懇 談
班 別 討 論		感 想 文 執 筆 第 2 回和歌創作
昼 食	昼 食	閉 会 式 (このあと昼食)
	(講話)高木尚一先生	(解 散)
「和歌創作導入講義」 前田秀一郎先生	(講義) 「学 び 方」 小田村寅二郎先生	
仁田峠・地獄めぐり (和 歌 創 作)	班 別 討 論	
夕 食 入 浴 散 歩	地区別・大学別懇談	
	夕 食 入 浴 散 歩	
(所感・所見) 小野吉宣先生 名越二荒之助先生 宝辺正久先生	「和歌全体批評」 青砥宏一先生	
慰 霊 祭	和歌相互批評 (班 別)	
班 別 懇 談		
(就 床)	夜 の 集 ひ (就 床)	

「合宿教室」のあらまし (小柳・広木)

第二十二回「合宿教室」日程表		8月6日(土) (第1日)	8月7日(日) (第2日)
	6:30		(起 床) 朝 の 集 ひ
	8:00		朝 食
	9:00		(講義) 「『新日本の誕生』とその 動因」
	10:00		木内信胤先生 (質 疑 応 答)
	11:00		班 別 討 論
	12:00		昼 食
	1:00		
	2:00	(集 合)	「輪読導入講義」 小柳陽太郎先生
	3:00	開 会 式	班 別 輪 読
	4:00	(班別自己紹介) 「日本への回帰」第12集 班 別 輪 読	青年研究発表 (大岡・中園・味酒)
	5:00		
	6:00	夕 食 入 浴 散 歩	夕 食 入 浴 散 歩
	7:00		(講義)「至誠にして動かざる者 未だ之れあらざるなり—吉田松 陰の魂」 今林賢郁先生
8:00	(講義)「問ひ直されてゐ る学問—人間の再建のため に—」 山田輝彦先生		
9:00	班 別 討 論	班 別 討 論	
10:00	(就 床)	(就 床)	

午後二時半、参加者は全員、講義室に集合し、開会式が行なはれた。西南学院大学法学部三年古賀直司君が力強く開会を宣言した。参加者全員で国歌を斉唱した後、「戦時平時を問はず祖国日本のために尊い命を捧げられた全ての祖先の御霊」に対し、一分間の黙禱を捧げた。

続いて、主催者を代表して、国民文化研究会理事長の小田村寅二郎先生が「この合宿では、大学の差、年齢の差などに対するとははれを取り去って、お互ひ一人の人間として心を通はせ合ひ、さういふ『心の平等』といふ世界が実現しうることを知って、合宿からお帰りいただきたい。」と挨拶をされた。続いて参加学生を代表して登壇した熊本大学工学部四年、池松伸典君は、「現在の学内において、国の問題が議論されることは少なく、また、たとへ話題に上っても我々の人生と直接に関連せぬところで話が進められてゐます。この合宿ではそのやうな現実を遊離した思想と袂別し、心をこめて語り合ふ中から、国に対する正しい接し方を感じとっていたきたい。」と所信を述べた。開会式に続いたオリエンテーションでは、熊本県立熊本西高校教諭・片岡健合宿運営委員長から、合宿趣旨説明並びに各ブロック長の紹介があり、次に指揮班長をつとめる熊本県立多良木高校教諭白浜裕氏から、合宿諸注意がなされた。オリエンテーション終了後、全参加者は、各自の班室に入り、一人一人合宿に臨む思ひを述べあひ、「日本への回帰・第十二集」の輪読に入った。

講義・講話

（以下、合宿期間中の講義、講話の概略を記すが、詳しくは本書中に掲載されてゐる講義録をお読み戴きたいと思ふ。）

合宿第一日目の夜、「問ひ直されてゐる学問——人間の再建のために——」と題する、福岡教育大学教授、山田輝彦先生の、合宿教室の導入講義が行はれた。先生は、まづ、戦後思想の三つの特色として自然主義、白樺派に代表される自我至上主義、及び進歩主義を取りあげられ、「この三つの思想から生ずる現代の人間観は、物質的に満足な生活ができればよいといふ見方です。そこから出てくる国家観は、福祉国家的な国家観であり、マルクス主義的な権力としての国家観であつて、そこには生命体としての国家、自分を超えた高い価値としての祖国といふ見方は欠落してしまつてゐるのです。」と、演壇から身を乗り出すやうにして語気強く訴へられた。さらに「生命体としての国家は、科学的知性によつては認識できない。祖国を守つてきた先人の行動を通じて共感する以外にはないのです。」と述べられ、「国のいのちと自分のいのちとがつながつてゐると実感する」ことを合宿テーマの大きな問題として提起された。

次に、科学だけが学問ではないとして、「経験を合理的経験だけに絞り、主観を一切断ち切



るのが自然科学の立場であって、人間に関する学問に自然科学の方法だけを適用することは大変な間違いです。」と指摘され、最後に「人間の生きる道を求めるやうな学問をしないと人間の再建はありえない。さういふ学問が、この合宿の目指すものです。」と問題を提起して講義を結ばれた。

第二日目は招聘講師の世界経済調査会理事長、木内信胤先生の御講義から始まった。先生には、今年まで十八回連続して御出講いただいたてをり、本年の演題は「『新日本の誕生』とその動因」であった。先生は「『新しい日本』は近く必らず誕生するものと確信してゐる。『新しい』とは、明治以来、特に敗戦以後の日本と著しく違ふから『新しい』といふのであって、実は『本来の日本』の顕現に過ぎない」と述べられた。さらに「『本来の日本』とは、固定化したものではない

ので、大和民族発祥以来、今日までの発展の全容の中に求めるべきものでせう。しかし、それははっきりかうだとわかるやうなものではないと知ることが大切なので、多分こんなものではないかと考へながら進んでゆくのが正しい態度だと思ふ」と示唆された。その新日本誕生の眞の動因は「小さくは日本自身、大きく見れば世界自体に内在する力とみるべきで、その見地に到達すると、大きな安心感、無限の力といったものが感ぜられるのです。」と話された。

続いて、「総合的直観」の立場に基づく先生の基礎的なものの見方を紹介され、最後に先生が中心となって起草され、世に問はれてゐる「産業計画懇談会」の「貿易構造の改革——『新路線』の一環として」といふ提言について、解説を加へられていった。

午後の最初の日程は、**福岡県立修猷館高校教諭、小柳陽太郎先生**による輪読導入講義であった。テキストは、**黒上正一郎先生**の御著書「**聖徳太子の信仰思想と日本文化創業**」である。先生は、まづ、**昨年**の合宿教室の講義録の中の「**輪読の意義**」及び「**黒上正一郎先生について**」の箇所を読んでゆかれ、解説をほどこされた。続いて本文に入ってゆかれた先生は、「(太子)御身親ら真俗相依の範を示させ給ひ」といふ言葉について「太子は、現実生活と宗教生活を統一しようとした。その現実との激しい戦ひの中に『世間虚假唯佛是真』といふ御言葉も生まれたのです。理想と現実を分けてしまふ卑弱な精神をもつてはこの御言葉はわからない」と話され、さらに「群生とその苦業を同じうす」と仰せられた太子の御氣持を太子御自身の御

表現である「片岡山の御歌」(推古天皇紀)を通して、具体的に偲んでゆかれた。

夜は、新日鉄八幡に勤務してをられる今林賢郁先生が「至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり——吉田松陰の魂——」と題して古典講義をされた。「毎日仕事に追はれ乍らも、いつも私の頭を離れないのは、『国』のことです。一人の日本人として私に出来ることは何か。その指針を求めて私は古典を学んでまゐりました。」と前置きされ、松陰の文に入ってゆかれた。「松陰は、孟子の『至誠に動かざる者未だ之れ有らざるなり』の一語が解せずと言って生命を賭してこの言葉をものにしようとした。松陰にとって孟子を学ぶことと、自分自身の生き方とは一体になってゐたのです。」と述べられた先輩は、最後に「現代においても『至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり』といふ思ひで、自分の志を験し、学問をおしすすめてゆくことはできる。さういふ努力が、国を支へてゆくのではないでせうか。その時に力を与へてくれるのが、先人の潑刺とした文章なのです。」と熱を込めて話された。

第三日目の朝、霧の流れるホテル前の広場で記念撮影を行った後、御二人目の招聘講師、東京大学教授の衛藤審吉先生の御講義の時間となった。先生は、ニュージーランドの学会を終へられて休む暇なく合宿会場に到着されたのが昨夜、すぐに今林先輩の御講義をお聞きになられ、さらには班別討論の場にも入られたのであった。さて、ご講義は、「世界の中の日本人」と題して、先づ、「日本と同様に貿易に依存してゐたニュージーランドは、酪農製品の得意先であ

る英国が、輸入先をECにかへた為に経済混乱に陥ってゐる。日本もまた米国に依存しすぎてゐる点で同様の問題を孕んでゐるのであり、その中で日本の繁栄を維持してゆく為には、諸外国との庶民レベルでの交流を広め、日本人に対する信頼を深めてゆかねばならない。」と強調された。しかし「学生諸君の中には未だ海外で活躍しようといふ積極性が欠けてゐるのが現状です。」と述べられ、先生御自身が見聞してこられた海外、特に後進諸国で活躍する日本人の青年達の実例を紹介してゆかれた。最後に森鷗外の「二本足」といふ言葉を引用されて、「日本の文化的背景を知ると共に、広い心をもって西洋の文化も理解し評価しうる力を身につけていただきたい」と御講義を締めくくられた。さらに御講義の後の質疑応答では、共産諸国に対する防衛問題及び外交問題について



懇切にご教示下さった。

三日目の夜、慰霊祭を前にして、国民文化研究会の三人の先生方が登壇された。最初に登壇された福岡県立嘉穂高校教諭、小野吉宣先生は、「慰霊と天皇陛下」と題して話された。一年の陛下御訪米後の靖国神社ご参拝をめぐって戦はされた左翼と宮内庁の形式的な議論を批判され、「我々が憶ふべきことは、陛下がいかなるお気持ちで参拝してをられるかといふことだが、人々は全くその心に心をはせることなく、徒らに議論がくりかへされてゐる」と述べられて、戦死者に対して「胸せまりくる」と御製の中にお詠みになられた陛下の御気持ちを、自らの体験を通して語ってゆかれた。

続いて登壇された高千穂商科大学助教授、名越二荒之助先生は、「世界各国の戦死者をまつる聖地」と題して、先生が実際に見聞された韓国、ソ連、イギリス等の無名戦士の墓地の碑文を紹介され、それらの国々では戦死者が如何に大切にまつられてゐるかについて熱弁をふるはれた。

最後に、国民文化研究会副理事長、宝辺正久先生が「亡き友を思ふ」と題して、慰霊祭に臨まれる先生の御気持ちを語られた。先生は、ご友人で戦死された松吉正資さんの出陣前の遺詠を心をこめて誦み上げられ、「時代は確かに変はったが、松吉君の温い心は現代の青年の中に同じやうに伝はっていくと僕は思ふ」と確信をもって述べられた。戦死した友の名を「江頭、百

「武」と誦み上げられてしばし絶句された先生の御姿に一同強く胸を打たれたのであった。

宝辺先生の御話をお聴きして

熊本大学 折 田 豊 生

呼びかくるごとくに「江頭」「百武」と友の名を呼び絶句したまふ

声つまらせ語りたまへる師の君のおもは定かに見えなくなりくる

あふれくる涙流るゝまゝにして師の御姿をひたに見つめぬ

四日目最初の日程は、亜細亜大学教授、夜久正雄先生の御講義「現代流行思想とその批判——『しきしまのみち』の使命——」であった。先生は、まづ、現代流行思想の具体例として「君が代」の語義の問題、及び、聖徳太子に対する否定論を取り上げられ、「『君が代』の『君』をあなたとする解釈には、天皇を国民生活から排除する意図が働いてゐる。」と指摘され、また、聖徳太子といふ偉大な人物を疑って信じようとせぬ知識人の姿勢を鋭く批判された。さらに「現代流行思想の欠陥は、日本人が日本の歴史と文化と学問をよく研究しないところから来てゐる。このことを早くご指摘になられたのは明治天皇です。」と述べられて、明治天皇が大学の学科の中に修身の科目がないことをご心配されたと伝へる元田永孚の聖諭記を紹介された。

さらに、「しきしまのみち」について「和歌は日本の学問の中心である。和歌を作るといふことは、内心を省み、心をみがき育ててゆくことになるのです。」と述べられて、この「しきしまのみち」についてお詠みになった明治天皇の御製を拝誦してゆかれた。

最後に先生は、御自身の教へ子で戦死なされた茶谷武さんの遺書を読まれた。死を前にして御両親と御妹宛に遺された茶谷さんの御言葉を、先生は、声をつまらせ、涙を流されながらお読みになった。

九州大学 奈良崎 修 二

たたかひに果てしみ友の遺されし歌詠みたまふ涙ながらに
こみあぐる涙をこらへこらへして読まるる思ひ伝はりて来ぬ
聞く我もあふるゝ涙こらへきれず思はずまぶた閉ぢにけるかな

午後は始めに、大学教官有志協議会、高崎経済大学教授、高木尚一先生がご登壇になり「世界と日本」と題してお話になった。先生は、学生時代直接師事された黒上正一郎先生、三井甲之先生の学問研究のご態度をお偲びになり「我々は御製に示された日本人の行くべき道、まごころを貫く道を踏み行ってゆくほかはない。それを信じて疑はぬことが大事だ。」と述べられ、



さらに親鸞の易行道、山鹿素行の学問等について言葉静かに、確信をもって語られた。

合宿教室最後の講義は、国民文化研究会理事長、小田村寅二郎先生のご講義「学び方」であった。先生は、合宿教室の流れの中で各学生が直面してゐる問題を取り上げられた。「せっかくなかなか講義を聞いても、自分の価値基準を守らうと身構へてゐたのでは何にもならない。自分の身についた知識、価値基準などを常時考へ直して成長してゆくのが本来の学問なのです。」「自分達もこの合宿と同じ趣旨のことを考へてゐるグループである。』といふレベルに安住してゐる学生諸君もゐるが、さういふ姿勢でどうして学問ができれば。」と喝破された。さらに大学問題について「大学問題の解決は、政治家の手によつてはできない。大学をよくする為には諸君等学生一人一人が心を砕

く以外にはないのです。」と語気強く訴へられた。

先生は、大学生としての学問の方法を次々に具体的に示唆され、最後に「月刊『国民同胞』を是非心をこめて読んでいただきたい。」と述べられて、学問の基礎である「本の読み方」を具体的に御教示下さった。

班別輪読・班別討論・和歌創作

合宿教室において学生相互の研鑽の柱となるものに班別輪読がある。テキストは、第一日目が昨年の合宿レポート「日本への回帰・第十二集」、第二日目は、黒上正一郎先生著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」であった。

黒上先生の御著書は、学生が日頃の例会で親しくふれてゐる書物である。その文章は難解であるが、声に出して読んでゆくと文章の緊張したしらが我々の心に響いてくる。合宿教室では始めてこの本にふれる学生と共に輪読にとりくんだ。言葉の一字一句もおろそかにせず、正確に著者の思ひを憶念する努力がなされる。各自は文章の脈絡や言葉の意味について疑問を提出し、その箇所について皆で力を合はせて考へてゆく。一つの文章に皆の心を寄せてゆくと、一人で読んでも思ひの致らなかつたことにはと気づかされるのである。かうして、先人

の言葉が我等の心に、生き生きと蘇ってくる時、学ぶことの喜びが感じられてくるのであった。各御講義の後には、班別討論の時間が設けられた。そこでは御講義の内容を正確に理解し合ふにとどまらず、講義に関連して日頃の各自の思ひを述べ合った。現在の学内の討論においては、卒直な感想よりも理論的な整った意見が重んじられる傾向にあるが、合宿教室においては、何ら痛感のない借りものの意見に対しては容赦ない指摘が為された。借りものでない自分のありのままの思ひをいかに表現するか、またその友の言葉から友の心にどれだけ近づいてゆけるかといふことに努力がかたむけられた。

班別輪読とならんで、合宿教室における相互研鑽の柱となるのが、短歌の創作・相互批評である。第三日目の午後、短歌創作の時間に先立って、九州大学大学院医学研究科の前田秀一郎先生による短歌創作導入講義が行はれた。

先づ、「短歌は特別な趣味がないと詠めないといふやうなものではない。もっと我々に身近なものです。」と話され、「歌を詠むことによって、自身の心の動きを省ることになる。だから、人の歌を読むことによって、作者の心を直接知ることにもなる」し、「歌を詠まうと心を働かせることで、今まで気づかなかったひそやかなものの中に美しさを見出すことにもなるのです。」と短歌創作の意義を語られた。続いて、万葉集と子規の歌を数首鑑賞され、「現実をしっかり見て、自分の思ひを卒直に表はす態度を子規は『写生』と呼んだが、その姿勢が死を目前に

した子規の歌の中に感じられる。」と述べられた。短歌導入講義の後は、短歌創作をかねて妙見岳登山が予定されてゐた。しかし、あいにく霧が深く立ち込めたため、仁田峠より下山し、地獄めぐりに一時を過した。湯煙が立ち昇り、硫黄の臭ひが鼻につく数々の地獄を、班員と語り、また指を折って短歌を作りつつめぐり歩いた。

この時参加者全員が作った和歌は、諸先生や事務局の方々の徹夜の作業でガリ刷りの分厚い歌稿となり、翌日の夕方には全員に配布された。

第四日目の夜、国民文化研究会理事の青砥宏一先生によって、和歌の全体批評がなされた。

先生は、歌稿の中から数十首の短歌をとりあげて、作者の詠まうとするところに留意されつつ、懇切に批評されていた。不正確な表現でまともりの悪い歌も添削されて見違へるほどに生き生き



和歌の全体批評をされる青砥先生

とした歌になってゆく。中には傑作？な短歌もあり、それに対する先生独特のユーモアあふれる批評で、講義室にはしばしば爆笑が起こった。

全体批評の後、各班に戻って相互批評が行はれた。作者の思ひを推察しつつ、表現を正確なものになほしてゆく。作者は自分の心を披瀝し、皆はその心に思ひを寄せてゆく中に、さやかな共感の世界が生まれていった。

青年研究発表

第二日夕方、国文研の若手会員による青年研究発表が行はれた。

最初に、熊本県立松島商業高校教諭の中園俊郎氏は、初めて合宿に参加された時の感動を語られた。その合宿で講義の中に出てきた吉田松陰の「積誠之れを蓄へよ」といふ言葉が、大学を卒業して教職についた後も折にふれて心の支へとなり、また、着実な生き方をしていくことの大切さを教へてくれたと語られた。

続いて登壇された味酒景子さんは、福岡県本郷小学校学園分校で精神薄弱児の教育に当たってをられる。「ありのままの心で物事に感ずる」といふことの大切さを、精神薄弱児との心あたたまる体験を通して語られ、さらに、天皇陛下が白痴の子らと接せられた時のお話をされ、「陛下

は子供達の外見や能力をすっかり包みこんで、心と心で子供達と接してをられると感じられた。」と語って下さった。

最後に建設省・建築研究所研究員、大岡弘氏が、歴代の天皇方の御製や明治天皇の御宸翰に一筋に貫かれてゐる国民の上を思はれる無私のご精神について語られ、さらに終戦時の今上天皇の御態度について「この歴代天皇に仰がれる伝統的御精神が、終戦時の今上陛下の御製に発露してゐることをしみじみと思ふ。」と語られた。

慰 霊 祭

第三日目の夜、国文研の先生方の所感発表の後、慰霊祭が挙行された。昼間、地獄めぐりの間に国文研の若い会員の方々がホテルの前庭に心こめて、祭壇を作って下さった。しかし、折から降り出した大雨は待てど止まず、遂に土砂降りの雨の中で祭壇を撤去して、室内の広間に祭場を移し更へられた。慰霊祭に先立って、国民文化研究会会員朝永清之先生より、「慰霊祭といふ儀式を通して、祖国を守ってこられた祖先の御心をこめて憶念したい。」とお話があり、慰霊祭についての諸注意が為された後、参加者は祭場に集合した。

お祓ひにかへて国文研の松吉基順先生により、三井甲之先生の

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを

の遺歌が二度朗詠された。黙禱の後、関正臣先生の警蹕ひつとともに全員最敬礼をした。降神の儀である。神前に山海の産物が供へられた。続いて小田村寅二郎先生が御製を拝誦された。折しも窓の外の暗闇に稲妻が走り、祭場には雷鳴が轟きわたった。その音はあたかも祖先の御霊の御声かと聞こえたのであった。次いで高木尚一先生による祭文奏上。その間も雷鳴は二度、三度と轟き、厳粛のうちに慰霊祭は進行した。最後に全員で「海ゆかば」を歌ひ、最敬礼をもって御霊をお送りした。

次に慰霊祭において拝誦された御製ならびに奏上された祭文を記しておく。

明治天皇御製

明治三十五年一月、青森歩兵第五連隊第一大隊、八甲田山を行進中、山中で多数凍死せるを悲しま
埋火うづみびにむかへど寒しふる雪のしたにうもれし人を思へば
せ給ふて詠ませたまへる御製おほみづた

明治三十七年日露戦争のさなかに、戦死者を悼いたませられ、詠ませたまへる御製おほみづたから三首

はからずも夜をふかしけりくのため身をすてたりし人をかぞへて
たたかひに身をすつる人多きかな老いたる親を家にのこして
世とともに語りつたへよ国のため命をすてし人のいさをを

明治四十年に「子」と題してよませたまへる御製おほみうた

かなし子にかたりきかせよ国のため命すてにし親のいさをを

同一年「神祇」と題してよませたまへる御製二首おほみうた

目に見えぬ神にむかひてはぢざるは人の心のまことなりけり
めに見えぬ神の心に通ふこそ人の心のまことなりけれ

今上天皇御製

(昭和三十年) 八月十五日、那須にてよませたまへる御製おほみうた

夢さめて旅寝の床に十とせてふ昔思へば胸せまりくる

(昭和三十四年) 靖国神社九十年祭によませたまへる御製おほみうた

このそちへたる宮居の神々の国にささげしいさををぞ思ふ

（同じ年に）千鳥ヶ淵戦没者墓苑に詣でさせたまひて、よませたまへる御製おほみうた
くのためにのちささげしひとびとのことを思へば胸せまりくる

（昭和四十三年）北海道稚内公園に行幸みゆきしたまひし折、二十三年前の終戦の年八月二十日、南樺太の真岡電話局の九人の乙女、ソ連軍の上陸にあたり、最後の状況を内地に報告しつつ壮烈なる殉職を遂げしことを悼む「慰霊碑」を訪れたまひし折によませたまへる御製おほみうた
樺太に命をすてしたをやめの心を思へばむねせまりくる

祭 文

木々のしげみ深々として夏なほ涼しく、夜のしじまにしづまれるこゝ雲仙のみ山の上に今宵昭和五十二年八月八日われら集ひて、とこしへにみくにまもりますみ祖おやのみたま、はたまたみくのために尊きみいのちを捧げたまひしいくさびと、同胞、友らのみたまなごめのみ祭仕へまつらむとす。くぬちより集ひ来りし友らは、美はしき大和島根に幾千年にわたり伝はり来りし

しきしまのみちをふみわけ、くぬちにみてるまがごとのことごとを力の限り打ちはらひ正さむと、むらぎもの心かたむけ力合せて学びつとめ、講義の聴講にはた班別討論などを重ねつゝ合宿教室もはや半ばをすぎせり。

不可思議なるみくにのいのちはみ山の草木のすみずみにもみなぎり、我らひとしくみ祖のみたまのまもりをうつしく信じつゝ、大君のみことかしこみ、万世よろづよかけて世のまさみちをきりひらかむと誓ひまつらむ。今よりのちのつとめにはに、まなびやに、はたまた教へにはに心を通ひ合せつゝ、しきしまのみちいやつぎつぎにふみひらかむと、うけひまつることのよしをいましみことたちきこしめしたまへ。

天がけるみ祖のみ霊よ、願はくはつとめいそしむ我らのゆく手をまもらせ給へと、ここに第二十二回全国青年学生合宿教室参加者一同に代り、高木尚一謹み敬ひ畏み畏みも白す。

合宿最後の日

第五日目、合宿教室も最後の日を迎へた。最初の日程は、合宿運営委員長片岡健先生の挨拶に始まった。片岡さんは、「日本の国のことを真剣に考へてゐる人にめぐり合つたといふ、この合宿での体験は是非心にとめていただきたい。そして山を下りたら合宿での感動を友人に伝

へてほしい。さういふ実践を通して私達の生き方は定まってゆくのです。」と語られた。

続いて全体意見発表が行なはれた。各参加者は壇上に立って各自の思ひを述べた。合宿で受けた感銘、あるひはこの合宿から帰ってからの抱負など心のこもった感想が披露された。

その後登壇された小田村寅二郎先生は「合宿での五日間をふりかへれば、時間といふものが人の心の持ち様で実に充実した時間にもなると感じられる。時が一刻一刻刻まれてゐる中で我々が生きてゐるといふこの厳粛な事実をどうかしっかり受けとめて下さい。」「我々がここで得た心の平等と共産党の求める外的な平等との違ひを確認していただきたい。」と訴へられ、さらに「例へば合宿を経験してゐない人にとって『短歌の相互批評』は日程の一コマとして理解されよう。しかし、実はそれを体験した者にとっては相互批評をめぐって様々な心の動きがあったのです。このことと同様に歴史も外側から自分の価値基準で裁断することもできようが、その中に生きた人の言葉を読みはってゆくことによってすばらしい世界が開かれてゆくのです。」と話された。小田村先生のお話の後、班別懇談に入った。互ひに顔を合はせたのはわづか五日前のことであったが、ずっと以前からつきあってきた友のやうになつかしく感じられる。お互ひの思ひを語り合った後、感想文を執筆し、第二回目の和歌創作を行った。

愈々閉会式の時となった。

国歌「君が代」を高らかに斉唱した後、小柳陽太郎先生が主催者を代表して登壇され、「現



在の大学の風潮は、大変に乱れてゐるが、日本の民族が行くべき道ははっきりしてゐるのです。その大きな道を豊かな心をもって堂々と歩んでいただきたい。」と饒げのことはを送られた。次いで参加学生を代表して登壇した熊本大学工学部三年の原田保君は、「大学に帰っても合宿で得た感動を思ひ起こしつつ生活したい。松陰先生は『己れの地、己れの身より見を起すべし』と言はれたが、さういふ着実な生き方をしてゆきたいと思ふ。」と力強く挨拶した。続いて国文研の先生方に参加者一同で感謝の言葉を述べた後、全員で「進めこの道」(三井甲之先生作詞、信時潔先生作曲)を力強く斉唱、最後に九州大学医学部二年長沢一成君の力強い閉会宣言をもって合宿教室の幕は閉じたのであった。

福岡大学 黒 岩 真 一

バスの窓ゆ精一杯にのぼしたる友どちの手をかたくにぎりぬ
友どちの手をにぎりしめ面みれば言葉の出でず胸あつくなる
友どちをのせたるバスの動きだししらずしらずに我も走りをり
友どちは身をのりだして手を振りぬ我もバス追ひひたに手を振る

△以上、小柳 志乃夫記▽

合
宿
詠
草



妙見岳から千々石湾を望む

朝早く霧のただよふ雲仙にすがすがしくも鳥のさへづる
亜細亜大学 法 一年 佐藤 光 一

熊本大学 工 三年 原 田 保

晴れし日には阿蘇も見ゆらし峠には黄色き花の咲きてありけり
足元に広がるうまき景色をば見たく思へど霧のふかしも
張りつめし心もしばし放たれて友と語りつつ歩む楽しさ

熊本大学 法文 四年 胡麻ヶ野 克 己

降り続きし雨も上がりてひぐらしの声のさやかにみそらにひびきぬ

九州大学 工 四年 山 根 清

やはらかなる朝日受けつつはたはたと風になびきて幟のぼり立ちたり

○

熊本大学 工 四年 折 田 豊 生

宝辺先生の御話をお聴きして

たゝかひに生命さゝげし友どちの想出熱込め語りたまへる

呼びかくるごとくに「江頭」「百武」と友の名を呼び絶句したまふ
声つまらせ語りたまへる師の君のおもは定かに見えずなりくる

あふれくる涙流るままにして師の御姿をひたに見つめぬ

九州大学 工 三年 廣 木 寧

夜久先生の御講義をききて

師の君は三十年前の教へ子の遺書を静かによみたまふなり
教へ子の残せしふみを師は声をつまらせつともよみてゆかるる
妹にのこせるふみを師の君とよみてゆくうちに涙流れく

九州大学 経 二年 奈良崎 修 二

夜久先生の教へ子の遺書を読まるるを聞きて

たたかひに果てしみ友の遺されし歌読みたまふ涙ながらに
こみあぐる涙をこらへこらへして読まるる思ひ伝はりて来ぬ
聞く我もあふるる涙こらへきれず思はずまぶた閉ぢにけるかな

九州大学 法 二年 加 藤 多夏詩

夜久正雄先生の御講義を聞きて

師の君は今亡き友の遺文をば声ふるはせて読み給ひけり
師の君の亡き友思ふ御心のせつに伝はり涙あふれく
教へ子といへども今は師と呼ばむてふ師の御心の伝はりて来ぬ

小田村先生の御講義の終りて

福岡女子大学 文 三年 光 山 香奈子

レジメいただき師の御言葉を思ひつつ友らと部屋に急ぎ戻れり

足早に戻らむとするさ庭辺にうす紫の花の咲きたる

思はずも足を留めてうす紫の花をみつめぬしばしの間

風ふきてうすき花びらかそけくもゆるる姿の美しきかな

はりつめし心いつしかなごみたりうすむらさきの花ながむれば

○

和歌相互批評にて

亜細亜大学 経営 二年 遠 藤 敏 彦

言の葉の一つ一つに我友の深き思ひのあふれてをりぬ

岡山大学 教 三年 小 田 武 宏

班員の一人一人にはげめよと言はれし班長の言葉うれしも

九州大学 医 二年 古 田 耕

初めには心かよはぬ友らともつひに心の通ずる思ひす

新しき友とのしばしの語らひに講義の疲れのいやさるる思ひす

西南学院大学 法 二年 酒 村 聡 一 郎

おのもおのも心打たれし言の葉に思ひ寄せつつともに読みゆく

もろともに気迫こもれる御文をば声を合せて読むはすがしき

友どちと声を合せて読むほどに「みな同胞」の言葉浮び来

玉川大学 文 二年 加 藤 詩 麻 音

日を追つて黙りし友もほほゑみて語りかけくることのうれしさ

心から素直とならうと友の言ふふるへる心の伝はりてくる

福岡女子大学 文 一年 林 里 美

我を思ひ語り給へる友達の静かな声に耳を傾く

心より我を思へる先輩のやさしき心をいつしか感じぬ

いづくよりわきし思ひかわからねどいつしか胸の熱くなりけり

長崎大学 教 三年 藤 谷 京 子

班別討論の際に二人の友の語るをみて

ぼつぼつと声をつまらせ胸のうちを語る友らは肩ふるはせぬ

昨日まで言葉少なき友どちの口より出づるあたたかき言葉

ふつふつとまごころこめて語りたる友どちの声胸にしみいる



慰靈祭

京都産業大学 経営 三年 鈴木 幸

いなづまの光と共に祈念する我らの前にみたまたまふ

国のためいのちをすてしますらをのみこころしのび「海ゆかば」うたふ

長崎大学 経 三年 北 林 幹 雄

慰靈祭にて

日の本の神々まつる齋庭ゆにはにて読まるる御歌おごそかに聞ゆ

鹿児島大学 農 二年 網 屋 成 人

夜のつどひの折に

肩を組み力をこめて友どちと共に歌ひぬ「北辰斜ほくしんななめ」を

鹿児島鹿島の友らと共に開校歌を声の限りにはり上げにけり

久々に「北辰斜」を歌ひあひ友どちの顔晴ればれとなる

桜島の煙ふきあぐる鹿児島を友らと共に思ひ出しけり

熊本大学 工 二年 松 嶋 司 郎

夜ふけまで肩をくみつつ歌ひたる友らの肩のぬくもり忘れじ

夜の集ひの終了後ベランダに班員全員集まりて

九州大学 法 二年 緒 方 嘉 祐

友どちは風呂よりあがりてベランダで満天の星を飽かず眺むる

ベランダに班員すべて集まりて語り合ひたり星を故郷を

四日間共に過ごせる友達と語り合へるが嬉しかりけり

東京工業大学 工 三年 皿 田 宏

ベランダに出でて見上ぐればひろごれる夏の夜空の美しきかな

星空を見上げてをれば思はずも明るき星の流れゆく見ゆ

○

全体意見発表の折

早稲田大学 政経 二年 内 海 勝 彦

昨日まで口数少なき班友の今は決意を壇上で述べ

胸の内をとつとつと述ぶる班友の姿を見れば心うれしも

長崎大学 教 三年 眞 崎 典 子

後輩の合宿感想を聴きて

言の葉を選び給ひて後輩は胸の思ひを述べんとすなり

先生の御心の中に戦友の生き給へるを感じらるるといふ
吾れも又先人の思ひ内に秘め生きていきたしと語り給へる
胸の思ひ言葉とならず後輩は目頭押へ下を向くなり
後輩の言葉とならぬその思ひ吾れも心に強く刻めり

東京大学 法 四年 小 柳 志乃夫

味酒景子さんの発表を聞きて

叱りつけし子は先輩にはづかしげにあやまりぬといふ「さっき ご・め・ん・ね」と
「さっき ごめんね」と一音一音くぎりつつ智恵たらぬ子はあやまりぬといふ
先輩の教へ子を思ひてよみたまふみうたを聞けば胸のこみあぐ

× ×

大君は上むきたまひこみあぐる涙をひたにこらへましぬと
大君の幼き子らにそそがるる御心おもへば涙あふるる

福岡教育大学 教 三年 谷 口 敏 子

先輩の壇上に立ちたる姿見れば我がことのごとく心落ちつかず
一言づつ話し始むる先輩を見入りてをれば胸のつまりぬ

○

最後の班別懇談において

九州大学 工 一年 弓 立 忠 弘

今日からが新しきスタートと言ひし友のつよきことばにひきこまれゆく
合宿で学びしことをいしずゑに今日から我も学びてゆかむ
日ごと日ごと親しくなりし友どちとまた来年と別れゆかむとす

熊本大学 理 二年 那 須 三 元

最後の班別懇談の折に

おのおのの決意を皆で語り合へば頑張らむてふ力わきくる
この決意衰へぬやう帰りても手紙出さうと誓ひ合ふなり
自らの読みし書物の感想を送り合はうと誓ひあふなり

亜細亜大学 法 二年 大 塩 耕 三

最後の班別懇談のをりに

わが心に思ふがままを友どちに語りてゆけば心かよひぬ
これからも共に学ばんといふ友にわがめがしらのあつくなりくる

熊本大学 工 三年 原 田 保

もろともに過ごせし日々もはや過ぎてけふは別るる日とはなりたり

全国に別れゆくとももろともに励みゆかなむと師ののたまへり
我の手を強く握りて来年も来ますといひし友有難し

熊本大学 医 二年 有 馬 宏

合宿の終りてのちロビーで熊本で合宿に勧誘せし友に会ひて

おのが手をつよくにぎりて友どちはまじめな顔で我を見つむる
合宿に誘つてくれてありがたうといひし友の目に涙あふるる
何をかをいはむとすれど言葉出ず握手したまま友の目見つむる
熊本で一緒にやらむと去りゆきし友の姿の目に浮かびきぬ

福岡大学 法 三年 黒 岩 真 一

バスの窓ゆ精一杯にのばしたる友どちの手をかたくにぎりぬ
友どちの手をにぎりしめ面みれば言葉の出でず胸あつくなる
友どちをのせたるバスの動きだししらずに我も走りをり
友どちは身をのりだして手を振りぬ我もバス追ひひたに手を振る
空しきを感じつつ生きしをわが胸は喜びに満つまごころにふれて

長崎大学 教 一年 城 戸 佐和子

○

慰霊祭にて

亜細亜大学教授・教養部長 夜久正雄

天地も心あれやも友の宣るのりとともに神鳴りわたりつ
神々のいましめたまふか神まつるゆにはにとどろく神鳴りの音
鳴る神のふたたびみたびとどろきてこよひのまつりいよよいつかし
神々のみたまをまつる夜にはに不思議なるかな神鳴りつづく

八代市助役 加藤敏治

遠く青森の長内兄を偲びて

北国の大間のみ崎に君たちて我らが集ひ偲びませしか

君が影見えぬさびしさにぎはしく友らとともに語らひをれども

^{ながおし}長伏の病いえゆく喜びを君につげむと思ひ来にしを

^{こぞ}昨年の夏つどひのにはゆみ情のこもるみ便りたまひし君はも

今年はもつどひし友のみ名もそへ君なぐさむる便り送らむ

みちのくの友偲びつつ窓越しに眼路をおほひし霧をながむる

福岡教育大学教授 山田輝彦

味酒さんの発表をきく

ひたすらに心傾け語りゆく君がことばに涙溢れく

精薄の施設近江学園に陛下迎へしその日のことども

仰むきて涙こらへていませしとふ幸うすき子のさだめ思ひて

おんまなこしばだたきつつ幸うすき子らの楽の音聞きたまひしか

言絶えししまの中に流れけむその楽の音をしのびやまずも

榎フアミリー常務取締役

松吉基順

風はやみ仁田峠は霧こめて四方の景色の見えわかぬかも

天皇のみ歌^{すめろぎ}しるせる石碑^{いしぶみ}のたてる野岳はいづかたなるらむ

霧ふかくすめろぎのみ歌しるせる碑訪ぬるすべなく心残りぬ

高原は霧たちこめて間近なるうつぎの花の白きが眼にしむ

高原にみやまきりしま群れ生ふも花咲きをらぬが淋しかりけり

はつ夏はみやまきりしま群れ咲きて雲仙高原美しかるらむ

日立造船榎有明工場 高岡正人

中園兄の発表を聞く

玄瑞と松陰の手紙に歩むべき師弟の道を見つけ給ひし

教ふべきことどもありて教ふてふ友の言葉はきびしかりけり

たのもしき友の言の葉聞きをれば友との縁のふしぎに想ほゆ

七年前初めてこの友訪れて語り明かしし冬の夜想ほゆ

二人して杯交しくさぐさのことども語りし古き宿にて

それぞれの進み行く道違へども励みて行かんと契り結びし

今日ここに思ひのたけをせつせつと語る言の葉胸せまりくる

味酒さんの青年研究発表を聞かして

元最高裁秘書課・速記業・記録班

西川伍朔

身障児にからだ打ちつけたちむかふ若き女教師の声高ぶらず

泉ちゃんの「ご・め・ん・ね」といふその言葉わがことのごと胸とどろきぬ

司会者の「起立」の声も消ゆるがに堰切のごとく拍手鳴りやまず

言葉なく肩叩きし師の君の笑みし瞳はうるみでありき

国民文化研究会職員・事務局

永沢弘子

顔会へば笑みこぼれ来る一年に一度まみゆる人々なるに

いつの日も言葉を交はす時もなく別れ来にけりその人々と

幾年か通ひ続けし九州も今年限りとなりにけるかな

若き日のかたみとならむ南国の水の清さも空の青さも

亜細亜大学広報室・写真班

加藤幸雄

胸を打つ友の話に聞き入りてシャッター切るをしばし忘るる
ひたむきな友の姿をとらへんと我を忘れてシャッターを切る

(小柳左門 選)

あとがき

本書の編集を終へて校正の段階に入った三月一日、思ひがけもなく新聞は岡潔先生の訃を報じた。思へば先生を城島高原の合宿地にお迎へして初めて御話をお伺ひしたのが、昭和四十一年、「日本への回帰」(第一集)に収められてゐる「日本の情緒について」といふ御講義であつた。

日本の情緒とは、日本民族といふ魚が住む水のやうなものだ。だが現在その水は濁り、民族はその濁りの中であへいでゐる、このままで経過すれば遠からずして日本は亡ぶ——先生のあの日のきびしい御表情は、会場全体にみなぎつた緊張感とともに永久に忘れがたい印象として私たちの胸に焼きついてゐる。先生にこの世でお目にかかることが出来たことが何か天啓のやうに思はれた、それはまさに稀有最勝の御講義であつた。

あの日からすでに十三年の月日が流れたが、その間、日本民族を包む情緒の濁りはさらに甚しく、その中で遂に死を迎へられた先生の御心中いかばかりであつたらうか。

岡先生の御逝去と前後して、戦後三十年、待ちに待つた遺稿集「いのちささげて——戦中学徒・遺詠遺文抄」が国文研叢書第十九集として刊行、全国に配布された。これは本書の「祖国と慰霊」の中で宝辺、名越の両氏がふれてをられるが、戦前の旧制高校、専門学校、大学に漲つてゐた祖国蔑視の風潮と戦ひ、あるひは病に斃れ、あるひは戦場に命ささげた青年学徒留魂のことばの数々が集録されてゐる。(以後続刊の予定)

であるが、今回の分は戦歿学徒七名、終戦時自刃した学徒一名、病歿学徒四名、計十二名)

神洲の不滅を信じ、若いいのちを祖国にささげられた先輩のおもひを偲び、さらに岡先生の残された数々の御言葉を思へば、この乱脈を極めた祖国の現状を坐視するがごときは断じて許さるるところではあるまい。ここにこれら先人たちの御遺志を継承し、果てしらず乱れる祖国の思想學術改革のためさらに力をいたすことを御誓ひして本書編集の「あとがき」に代へたい。

なほ本書のタイトル・ページの、雲仙を中心とした風景写真はすべて、亜細亜大学、学生部の加藤幸雄氏に慌しい合宿記録写真撮影のあひ間をぬって撮っていただいたものである。心のこもった御協力に対して深く謝意を表したいと思ふ。

昭和五十三年三月

編集委員

山田輝彦
小柳陽太郎

社団法人 国民文化研究会関係図書目録

A 先師・先輩の遺著

書名	著者・編者	発行年月日	版・頁数	頒価
聖徳太子の信仰思想と 日本文化創業 (増補再版本)	黒上正一郎	四四・一〇・一五 (現在四版)	A5判 三〇四頁	〒一、八〇〇円 二、〇〇〇円
愛国の光と影 ―田所広泰遺稿集―	小田村寅二郎編	四五・三・一〇 (在庫ナシ)	B6判 五〇一頁	非売品

B 国文研叢書(新書判)

No.	書名	著者・編者	発行年月日	頁数	頒価
No. 1	古事記のいのち ―改訂版―	夜久正雄	四一・三・二五 (原版) 四八・一一・一 (改訂版)	三〇七頁	〒七〇〇円 一、一〇〇円
No. 2	日本精神史鈔 ―親鸞と実朝の系譜―	桑原暁一	四一・一一・二五 (在庫ナシ)	二七九頁	非売品

No.11	No.10	No. 9	No. 8	No. 7	No. 6	No. 5	No. 4	No. 3
続 日本精神史鈔 —花山院とその系譜—	欧米名著邦訳(明治)集 —文献資料集—	歴史と人生観 —マルクス主義の超克—	日本思想の系譜 —文献資料集(近代その二)	日本思想の系譜 —文献資料集(近代その一)	日本思想の系譜 —文献資料集(近世その二)	日本思想の系譜 —文献資料集(近世その一)	日本思想の系譜 —文献資料集(古代・中世)	弁証法批判の歴史
桑原 暁一	小田村寅二郎編	川井 修治	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	高木 尚一
四五・一二・二五	四五・三・二〇	四三・三・一五	四四・三・二五	四四・三・二五	四三・一〇・一	四三・二・一	四二・三・二五	四二・二・二五
三一〇頁	四八三頁	二八三頁	三八一頁	四〇三頁	四〇九頁	三一七頁	三〇九頁	二四一頁
非売品	〒五〇〇円 一〇〇円	〒六〇〇円 一〇〇円	〒七二〇円 一〇〇円	〒七八〇円 一〇〇円	〒七八〇円 一〇〇円	〒六二〇円 一〇〇円	〒六〇〇円 一〇〇円	〒五〇〇円 一〇〇円

No.19	No.18	No.17	No.16	No.15	No.14	No.13	No.12
いのちささげて ―戦中学徒・遺文遺詠抄―	明治天皇御集研究	日本における ―マルクス主義批判論集―	国史の地熱 ―聖徳太子と楠氏の精神―	白村江の戦 ―七世紀・東アジアの動乱―	ヨーロッパにおける マルクス主義批判論集	短歌のあゆみ ―続「短歌のすすめ」―	短歌のすすめ
国民文化研究会編	三井甲之著	戸田義雄編	桑原暁一	夜久正雄	桑原暁一編	山夜久田輝彦	山夜久田輝彦
五三・二・一五	五二・二・一〇	五一・三・一〇	四九・一〇・二五	四九・一・一〇	四八・二・一〇	四六・一二・一	四六・四・一
四四九頁	三五四頁	三二〇頁	二七九頁	二八九頁	三二八頁	三一六頁	三〇九頁
非売品	〒七〇〇円 一六〇円	〒七〇〇円 一六〇円	〒七〇〇円 二二〇円	〒五〇〇円 一六〇円	〒五〇〇円 一六〇円	〒三五〇円 一六〇円	〒六〇〇円 一六〇円

C 「合宿教室」レポート

回数	開催地 (人員)	年	書名	主要講師	版・頁数	定価
1	霧島 (九二名)	31	混迷の時代に指標を求めて	広田洋二・日下藤吾 夜久正雄	A5判 八八頁	〒一五〇円 〒一三〇円
2	福岡 (二七名)	32	民族自立のために	竹山道雄・高山岩男 浅野晃	A5判 五三頁	〒五〇円 〒一三〇円
(2)	岡山	32	民族復興の根底を培うもの	木下尚一・彪・石村暢五郎 高木尚一	新書判 一三三頁	〒一〇〇円 〒一三〇円
3	佐賀 (七二名)	33	民族の明日を求めて	勝部真長・木下彪 森三十郎	新書判 二五〇頁	〒二〇〇円 〒一三〇円
4	阿蘇 (一六〇名)	34	国民同胞感の探求	花田大五郎・中山優 野口恒樹	B6判 三六五頁	〒五〇〇円 〒一〇〇円
5	雲仙 (二〇〇名)	35	続国民同胞感の探求	木内信胤・花田大五郎 佐藤慎一郎	B6判 四三三頁	〒五六〇円 〒二〇〇円
6	雲仙 (二〇八名)	36	続々国民同胞感の探求	小林秀雄・木内信胤 津下正章	B6判 三二五頁	〒五〇〇円 〒一〇〇円

D 「合宿教室」感想文集（非売品）

（国民同胞感の探求三部作は「理想社」より刊行）

21	20	19	18	17	16
佐世保 (三七二名)	阿蘇 (四三五名)	霧島 (五二八名)	雲仙 (四三三名)	阿蘇 (四〇二名)	霧島 (三〇二名)
51	50	49	48	47	46
日本への回帰 ―第十二集―	日本への回帰 ―第十一集―	日本への回帰 ―第十集―	日本への回帰 ―第九集―	日本への回帰 ―第八集―	日本への回帰 ―第七集―
木内 信胤・村松 剛	木内 信胤・福田恆存	小林 秀雄・木内 信胤	木内 信胤・村松 剛	木内 信胤・胡 蘭 成 山本 勝市	木内 信胤・戸田 義雄 村松 剛
新書判 二八五頁	新書判 三二五頁	新書判 三〇六頁	新書判 二八九頁	新書判 三〇六頁	新書判 三二二頁
¥五〇〇円 一〇円	¥五〇〇円 一〇円	¥五〇〇円 一〇円	¥五〇〇円 一〇円	¥三〇〇円 一〇円	¥三〇〇円 一〇円

第十回 「合宿教室」参加者感想文集 三一五名	書 名	編 者	発行年月日	版・頁数
		国民文化研究会編	四〇・一〇・二〇	A ⁵ 判 八〇頁

第十一回	「合宿教室」参加者感想文集	二四〇名	国民文化研究会編	四一・一〇・五	A5判 一四〇頁
第十二回	「合宿教室」参加者感想文集	三三六名	国民文化研究会編	四二・一一・五	A5判 一二〇頁
第十三回	「合宿教室」参加者感想文集	三三三名	国民文化研究会編	四三・一〇・一〇	A5判 一一八頁
第十四回	「合宿教室」参加者感想文集	四〇三名	国民文化研究会編	四四・一〇・二〇	A5判 一三六頁
第十五回	「合宿教室」参加者感想文集 —現代知性への警鐘—	四九一名	国民文化研究会編	四五・一〇・三〇	A5判 二一八頁
第十六回	「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	三〇二名	国民文化研究会編	四六・一一・一〇	A5判 一二六頁
第十七回	「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	四〇二名	国民文化研究会編	四七・一〇・三〇	A5判 一六四頁
第十八回	「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	四三三名	国民文化研究会編	四八・一〇・二〇	A5判 一七七頁
第十九回	「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	五二八名	国民文化研究会編	四九・一〇・三〇	A5判 二〇〇頁

第二十回 「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて— 四三—五名	国民文化研究会編	五〇・一〇・二〇	A5判 一六七頁
第二十一回 「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて— 三七—二名	国民文化研究会編	五一・一〇・二〇	A5判 一五一頁
第二十二回 「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて— 三三—二名	国民文化研究会編	五二・一〇・二五	A5判 一五六頁

E 海外派遣レポート（非売品）

書 名	編 者	発行年月日	版・頁数
日韓・海と河の交流 （日韓交流レポート）	浜田 収二郎	四三・六・一	A5判 一一二頁
香港・マニラ・ミンダナオ巡訪団 レポート	川井 修治 田 収二郎	四四・一一・二九	A5判 八〇頁

F その他

書名	著者・発行者	版・頁数	定価
<p>(資料) 九州地区国立大学紛争の体験記録 — 教官側の発言 —</p>	<p>(昭和四十六年十月) (国民文化研究会発行)</p>	<p>A5判 三三二頁</p>	<p>非売品</p>
<p>歌よみに与ふる書・他四編</p>	<p>正岡子規 (国民文化研究会発行)</p>	<p>新書判 一二二頁</p>	<p>(品切)</p>
<p>天皇と天皇制についての基本的思考</p>	<p>小田村寅二郎・夜久正雄 (斑鳩会発行)</p>	<p>新書判 一〇七頁</p>	<p>(品切)</p>
<p>今上天皇御歌解説 (附) 万葉集論</p>	<p>三井甲之 (斑鳩会発行)</p>	<p>新書判 一五七頁</p>	<p>(品切)</p>
<p>明治・大正・昭和 「謹選 詔勅集」</p>	<p>(斑鳩会発行)</p>	<p>新書判 八五頁</p>	<p>一三三〇円 一二〇〇円</p>
<p>式典曲「神洲不滅」 行進曲「進めこのみち」</p>	<p>三井甲之作曲 信時潔作詞 — 日本学生協会の歌 —</p>	<p>A5判 各四頁</p>	<p>各一〇〇円 一〇〇円</p>

G 関係図書

書名	著者・発行者	版・頁数	定価
<p>新輯 日本思想の系譜(上・下) —文献資料集—</p>	<p>小田村寅二郎編 (時事通信社)</p>	<p>A5判 (上)八五七頁 (下)九一二頁</p>	<p>上・下各 三、〇〇〇円</p>
<p>日本思想の源流 —歴代天皇を中心に—</p>	<p>小田村 寅二郎 (日本教文社)</p>	<p>四六判 三〇五頁</p>	<p>八五〇円</p>
<p>THE KOJIKI IN THE LIFE OF JAPAN (國文研叢書 No. 1 「古事記のこゝろ」の翻訳)</p>	<p>(訳者)G. W. ROBINSON [THE CENTRE FOR EAST ASIAN CULTU- RAL STUDIES]</p>	<p>B6判 二〇八頁</p>	
<p>歴代天皇の御歌 —初代から今上陛下まで二千首—</p>	<p>小田村 寅二郎 柳 陽太郎 (日本教文社)</p>	<p>四六判 四三八頁</p>	<p>一、七〇〇円</p>
<p>歌人・今上天皇 △増補改訂△</p>	<p>夜久正雄 (日本教文社)</p>	<p>四六判 三三三頁</p>	<p>一、五〇〇円</p>

H 月 刊 誌

誌 名	創 刊 ・ 号 数	版 ・ 頁 数	定 価
月刊「国民同胞」	昭和三十六年十一月創刊 昭和五十三年三月現在一九七号	B 5 判 八頁	年間 一、〇〇〇円 共 七
「国民同胞」合本 第一卷	第一号～第五〇号	各卷四〇〇頁	三卷揃 四〇〇〇円 特別 (残部僅少)
同 第二卷	第五一号～第一〇〇号		
同 第三卷	第一〇一号～第一五〇号		

1 (分科会) ・ 教育内容は正促進委員会編著

書 名	発 行 年	版 ・ 頁 数
現下の学校教育の内容を正すために急務を要する問題点	四十七年十二月	B 5 判・二五頁

— 日本への回帰 —

(第13集)

昭和五十三年三月二十三日発行

定価 五〇〇円

〒一六〇円

編者

大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

編集委員代表

小田村寅二郎

発行所

社団法人 国民文化研究会

東京都中央区銀座

七一〇一八柳瀬ビル

振替東京六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替へいたします

